

---

---

神奈川県立近代美術館

---

年2010報

---

ANNUAL REPORT

---

---



## あいさつ

年報2010年度版を刊行いたします。

年報は、当館の出版物のなかでも、当館の美術館活動を正確に記録し、公開していくためのツールとして重要な位置を占めています。一組織として葉山館、鎌倉館、鎌倉別館の三館体制で美術館活動を展開している、多岐にわたる全体像を年ごとに整理し報告するものです。こうした基礎的な情報の集積は、現在、ますます社会的な要請と注目の対象になりつつある(デジタル化を含む)アーカイブの基本的な枠組みとして、今後、機能していくことになるでしょう。なお、美術館公式ホームページの「刊行物」のページ(<http://www.moma.pref.kanagawa.jp/museum/publication.html>)を開いていただくと、2007年度以降の年報をPDFファイルでご覧いただくことができます。

本年報の目次にあるように、当館の活動は、「展覧会活動」「教育普及活動」「作品蒐集管理活動」「調査研究活動」を四本の柱として、全体を管理運営することによって成り立っています。

2010年の展覧会としては、葉山館は、ロシアを代表するアニメーション作家であるノルシュテイン&ヤールブソフの大規模な展覧会「話の話」を皮切りに5本、鎌倉館は、「鬼と遊ぶ 渡辺豊重展」など5本、鎌倉別館は収蔵品の紹介を中心に4本、計14本の展覧会を開催いたしました。浜田知明、渡辺豊重、岡崎和郎、保田春彦の現代日本を代表する作家たちの個展。そして、中堅若手の現代日本作家を紹介する、葉山館でのグループ展「プライマリー・フィールド II」。歴史上の重要な作家たちを調査した最新の成果を反映させた古賀春江、辻晉堂、山下菊二。さらに、ナイジェリアで活動する世界的な彫刻家エル・アナツイの、世界で最初の大規模な回顧展。アニメーションを含む多様な表現世界を、日本に限らずに、個展という形式で紹介することのできた年であったと思います。

教育普及では、夏休み期間を利用して、渡辺豊重展を機会に、鎌倉館に重点を置きながら、さまざまなワークショップを、作家の全面的な協力を得て地域の教育機関とも密接に連携しながら展開しています。

作品蒐集では、購入と寄贈によって、計480点の作品がコレクションに加わるようになりました。まとまったかたちでは、吉村弘、山下菊二、浜田知明、柳原義達ら作品の寄贈があり、上記個展を開催した作家たちの作品も購入することができました。修復では、報告にあるように80点を越える作品を蘇らせることができました。こうした蒐集と修復の活動の積み重ねが、2010年度の「ひと | HITO」展(鎌倉館)のような所蔵品を活用したテーマ展を可能にしてくれるのです。

調査研究に関しては、当年報では、現在準備中の「イリヤ・レーピン」展に関する基礎調査、寄贈作品に関する論考を掲載いたします。

アナツイ展、辻晉堂展、山下菊二展の開催中に「3.11」東日本大震災が起きました。当館では被害はなかったものの、三館とも休館を一時余儀なくされました。その後の計画停電も通常の運営を困難にしました。地震、津波、原発事故という未経験の災害の連鎖は、いまだにその「余波」を当館の活動にまで及ぼしています。当館スタッフも文化財レスキューに参加しています。被災地の一刻も早い復興を願わずにはいられません。また、災害への備えも怠ることなく、気を引き締めなければならないと思っております。

最後になりましたが、当館の活動に日頃よりご理解とご協力を頂いている関係各位に、あらためて心より御礼申し上げます。

2012年2月

神奈川県立近代美術館館長 水沢 勉

## 目次

あいさつ	3
展覧会活動	
葉山館	5
鎌倉館	10
鎌倉別館	15
会期・観覧者数一覧	19
教育普及活動	
受講・参加プログラム一覧(講演会・ギャラリートーク・ワークショップ等)	20
研修等受入プログラム一覧(研修・実習・団体観覧・出張授業等)	22
美術館活用推進委員会	22
美術図書室	22
美術館紹介・広報掲載実績	23
刊行物(展覧会図録を除く)	24
2010年度の教育普及活動	26
作品蒐集管理活動	
購入・寄贈状況、寄託状況	27
新収蔵作品一覧	27
2010年度新収蔵作品図版	39
館外貸出作品一覧	44
修復報告	48
修復作品一覧	51
修復作品図版	52
調査研究活動	
研究・調査報告	
浜田知明の近作デッサンについて [橋秀文]	53
日本におけるイヤ・レーピンの受容史 [榎山昌夫]	55
調査研究・執筆等の発表	58
外部資金の活用	58
講師派遣・外部委員等就任	58
運営・管理報告	
概況、収入・支出の状況	60
関係法規	61
組織・職員一覧	63

## 展覧会活動

651

話の話——ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン&ヤールブソフ

Tale of Tales: Yury Norshtein & Francheska Yarbusova

「話の話」で知られるロシアを代表するアニメーション作家ユーリー・ノルシュテイン(1941-)とその作品の多くの芸術監督を務めたフランチェスカ・ヤールブソフ(1942-)夫妻の過去最大の展覧会。

主催: 神奈川県立近代美術館、ユーリー・ノルシュテイン財団、東京新聞

会期: 2010年4月10日(土)~6月27日(日)

休館日: 月曜日(5月3日(祝)は開館)、4月30日(金)、5月6日(木)

開催日数: 67日

出品総点数: 878点

総観覧者数: 15,289人

担当学芸員: 榎山昌夫、水沢勉、土居由美

### 関連企画

- 1) ノルシュテインのアニメーション作品の上映(会期中毎日) 「25日—最初の日」「キツネとウサギ」「霧の中のハリネズミ」「アオサギとツル」「話の話」「冬の日」「外套」
- 2) ギャラリートーク 5月13日(木)、6月17日(木)

### 関連記事

#### ▼展評・解説など:

水沢勉「馬と川の中のハリネズミ—話の話—ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン&ヤールブソフ ㊤」『東京新聞』2010年5月4日、20面

土居由美「日曜日—話の話—ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン&ヤールブソフ ㊤」『東京新聞』2010年5月5日、20面

榎山昌夫「森の中のオオカミの子と揺り籠—話の話—ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン&ヤールブソフ ㊤」『東京新聞』2010年5月7日、22面

山田麻未「アニメーション—ロシアの巨匠展—近代美術館葉山」『東京新聞』5月15日、24面

金子徹「アニメーション—ノルシュテインの世界—幻想的で詩情豊か」『赤旗』2010年5月23日、16面

山村浩二「ロシア・アニメーションの巨匠—ノルシュテインの世界—圧倒的な幻想空間」『東京新聞』2010年5月27日夕刊、9面

榎田恵子「神奈川県立近代美術館 葉山 話の話—ノルシュテイン&ヤールブソフ—切り絵アニメ—奥深い世界」『朝日新聞』2010年6月2日夕刊、4面

田中弘子「話の話展」『公明新聞』2010年6月19日、6面

「話の話—ロシア・アニメーションの巨匠—ノルシュテイン&ヤールブソフ」『月刊ロシア通信』121号、2010年5月、p.16

C.B.Liddel 「話の話」『Metropolis』846号、2010年6月11日、p.18

▼展覧会紹介: 1紙3回/6誌8回

▼情報掲載: 5紙45回/14誌18回

### カタログ

26.5×19.5cm、184ページ、販売価格2,500円

図版数: 多色421図 単色挿図155図(映像作品からの98図含む)

編集・執筆: 榎山昌夫、水沢勉、土居由美、影山千夏、池澤廣和、江尻潔

編集協力: 柴田勢津子、井鍋雄介

翻訳: 児島宏子

制作: リーヴル

デザイン: 梯耕治

発行: 株式会社イデッパ

### 謝辞、目次、ごあいさつ

とりわけ親愛なる日本の皆さま! (ユーリー・ノルシュテイン)

ユーリー・ノルシュテインとフランチェスカ・ヤールブソフについての話(榎山昌夫)

ノルシュテインとヤールブソフの自画像(解説: 榎山昌夫)

I 25日—最初の日(解説: 榎山昌夫)

II ケルジネツの戦い(解説: 榎山昌夫)

III キツネとウサギ(解説: 江尻潔)

IV アオサギとツル(解説: 江尻潔)

V 霧の中のハリネズミ(解説: 影山千夏)

VI 話の話(解説: 池澤廣和)

VII 外套(解説: 水沢勉)

VIII 冬の日(解説: 池澤廣和)

ノルシュテイン&ヤールブソフ略年譜(編: 榎山昌夫、児島宏子)

邦語文献目録(編: 影山千夏)

出品作品リスト



ポスター



カタログ表紙

### 担当学芸員コメント

4半世紀前に初めて見た「話の話」の制作者の展覧会を手掛けることになった。準備は予想通りに難航し、結局作品が日本に届いたときには展覧会初日まで1週間を切っていた。それから額装作業と並行しながら、学芸員総出で陳列して無事に開幕した。マケット(セル画を貼った複数のガラス板を収めた箱)の照明には、モスクワのノルシュテインのアトリエにあったのと同じような古いデスクライトを用いた。(榎山昌夫)

652

版画と彫刻による哀しみとユーモア 浜田知明の世界展

The World of HAMADA Chimei : Elegy and Humor in Prints and Sculptures

版画家で彫刻家である浜田知明(1917-)の、戦争の悲惨さと軍隊の理不尽さを描いた《初年兵哀歌》のシリーズから現代人の孤独や滑稽さを風刺した作品までを展示。

主催:神奈川県立近代美術館

会期:2010年7月10日(土)~9月5日(日)

休館日:月曜日(7月19日(祝)は閉館)、7月20日(火)

開催日数:50日

出品総点数:337点

総観覧者数:7,448人

担当学芸員:橋秀文、稲庭彩和子

▼展覧会紹介:10誌14回

▼情報掲載:4紙26回/12誌17回

カタログ

29.0×22.7cm 136ページ、販売価格1,800円

多色250図、単色1図

編集・発行:神奈川県立近代美術館

翻訳:小川紀久子

製作:求龍堂

関連企画

1)講演会 8月7日(土)「浜田知明の芸術」橋秀文

2)ギャラリートーク 7月24日(土)、8月21日(土)

3)先生のための特別鑑賞の時間 7月24日(土)

関連記事

▼展評・解説など:

井崎憲「浜田知明の世界展」『毎日新聞』6月22日、23面

藤田一人「近代絵画の名品集めた回顧展が目白押し」『公明新聞』2010年7月17日、6面

アラユキヒロ「版画と彫刻による哀しみとユーモア 浜田知明の世界展 日本の土壌を超えた文明批判」『赤旗』2010年7月23日、9面

小川雪「人間の本性見据え 92歳 版画家・彫刻家 浜田知明展 戦争体験 哀愁 ユーモア」『朝日新聞』2010年7月28日夕刊、3面

平井智子「熊本市の版画家 彫刻家 浜田知明さんの展覧会 神奈川県立近代美術館 葉山 人間 造形 飽くなき探求心」『熊本日日新聞』2010年8月6日、10面

金子徹「戦争への憎しみ 創作の力に続いて 浜田知明さん 版画と彫刻」『赤旗』2010年8月8日、31面

岸桂子「92歳の版画家 彫刻家 浜田知明さんが個展 戦争と向き合う姿勢今も」『毎日新聞』2010年8月11日夕刊、4面

藤田一人「浜田知明の世界展 戦後への問いかけ」『東京新聞』2010年8月27日夕刊、9面

「注目の作家 浜田知明」『版画芸術』148号、2010年6月、pp.70-76

「特集 2010年年末回顧アンケート 美術界で活躍する人々に聞く」『新美術新聞』1235号、2010年12月11日、p.10

橋秀文「浜田知明 その芸術の軌跡 浜田知明展」『版画芸術』148号、2010年6月、p.79

日夏露彦「浜田知明の世界展 暗愚を笑う 浜田知明の諷刺アート」『思想運動』2010年8月1日、p.10

酒井忠康「夏が来ると 浜田知明 夜行軍、山を行く砲兵隊」『美術ペン』131号、2010年8月、p.125

あいさつ、謝辞、目次

浜田知明の人間凝視の根—展覧会に寄せて(山梨俊夫)

浜田知明 その芸術の秘密(橋秀文)

The World of HAMADA Chimei : Elegy and Humor in Prints and Sculptures(Summary)

カタログ 1章 (初年兵哀歌)シリーズを中心に

カタログ 2章 1956年から『わたくしのヨーロッパの印象記』まで

カタログ 3章 1970年以降2000年まで(哀しみとユーモア)

カタログ 4章 彫刻

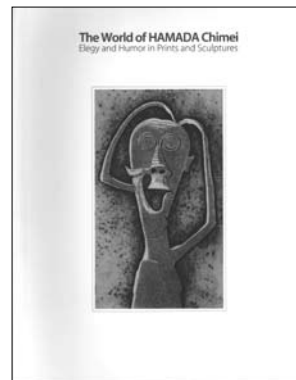
カタログ 5章 初期油彩と最近のデッサン

年譜、主要参考文献

作品目録



ポスター



カタログ表紙

担当学芸員コメント

2010年までに制作された版画と彫刻を全点展示できたことが最大の特色である。油彩画やデッサンに不出品のものがあるが、現在、可能な限りの最大規模の展覧会となった。さらに、近年制作された彫刻やデッサンが出品されたのもこの展覧会の収穫であろう。(橋秀文)

653

## 新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌

## KOGA Harue: A Retrospective

大正末から昭和初期にかけて活躍した洋画家古賀春江(1895-1933)の回顧展。古賀は、キュビズムやシュルレアリスムなど、ヨーロッパの潮流を貪欲に学び、また川端康成ら文学者や詩人たちの交友を通し、めまぐるしく作風を変えていった。今回は絵画と共に作られた彼の詩にも注目し、新たな古賀春江像を提示した。

主催:神奈川県立近代美術館、東京新聞

特別協力:東京国立近代美術館

会期:2010年9月18日(土)~11月23日(火・祝)

休館日:月曜日(ただし9月20日(祝)、10月11日(祝)は開館)、9月21日(火)、9月24日(金)、10月12日(火)、11月4日(木)

開催日数:55日

出品総点数:193点+資料34点

総観覧者数:11,291人

担当学芸員:長門佐季、橋秀文、平井鉄寛

▼展覧会紹介:1紙1回/10誌16回

▼情報掲載:6紙38回/18誌27回

## カタログ

25.9×19cm、224ページ、販売価格2,000円

多色248図、多色挿図4図、単色挿図282図

編集・執筆:森山秀子、伊藤絵里子(石橋財団石橋美術館)、山梨俊夫、長門佐季、橋秀文、平井鉄寛(神奈川県立近代美術館)

翻訳:小川紀久子

制作:印象社

発行:東京新聞

ごあいさつ、謝辞、目次

前衛画家、詩人としての古賀春江(森山秀子)

Tracing the Life of the Artist KOGA Harue- A Summary of the Exhibition

図版

第1章 センチメンタルな情調 1919-1920年

第2章 喜ばしき船出 1921-1925年

第3章 空想は羽搏き 1926-1928年

第4章 新しい神話 1929-1933年

古賀春江と初期のスケッチブック—北原白秋への憧憬から旅立ちへ(橋秀文)

古賀春江と中洲風景—福岡初の二科展に際して(伊藤絵里子)

浮遊するイメージ—古賀春江(長門佐季)

絵を読み、詩を見る(森山秀子)

古賀春江年譜(森山秀子編)

主要文献(石橋美術館、神奈川県立近代美術館)

出品目録

## 関連企画

1)講演会 9月19日(日)「古賀春江の絵画と詩」森山秀子

11月6日(土)「古賀春江の超現実主義絵画」速水豊

2)ギャラリートーク 10月2日(土)、10月9日(土)

3)教育関係者のための特別講演会と展覧会観覧 11月20日(土)「子どもの美術とアウトサイダー・アート 生と芸術への問いかけ」太田泰人

4)先生のための特別鑑賞の時間 9月25日(土)

## 関連記事

▼展評・解説など:

高階秀爾「古賀春江の全貌展 前衛精神の底に爽やかな叙情性」『毎日新聞』2010年7月15日夕刊、9面

西正之「美の履歴書169 画面を区切ったわけ「海」古賀春江」『朝日新聞』2010年8月25日夕刊、2面白石知子「古賀春回顧展 石橋美術館 絵と詩 膨らむ芸術世界」『読売新聞』2010年8月31日、16面

海野弘「新しい神話がはじまる 古賀春江の全貌 絵画と文学 超現実的な対話」『東京新聞』2010年9月6日、4面

橋秀文「婦人像 新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌 ①」『東京新聞』2010年10月5日、24面

平井鉄寛「素朴な月夜 新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌 ②」『東京新聞』2010年10月6日、20面

窪田直子「『超現実』の源泉に迫る」『日本経済新聞』2010年10月6日、40面

長門佐季「海 新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌展 ③」『東京新聞』2010年10月7日、20面

高橋睦郎「日本近代表現者の宿命 神奈川県立近代美術館 古賀春江の全貌 から」『東京新聞』2010年11月12日夕刊、7面

「特集 2010年年末回顧アンケート 美術界で活躍する人々に聞く」『新美術新聞』1235号、2010年12月11日、10面



ポスター



カタログ表紙

## 担当学芸員コメント

画家の出身地である久留米の石橋美術館との共同企画によって、全貌と銘打つに相応しい規模の古賀春江展が実現した。今回は画家であると同時に詩人でもあった古賀春江の側面にも注目し、絵画と詩をあわせて鑑賞できるように展示した。葉山館での近代日本洋画家の個展は初めてであったが、葉山館展示室の広い空間での配置は、鎌倉館での開催とは異なる新しい近代美術の展覧会になったのではないかと思う。(長門佐季)

654

プライマリー・フィールドⅡ 絵画の現在—七つの〈場〉との対話

Primary Field II

新鮮な感覚を煌めかせ現在活躍中の画家たち、高橋信行(1968-)、小西真奈(1968-)、保坂毅(1980-)、三輪美津子(1958-)、東島毅(1960-)、伊藤存(1971-)、児玉靖枝(1961-)による絵画作品を展示。7名の現代画家による本展は、連続した7つの展示ブースを訪れて、来館者の方がそれぞれ、現在の絵画から立ち上がり、響きあう何かを発見し、21世紀の絵画の新たな課題を感取できる展覧会。

主催: 神奈川県立近代美術館

協賛: 資生堂

会期: 2010年12月4日(土)~2011年1月23日(日)

休館日: 月曜日(ただし1月10日(祝)は開館)、12月24日(金)、  
12月29日(水)~1月3日(月)、1月11日(火)

開催日数: 38日

出品総点数: 103点

総観覧者数: 4,830人

担当学芸員: 是枝開、稲庭彩和子

#### 関連企画

1) 沢山遼氏(美術批評家)と是枝開(担当学芸員)によるギャラリー・ツアー 12月23日(木・祝)

2) ギャリートーク 12月18日(土)、12月25日(土)、2011年1月15日(土)、1月23日(日)

3) 先生のための特別鑑賞の時間 12月25日(土)

#### 関連記事

▼展評・解説など:

中井康之「アート解剖学 東島毅「思惟の光」精神性感じさせる圧倒的なスケール感」『京都新聞』2010年12月25日、8面

沢山遼「脱中心化された場所 プライマリー・フィールドⅡ 絵画の現在—七つの〈場〉との対話展」『美術手帖』949号、2010年3月、pp.226-228

岸桂子「絵画の原初を模索、確認 プライマリー・フィールドⅡ」『毎日新聞』2011年1月4日夕刊、4面

▼展覧会紹介: 4紙4回/9誌10回

▼情報掲載: 6紙29回/12誌15回

#### カタログ

30.7×23cm、128ページ、販売価格2,000円

多色92点、単色挿図15図

編集: 神奈川県立近代美術館

デザイン: 桑畑吉伸

製作: 求龍堂

発行: 神奈川県立近代美術館

謝辞、あいさつ、目次

プライマリー・フィールド—原初的な場/基本的な場(是枝開)

インタヴュー 高橋信行、小西真奈、保坂毅、三輪美津子、東島毅、伊藤存、児玉靖枝(聞き手 是枝開)

カタログ

作家解説、作家略歴、展覧会歴、主要参考文献

Abridged Chronology

作品目録



ポスター



カタログ表紙

#### 担当学芸員コメント

2007年に開催された「プライマリー・フィールド」展のシリーズ企画第2弾として、今回は中堅・若手の画家7名で構成。7名の作家の作品の連鎖が、リズムカルな空間の広がりを持つような展示を心がけた。図録では今回も7名の作家の自作についての考え、制作の過程や背景、あるいは個々の作品の具体的構造について、インタヴューを事前に行い掲載した。(是枝開)



655

## 彫刻家エル・アナツイのアフリカ

## A Fateful Journey: Africa in the Works of El Anatsui

彫刻家エル・アナツイ(1944年ガーナ生まれ、ナイジェリア在住)の、日本はもとより世界的にも大規模な回顧展。近年、大量のワインやアルコール飲料の瓶のキャップ・シールなどの廃材を銅線で繋いで編み上げたメタル・タペストリーのインスタレーションで知られる彼の作品を、新作のタペストリーと、旧作の木彫とで紹介し、さらに国立民族学博物館所蔵の西アフリカ文化の資料類をあわせて展示した。

主催: 神奈川県立近代美術館、国立民族学博物館、読売新聞社、美術館連絡協議会

後援: 外務省

協賛: ライオン、清水建設、大日本印刷

協力: ルフトハンザ カーゴ AG

会期: 2011年2月5日(土)～3月27日(日)

休館日: 月曜日(ただし3月21日(祝)は開館)、3月12日(土)(東日本大震災のため)、3月22日(火)

開催日数: 43日

出品総点数: 89点

総観覧者数: 6,261人

担当学芸員: 水沢勉、朝木由香

## 関連企画

- 1) アーティストトーク 2月5日(土) 講師: エル・アナツイ、聞き手: 川口幸也
- 2) 映画上映 2月26日(土)、3月19日(土) 『エル・アナツイのアート 叩く・ぶつける・折り曲げる』(監督: スーザン・ヴォーゲル、2010年)
- 3) ミュージアム・コンサート 2月11日(金・祝) 「OCHI BROTHERS アフリカン・サウンド×エル・アナツイ」(文化庁支援事業) 出演: OCHI BROTHERS 参加ゲスト: 神奈川県立岩戸養護学校生徒有志
- 4) ワークショップ 2月9日(水)、10日(木) 「音でつながる、私とアフリカ in 葉山」(文化庁支援事業) 神奈川県立岩戸養護学校生徒、講師: OCHI BROTHERS
- 5) ギャラリートーク 2月19日(土)、3月24日(木)
- 6) 先生のための特別鑑賞の時間 2月19日(土)

## 関連記事

## ▼展評・解説など:

- 三田晴夫「風土に根ざす特異な造形美 エル・アナツイ展」『毎日新聞』2011年2月10日夕刊、5面  
朝木由香「変幻自在 木片レリーフ 彫刻家エル・アナツイのアフリカ ①」『読売新聞』2011年2月26日、34面  
土居由美「葉山の風景も作品の一部 彫刻家エル・アナツイのアフリカ ②」『読売新聞』2011年2月26日、32面  
水沢勉「廃品一転無比の存在感 彫刻家エル・アナツイのアフリカ ③」『読売新聞』2011年2月27日、34面  
藤島俊会「文化時評 彫刻家エル・アナツイのアフリカ」『神奈川新聞』2011年3月4日、6面  
中村秀樹「西欧美術 超克の可能性 彫刻家エル・アナツイのアフリカ展」『東京新聞』2011年3月4日夕刊、7面  
小川雪「廃品の力 詩的に紡ぐ 伝統取り入れ現代批評」『朝日新聞』2011年3月9日夕刊、3面  
水沢勉「彫刻家エル・アナツイのアフリカ アートと文化をめぐる旅」『みんぱく』396号、2010年9月、p.6  
川口幸也「圧倒的な出現性—エル・アナツイと現代美術」『美連協ニュース』108号、2010年11月、p.17  
稲賀繁美「彫刻から廃品再生金属織物 「エル・アナツイのアフリカ」展に寄せて」『あいだ』178号、2010年11月20日、pp.21-30



ポスター



カタログ表紙

## 担当学芸員コメント

大阪の国立民族学博物館から巡回を開始した大規模な回顧展を葉山館で開催するに当たって、エル・アナツイ氏本人に、事前に葉山館の下見をお願いし、葉山館の空間特性を活かした展示プランを議論し、練りあげた。アナツイ氏は、ベルリン、大阪と続く、展示のあとで、体調を崩しながらも、さまざまなアイデアを提供してくれた。とりわけ、エントランスのスペースに《重力と恩寵》を通常の横長ではなく、縦長に展示するという驚くべき発想で担当者を驚かせた。展示の場にもアナツイ氏に立ち会っていただけのも得難い経験であった。会期中に東日本大震災に見舞われたが、幸い来館者にも作品にも建築にも損傷はなく、その後の計画停電の制限にも拘わらず来場してくださった方々が、長時間、包み込むようなアナツイの世界に静かに浸っていたのが印象的であった。(水沢勉)

水沢勉「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」『月刊展覧会ガイド』2011年2月、p.11

アライヒロユキ「躍動する造形に潜む批評の眼 彫刻家エル・アナツイのアフリカ」『週刊金曜日』838号、2011年3月11日、p.45

板垣真理子「見る者を圧倒しない、巨大な壁 彫刻家エル・アナツイのアフリカ」『MUSIC MAGAZINE』43巻4号、2011年4月、p.211

水沢勉「2010年度美連協大賞・奨励賞『彫刻家エル・アナツイのアフリカ』」『美連協ニュース』110号、2011年5月、p.6

▼展覧会紹介: 1紙2回/15誌20回

▼情報掲載: 6紙27回/12誌18回

## カタログ

28.6×21.7cm、236ページ、販売価格2,240円

多色161図、単色挿図66図

編集: 川口幸也、竹沢尚一郎、松本尚之、水沢勉、朝木由香、中村誠、渋谷拓

編集協力: 国立民族学博物館

制作: 株式会社エヌ・シー・ビー

印刷: 日本写真印刷株式会社

発行: 読売新聞社、美術館連絡協議会

翻訳: (英和) 竹沢尚一郎、松本尚之、渋谷拓、安永麻里絵、(和英) スタンリー・アンダーソン、ホリー・バートン

あいさつ/Foreword、目次/Contents、謝辞/Acknowledgements

エル・アナツイのアフリカ—複数の語り共存する場への試み(川口幸也)/Africa in the Works of El Anatsui: Locating a Site Where Multiple Narratives can Coexist (Yukiya Kawaguchi)

文化のはざまで考える—エル・アナツイの芸術とグリーバリゼーションにおけるアフリカの表象(シルヴェスター・オベチエ)/El Anatsui's Intercultural Aesthetics and the Representation of Africa in

Global Culture (Sylvester Okwunodu Ogbechie)

空隙の戴冠—エル・アナツイのいま(水沢勉)/Enthroning the Voids: El Anatsui Today

(Tsumomu Mizusawa)

1章 記憶を彫る/Chapter 1- Sculpting Memories

2章 歴史を紡ぐ/Chapter 2-Weaving History

3章 創造のプロセス/Chapter 3-The Creatin Process

4章 作品の背景—社会、歴史、文化/Chapter 4-Background: Society, History, Cultures

ケンテクロスとアジンクラ—アサンテにおける布の意味(阿久津昌三)/Kente Cloth: an Adinkra: The Meaning of Asante Textiles (Shozo Akutsu)

エル・アナツイと、彼をとりまくいくつかのアートワールド(チャールズ・ゴア)/El Anatsui and his Art Worlds (Charles Gore)

現代アフリカに生きる—ナイジェリアにおける文化の同時代性(松本尚之)/Life in Present-Day Africa: The Contemporary and Art (Hisashi Matsumoto)

エル・アナツイ—歴史とアートのはざままで創作すること(竹沢尚一郎)/El Anatsui: Working between History and Art (Schoichiro Takezawa)

展示、あるいは表象のポリティクス—アフリカの「うち」と「そと」(ビシ・シルヴァ)/The Politics of Re/Presenting: Within and Without (Bisi Silva)

アフリカン・コネクション—大英博物館における現代美術の収集(クリス・スプリング)/African Connections: Collecting the Contemporary at the British Museum (Chris Spring)

略年譜、文献(編: 朝木由香)/Biography, Bibliography (Compiled by Yuka Asaki)

出品リスト/List of Exhibits

※本稿カタログ 第52回全国カタログ・ポスター展審査員特別賞受賞

656  
春のコレクション展 日本近代洋画の名品選 特集展示—佐藤哲三生誕100年  
Selected Paintings from the Museum Collection and A Centennial Exhibition of Works by Sato Tetsuzo

黒田清輝、萬鉄五郎など日本近代美術を代表する名品を、当館のコレクションから選りすぐって紹介。あわせて、生誕100年を記念し、佐藤哲三の代表作《みぞれ》(寄託)と、その関連作品を特集展示。

主催:神奈川県立近代美術館  
会期:2010年4月10日(土)~5月30日(日)  
休館日:月曜日(ただし5月3日(祝)は開館)、4月30日(金)、5月6日(木)  
開催日数:43日  
出品総点数:81点  
総観覧者数:7,487人  
担当学芸員:李美那、山内舞子

関連企画

- 1) サウンド・ミュージアム in 鎌倉—古楽・民族音楽とアートの出会い 5月4日(火・祝)  
「ビスメロ ナイト・ミュージアム」 出演:ビスメロ
- 2) ギャラリートーク 4月17日(土)、5月1日(土)、15日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 5月15日(土)、29日(土)

関連記事

- ▼展覧会紹介:3紙4回/3誌3回
- ▼情報掲載:3紙14回/4誌4回



ポスター

担当学芸員コメント

春に鎌倉館で所蔵作品による名品展を開催するのは2005年度から連続6度目となった。葉山館ができて3館体制となり、企画展が増える一方、常設展示室を持たない当館にとって、1万点を超える所蔵作品の定期的展示は重要な課題であり、その場を鎌倉館が担っている形である。長く当館寄託であった名品の1点が、この展示を最後に他館の所蔵となることが決まり、鎌倉館での見納めだったことが感慨深かった。見慣れた作品が見慣れた場所にある「記憶」が美術館のある側面を作っていくのなら、記憶の断絶もまた、美術館の歴史の一つであろう。佐藤哲三作品の特集展示は、作家ご遺族の全面的な協力により調査・出品が叶った展示。スケッチブックなどを含む21点の出品で、制作の背景やプロセスに迫った。(李美那)

657

## 鬼と遊ぶ 渡辺豊重展

## WATANABE Toyoshige Playing with ONI

1931年生まれの渡辺豊重は、絵画、版画、彫刻といった表現のジャンルを自由に往来し、楕円、雲型、星型などの明快なフォルムを鮮やかな色彩で描きだしたユーモアあふれる作品で知られる作家。1988年の「今日の作家たちI」以来22年ぶりの当館での展覧会となった今回は、新たな「鬼」シリーズの大画面の絵画と、テラコッタなどによる小型の彫刻による、近作展となった。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2010年6月12日(土)～8月29日(日)

休館日：月曜日(ただし7月19日(祝)は開館)、7月20日(火)

開催日数：68日

出品総点数：72点

総観覧者数：7,927人

担当学芸員：奥野美香、土居由美

## カタログ

27.6×22.7cm、68ページ、販売価格1,600円

多色32図、単色6図、単色挿図12図

編集：神奈川県立近代美術館

翻訳：小川紀久子

デザイン：川野直樹

制作：美術出版社[デザインセンター]

発行：神奈川県立近代美術館

## 関連企画

- 1) 渡辺豊重氏による「渡辺豊重展」アーティストトーク 6月19日(土)
- 2) 渡辺豊重氏による「20世紀西洋版画の展開」ギャラリートーク 6月26日(土)
- 3) 夏の美術館ワークショップ 7月21日(水)、24日(土) 「鬼と遊ぶワークショップ」  
横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校体育館・鎌倉館
- 4) ギャラリートーク 7月10日(土)、8月21日(土)
- 5) 先生のための特別鑑賞の時間 6月19日(土)、7月24日(土)

ごあいさつ、謝辞、目次

鬼はどこから来て、どこへ行くのか。(山梨俊夫)

Where the ONI Comes From and Where It is Heading To

図版(Plates)

作家と語る

かたちの生まれかた(奥野美香)

年譜(Biography)、主要参考文献(奥野美香編)、出品リスト(List of Works)

## 関連記事

## ▼展評・解説など:

藤島俊会「人の内部に潜む鬼 鬼と遊ぶ 渡辺豊重展」『神奈川新聞』2010年7月2日、19面  
 尹貴淑「『今』への怒り表わす異形 鬼と遊ぶ 渡辺豊重展」『神奈川新聞』2010年7月19日、12面  
 藤田一人「軽やかで愚直な抗議 鬼と遊ぶ 渡辺豊重展」『公明新聞』2010年7月21日、5面  
 高野清見「ART+鬼となり怒り哀しむ 鬼と遊ぶ 渡辺豊重展」『読売新聞』2010年8月9日夕刊、9面  
 岩崎清「日常に棲む鬼たち 鬼と遊ぶ 渡辺豊重展」『新美術新聞』1218号、2010年6月11日、1面  
 渋谷和彦「社会への怒りキャンバスに爆発 『鬼と遊ぶ 渡辺豊重展』」『SANKEI EXPRESS』1307号、2010年7月6日、p.125  
 「特集 2010年年末回顧アンケート 美術界で活躍する人々に聞く」『新美術新聞』1235号、2010年12月11日、p.10

▼展覧会紹介：1紙1回／7誌7回

▼情報掲載：4紙34回／7誌11回



ポスター



カタログ表紙

## 担当学芸員コメント

1988年の「今日の作家たちI-88」で江口週とともに鎌倉で展覧会を開催してから22年ぶりに、今度は鎌倉館での個展となった渡辺は、2000年以降の近作という当初の打合せに対して、大量の新作を制作して臨み、結局絵画はすべて2009・2010年の新作による展覧会が出来上がった。特に、3mに及ぼうかという木枠に張らないままのキャンヴァスに描かれた真っ黒な鬼は圧巻であった。鎌倉館にほど近い横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校と数年に亘って続けてきた連携プログラムの一環として、本展出品作とは別に、同校の中庭に空気で膨らませる作品《モクモク》も設置し、作品を素材として国語や体育や図画・工作の授業を行うとともに、全学年の全クラスが展覧会を見に来館し、渡辺が若いころから関心を持ってきた美術教育の面でも充実した展覧会となった。(土居由美)

658

岡崎和郎展 補遣の庭

OKAZAKI KAZUO Garden of Supplements

独自の造形概念「御物補遣」(ぎよぶつまい)に基き、鋭敏なユーモアを湛えた精巧な作品によって日本の戦後美術における重要性を近年ますます高めている岡崎和郎(1930-)の個展。「休息・再生・記憶」をテーマに配された作品群によって、建築と周囲環境、作品世界が補完しあう「補遣の庭」となった美術館で、岡崎和郎の造形思考を紹介した。

主催: 神奈川県立近代美術館

会期: 2010年9月11日(土)~11月3日(水・祝)

休館日: 月曜日(ただし9月20日(祝)、10月11日(祝)は開館)、9月21日(火)、24日(金)、10月12日(火)

開催日数: 45日

出品総点数: 44点

総観覧者数: 4,494人

担当学芸員: 三本松倫代、朝木由香

#### 関連企画

- 1) 岡崎和郎氏によるアーティスト・トーク 10月10日(日)
- 2) ギャラリートーク 9月20日(月・祝)、10月2日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 9月18日(日)

#### 関連記事

##### ▼展評・解説など:

藤島俊会「落ちこぼれたものを形に 岡崎和郎展 補遣の庭」『神奈川新聞』2010年10月1日、13面

高野清見「ART+ 背後にひそむ個人的物語 岡崎和郎展 補遣の庭」『読売新聞』10月25日夕刊 9面

##### ▼展覧会紹介: 7誌8回

##### ▼情報掲載: 4紙15回 / 10誌16回

#### カタログ

18.7×12.6cm、160ページ、販売価格1,800円

多色67図、単色挿図21図

編集・発行: 神奈川県立近代美術館

翻訳: スタン・アンダソン

デザイン: 秋山伸、刈谷悠三/schtücco

制作: リーヴル

目次、謝辞、あいさつ

Contents, Acknowledgements, Foreword

ヴェロニカの脱臼—岡崎和郎が仕掛けるもの(水沢勉)

Veronica Dislocated: Tactics of Okazaki Kazuo (Mizusawa Tsutomu)

カタログ / Catalogue

虚白体 / White Objects

HISASHI / HISASHI

マルチプル / Multiples

人名録 / Who's Who

鏡 / Mirrors

記憶 / Memories

黒い雨 / Black Rain

補遣の庭 / Garden of Supplements

庭をひらく—鎌倉展示についての補遣(三本松倫代)

Opening the Garden: Supplement to the Kamakura Exhibition (Sanbonmatsu Tomoyo)

略歴 / Biography

主要文献 / Selected Bibliography

出品リスト / List of Works



ポスター



カタログ表紙

#### 担当学芸員コメント

坂倉準三のモダニズム建築である鎌倉館は、建築とその屋外の自然とが呼応しあう環境であり、「庭」をテーマとする岡崎和郎の作品世界にまたとない空間を提供した。展示室のガラスケースや館外から中庭へ視界の抜ける搬入口など、多様な空間を展示場所に遊び、建物全体がインスタレーションとなる稀有な時空間を生み出した作家の構成力とセンスが際立って示された展覧会であった。(三本松倫代)

659

秋のコレクション展 ひと | HITO—所蔵作品にみる人間のかたち  
HITO—Forms and Images of Man from the Museum Collection

人が生み出す美術にとって、もっとも親密でありながら、もっとも謎めいており、崇高にも、悲劇的にもなりうる主題の「ひと」という永遠のテーマに、近代の芸術家たちがどのように取り組んできたのかを、当館所蔵の絵画、彫刻、素描、版画から紹介。「人」のイメージの諸相を探る。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2010年11月13日(土)～2011年1月16日(日)

休館日：月曜日(1月10日(祝)は開館)、11月24日(水)、12月24日(金)、  
12月29日(水)～1月3日(月)、1月11日(火)

開催日数：49日

出品総点数：70点

総観覧者数：4,463人

担当学芸員：太田泰人、山内舞子

カタログ

24×19cm、64ページ、販売価格1,200円

多色24図、単色47図

編集：神奈川県立近代美術館

展覧会企画・構成：太田泰人、山内舞子

製作：求龍堂

発行：神奈川県立近代美術館

目次、あいさつ

ひと | HITO コレクションにみる人間のイメージ(太田泰人)

作家略歴、出品目録

関連企画

- 1) キュレーターズ・ツアー 11月20日(土)、2011年1月15日(土)
- 2) スタンプラリー 11月13日(土)～2011年1月16日(日)
- 3) ダンス・パフォーマンス 2011年1月9日 《HITO》 北村明子、マルチナス・ミロト
- 4) ギャラリートーク 11月27日(土)、12月11日(土)、25日(土)、2011年1月8日(土)
- 5) 先生のための特別鑑賞の時間 11月27日(土)、2011年1月8日(土)

関連記事

- ▼ 展覧会紹介：5誌5回
- ▼ 情報掲載：2紙8回／1誌4回



ポスター



カタログ表紙

担当学芸員コメント

所蔵品展というと、時代順や作家別に名品を並べるのが常套だが、今回は、それとは異なる視点からコレクションを見直して、はっきりとした切り口で作品を選定した、明確なメッセージをもった展覧会をめざした。「ひと」のイメージというと、余りにもありふれた人類永遠のテーマだが、作品の表面に堆積している生を刻んだ時間の複雑な地層を美術史的な操作で丁寧にたどっていくと、「鑑賞」という慣習の枠を超えたもっと生命ある関係を作品との間に見出すことができるのではないかと構想した。また、こうしたアイデアの下に、県立高校などとの学校連携にも積極的に取り組んで、準備段階から出張講義を行い、展示室での対話形式のトークなども行った。(太田泰人)

660

## 生誕100年 彫刻家 辻晋堂展

### Shindo Tsuji: A Retrospective

陶などによる斬新な彫刻作品を世に問い、戦後の彫刻界に独自の位置を占めた彫刻家、辻晋堂(1910–1981)の創作の軌跡をたどりながら、日本の現代彫刻、さらに現代陶芸に与えた影響を紹介する回顧展

主催: 神奈川県立近代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

会期: 2011年1月29日(土)～3月27日(日)

休館日: 月曜日(ただし3月21日(祝)は開館)、3月12日(土)(東日本大震災のため)、3月22日(火)

開催日数: 49日

出品総点数: 119点

総観覧者数: 3,859人

担当学芸員: 榎山昌夫、平井鉄寛

#### 関連企画

- 1) 「彫刻家 辻晋堂展」オープニング記念トーク 1月29日(土) 三浦努、水沢勉
- 2) キャラリートーク 2月13日(日)、2月26日(土)、3月5日(土)、3月19日(土)
- 3) 先生のための特別鑑賞の時間 3月5日(土)

#### 関連記事

##### ▼展評・解説など:

岸桂子「陶彫に込めた禅的な思想 彫刻家辻晋堂展」『毎日新聞』2011年2月11日夕刊、4面  
水沢勉「詩人(大伴家持像試作) 木彫への目覚め胎動 辻晋堂展 ④」『読売新聞』2011年2月20日、35面

平井鉄寛「詩人(これ我かまた我に非ざるか) 抽象化する素材との対話 辻晋堂展 ④」『読売新聞』2011年2月22日、34面

榎山昌夫「緑陰読書 穏やかな第一印象覆す 辻晋堂展 ⑤」『読売新聞』2011年2月23日、32面

渋谷和彦「無心が生んだ「奇怪」「ユーモア」 辻晋堂展」『産経新聞』2011年3月1日、18面  
外館和子「円熟期、虚空間の豊かさ探求 生誕100年 彫刻家 辻晋堂展」『朝日新聞』2011年3月2日夕刊、3面

藤島俊会「文化時評 自分を開く求道の彫刻 生誕100年、辻晋堂展」『神奈川新聞』2011年3月4日、6面

「文化往来 辻晋堂展、写真から悟りに通じた境地まで」『日本経済新聞』2011年4月7日 32面  
三浦努「展覧会スポットライト 生誕100年 辻晋堂展」『炎芸術』105号、2011年2月、p.130

▼展覧会紹介: 1紙3回/7誌8回

▼情報掲載: 6紙22回/10誌15回

#### カタログ

25.0×20.5cm、224ページ、販売価格1,800円

図版数: 多色173図 単色挿図361図

編集: 尾崎信一郎、三浦努、水沢勉、榎山昌夫、平井鉄寛

デザイン: 桑畑吉伸

制作: コギト

発行: 美術館連絡協議会

ごあいさつ、謝辞、目次

陶彫の創始と触覚性(木村重信)

辻晋堂の仕事——彫刻の彼岸へ(尾崎信一郎)

#### カタログ

辻晋堂の言葉

辻晋堂の陶彫(松原龍一)

辻晋堂の残した公案——神奈川県立近代美術館所蔵《詩人(これ我かまた我に非ざるか)》について(榎山昌夫)

辻晋堂の公共的作品をめぐって——調査報告と考察(三浦努)

年譜(編: 三浦努)

没後のおもな展覧会歴(編: 三浦努)

主要参考文献(編: 三浦努)

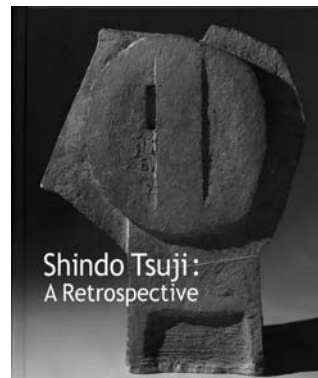
辻晋堂主要彫刻・版画作品目録(編: 三浦努)

Centennial of Birth Exhibition: Shindo Tsuji (Tutomu Miura)

出品作品リスト



ポスター



カタログ表紙

#### 担当学芸員コメント

展覧会会期の半ば過ぎ、3月11日に東日本大震災に見舞われた。古い鎌倉館の2階展示室には、安定性を欠く陶彫や300kgを越える重い陶彫もいくつか並んでいたが、それらは免震装置や転倒防止器具のおかげで転倒を免れ、作品の破損も見られず、観覧者も職員も幸い無事であった。戦前の彫りの確かな木彫りに始まり、戦後の高度経済成長期には陶彫や金属彫刻、さらには大規模な陶壁や野外彫刻へと展開を見せ、晩年には小さな「手びねり」彫刻へと進んだ辻晋堂には、近代日本の彫刻の歴史がそのまま重なるようである。(榎山昌夫)

661

## 新収蔵品展

## New Acquisitions of 2009

2009年度に当館へ収蔵された作品を中心に、近年新たに寄託を受けた作品や修復を終えた作品をあわせ、日本画、版画、彫刻、素描、資料などを展示。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2010年4月10日(土)～5月23日(日)

休館日：月曜日(ただし5月3日(祝)は開館)、4月30日(金)、5月6日(木)

開催日数：37日

出品総点数：59点

総観覧者数：2,355人

担当学芸員：三本松倫代

## 関連企画

1)ギャラリートーク 4月24日(土)、5月15日(土)

## 関連記事

▼展覧会紹介：1紙1回／2誌2回

▼情報掲載：3紙10回／1誌1回



ポスター

## 担当学芸員コメント

修復を終えた2点のお披露目ほか、購入・寄贈・寄託作品を紹介した。特に、小林清親と田口米作が日清・日露戦争を報道した多色木版については、題材となった当時の戦局や軍人の経歴などについて可能な限り調査し、会場解説パネルのかたちでより詳細な理解の助けとなるように努めた。(三本松倫代)

662

## 20世紀西洋版画の展開—キュビズムからシュルレアリスムそして抽象へ

### European Prints in the 20th Century

当館が収蔵する20世紀の西洋版画コレクションの中から75点を厳選して展覧し、20世紀美術の展開を再考する。ワシリー・カンディンスキー、パブロ・ピカソ、ジャン・アルプ、オシップ・ザッキン、エンリコ・プランボリーニ、アンドレ・マッソン、ロベルト・マッタ、ヴォルス、など23作家の版画作品75点を出品。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2010年6月5日(土)～9月5日(日)

休館日：月曜日(ただし7月19日(祝)は開館)、7月20日(火)

開催日数：80日

出品総点数：75点

総観覧者数：3,869人

担当学芸員：是枝開

リーフレット

21×14.9cm(A3四つ折り)、無料配布

単色4図

展覧会概要、関連企画案内、主要作家解説、出品作品リスト

#### 関連企画

1) 渡辺豊重氏によるアーティストトーク 6月26日(土)

2) ギャラリートーク 7月17日(土)、8月14日(土)

3) 先生のための特別鑑賞の時間 6月26日(土)、8月14日(土)

#### 関連記事

▼情報掲載：2紙18回／4誌5回



ポスター



リーフレット

#### 担当学芸員コメント

20世紀の芸術家たちは油彩画や彫刻の作品を制作すると共に、版画の領域でも新たな表現を模索した。20世紀の西洋版画の多様性を概観しながら、芸術の潮流に大きな影響を与えた彼らの造形理念の表われを版画の領域に探究しつつ、20世紀美術の動向や展開を再検証する機会となるような展覧会を目指した。(是枝開)



663

保田春彦展 《白い風景》シリーズとクロッキー

YASUDA HARUHIKO The "Landscape in White" Series and Recent Drawings

現代日本彫刻の代表者のひとり保田春彦(1930-)は、近年、クロッキーを再開し、東京そして曾遊の地パリで、1,000点を超える作品を制作した。本展ではその中から80点を精選、近作の彫刻シリーズ《白い風景》とともに展示。

主催:神奈川県立近代美術館

会期:2010年9月18日(土)~12月26日(日)

休館日:月曜日(ただし9月20日(祝)、10月11日(祝)は開館)、9月21日(火)、24日(金)、10月12日(火)、11月4日(木)、24日(水)、12月24日(金)

開催日数:82日

出品総点数:87点

総観覧者数:2,507人

担当学芸員:水沢勉、長門佐季

## 関連企画

- 1) ギャラリートーク 9月25日(土)(保田春彦氏ゲスト参加) 10月23日(土)、12月18日(土)
- 2) 先生のための特別鑑賞の時間 10月16日(土)、12月18日(土)

## 関連記事

## ▼展評・解説など:

西田健作「死別と病 受入れて作風深化 保田春彦展」『朝日新聞』2010年10月6日夕刊、3面

## ▼展覧会紹介:2紙2回/4誌8回

## ▼情報掲載:2紙16回/5誌8回

## カタログ

19.0×19.2cm、36ページ、販売価格1,300円

多色23図

編集:神奈川県立近代美術館(水沢勉、長門佐季)

デザイン:梯 耕治

制作:リーヴル

発行:神奈川県立近代美術館

## ごあいさつ

風景のまなざし—保田春彦の近作と新作を包むもの(水沢勉)

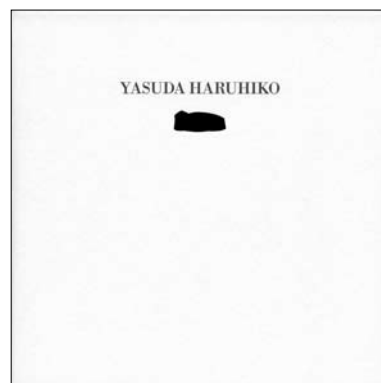
保田春彦略年譜(長門佐季編)

出品リスト

謝辞 奥付



ポスター



カタログ

## 担当学芸員コメント

保田春彦が近年、集中して描きつけてきたクロッキーを精選して展示し、さらに最新作の「闘病シリーズ」も付け加えた。彫刻としては、《白い風景》シリーズから当館所蔵の3点のほか4点の小品を追加した。円熟すると同時に否応なく向き合うことになる老いや死の問題を、創作の原点も確認しつつ、表現しようとする執念にも似た彫刻家の姿勢に多くのひとの共感を得ることができた。同じ主旨の展覧会を内容を替えて、和歌山県立近代美術館、信濃デッサン館、世田谷美術館で連続ないし一部時期を重ねて開くのも初めて試みであった。(水沢勉)

664

## 山下菊二 コラージュ展

Collages by YAMASHITA Kikuji

戦後の日本社会を厳しくも温かい眼でみつめた山下菊二(1919-1986)は、自らの過酷な戦争体験を背景に、社会や政治などの問題について作品を通して訴えてきた。今回は、2009年度に寄贈された狭山差別裁判をテーマにしたコラージュ作品を中心に、連作《戦争と狭山差別裁判》から29点と、油彩、版画、素描などを展示。

主催:神奈川県立近代美術館

会期:2011年1月8日(土)~3月27日(日)

休館日:月曜日(ただし1月10日(祝)、3月21日(祝)は開館)、1月11日(火)、  
3月12日(土)(東日本大震災のため)、3月22日(火)

開催日数:67日

出品総点数:76点

総観覧者数:2,459人

担当学芸員:長門佐季

### 関連企画

- 1) 座談会 3月6日(日) 「山下菊二を語る」 谷川晃一、原田光
- 2) 映画上映 3月13日(日) 「彼女と彼」(監督:羽仁進、出演:山下菊二、1963年)
- 3) ギャラリートーク 2月12日(土)、3月27日(日)
- 4) 先生のための特別鑑賞の時間 2月12日(土)

### 関連記事

▼展評・解説など:

西田健作「戦場の不条理と自責の念 山下菊二コラージュ展」『朝日新聞』2011年3月23日夕刊、5面

三田晴夫「評論の眼 「義」の美術を忘れるな 山下菊二コラージュ展」『ギャラリー』310号、2011年2月、pp.74-75

▼展覧会紹介:4誌5回

▼情報掲載:5紙14回/8誌10回

### カタログ

29.5×21cm、24ページ、販売価格900円

多色35図、単色1図

編集:神奈川県立近代美術館 長門佐季

発行:神奈川県立近代美術館

翻訳:小川紀久子

制作:美術出版社[デザインセンター]

展覧会タイトル、会期会場

あいさつ、Foreword

見つけあう二つの眼—山下菊二のコラージュ(長門佐季)

年譜、Chronology主要、参考文献

\*別刷り出品リスト有(A4)



ポスター



カタログ表紙

### 担当学芸員コメント

会期中の3月11日に東日本大震災が発生し、翌12日は閉館。当初12日に予定していたギャラリートークは後日に延期としたが、13日の映画上映会は予定どおり実施し、申込みされた方々は皆来館された。このような不安定な社会状況において、美術をとおして社会を見つめ、また美術を通じ社会に訴えてきた山下の作品は、あらためて普遍的な問題を私たちに問うていることを実感した。今回の展覧会は連作《戦争と狭山差別裁判》を中心に、山下菊二のコラージュ作品に注目してみたが、コラージュという婉曲な手法が用いられることによって、画家山下菊二という人間の社会や作品に対する態度がより鮮明に浮かびあがってくるように思われる。(長門佐季)

2010年度展覧会 会期・観覧者数一覧

	展覧会名	会期	日数	観覧料	観覧者数(人)				他館との 開催協力 など
					有料観 覧者数	無料観 覧者数	うち 中学生 以下	観覧者 数合計	
葉 山 館	話の話 ノルシュテイン&ヤールブソフ	4月10日(土)～ 6月27日(日)	67日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 1,100円 950円 550円 100円	11,906	3,383	863	15,289	巡回: 高知県立美術館 三菱地所アルティウム 足利市立美術館
	浜田知明の世界展	7月10日(土)～ 9月5日(日)	50日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 1,000円 850円 500円 100円	5,157	2,291	823	7,448	
	古賀春江の全貌	9月18日(土)～ 11月23日(火・祝)	55日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 1,100円 950円 550円 100円	7,325	3,966	396	11,291	巡回: 石橋美術館
	プライマリー・フィールド II	12月4日(土)～ 2011年1月23日(日)	38日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 900円 750円 450円 100円	2,896	1,934	307	4,830	
	彫刻家エル・アナツイのアフリカ	2月5日(土)～ 3月27日(日)	43日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 1,100円 950円 550円 100円	4,047	2,214	448	6,261	巡回: 国立民族学博物館 鶴岡アートフォーラム 埼玉県立近代美術館
小計		253日			31,331	13,788	2,837	45,119	
鎌 倉 館	日本近代洋画の名品選	4月10日(土)～ 5月30日(日)	43日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 700円 550円 350円 100円	5,302	2,185	1,095	7,487	
	渡辺豊重展	6月12日(土)～ 8月29日(日)	68日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 800円 650円 400円 100円	4,292	3,635	2,156	7,927	
	岡崎和郎展	9月11日(土)～ 11月3日(水・祝)	45日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 800円 650円 400円 100円	2,789	1,705	656	4,494	
	ひと   HITO	11月13日(土)～ 2011年1月16日(日)	49日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 700円 550円 350円 100円	2,973	1,490	729	4,463	
	辻晋堂展	1月29日(土)～ 3月27日(日)	49日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 800円 650円 400円 100円	2,448	1,411	278	3,859	巡回: 鳥取県立博物館
小計		254日			17,804	10,426	4,914	28,230	
鎌 倉 別 館	新収蔵品展	4月10日(土)～ 5月23日(日)	37日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 250円 150円 100円 100円	1,969	386	92	2,355	
	20世紀西洋版画の展開	6月5日(土)～ 9月5日(日)	80日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 250円 150円 100円 100円	2,914	955	473	3,869	
	保田春彦展	9月18日(土)～ 12月26日(日)	82日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 250円 150円 100円 100円	1,728	779	264	2,507	
	山下菊二 コラージュ展	2011年1月8日(土) ～3月27日(日)	67日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生 250円 150円 100円 100円	1,834	625	85	2,459	
小計									
合 計	14展覧会				57,580	26,959	8,665	84,539	

# 教育普及活動

受講・参加プログラム(講演会・ギャラリートーク・学校連携プログラム等)

事業名	事業内容				参加者数	
	テーマ・内容	講師等	実施日	実施場所		
講演会等	「浜田知明の世界展」講演会	「浜田知明の芸術」	橋秀文(当館専門学芸員)	2010.8.7(土)	葉山館講堂	35人
	「古賀春江の全貌」展講演会	「古賀春江の絵画と詩」	森山秀子(石橋美術館学芸課長)	2010.9.19(日)	葉山館講堂	57人
		「古賀春江の超現実主義絵画」	速水豊(兵庫県立美術館学芸員特別展・国際交流担当課長)	2010.11.6(土)	葉山館講堂	44人
	教育関係者のための特別講演会と展覧会観覧 (平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業 美のちから・生きるちから 葉山   鎌倉アート・プラットフォーム2010)	「子どもの美術とアウトサイダー・アート 生と芸術への問いかけ」	太田泰人(当館普及課長)	2010.11.20(土)	葉山館講堂	18人
	「彫刻家 辻菅堂展」オープニング記念トーク	鳥取県立博物館学芸員と当館副館長による対談	三浦努(鳥取県立博物館学芸員) 水沢勉(当館副館長)	2011.1.29(土)	鎌倉館展示室	45人
	「山下菊二 コラージュ展」座談会	「山下菊二を語る」	谷川晃一(画家) 原田光(岩手県立美術館館長)	2011.3.6(日)	鎌倉別館展示室	15人
アーティストトーク	「渡辺豊重展」アーティストトーク	渡辺豊重氏による作品解説	渡辺豊重(画家・彫刻家)	2010.6.19(土)	鎌倉館展示室	25人
	「20世紀西洋版画の展開」展アーティストトーク	渡辺豊重氏による作品解説	渡辺豊重(画家・彫刻家)	2010.6.26(土)	鎌倉別館展示室	20人
	「岡崎和郎展」アーティストトーク	岡崎和郎氏による作品解説	岡崎和郎(美術家)	2010.10.10(日)	鎌倉館展示室	60人
	「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展アーティストトーク	エル・アナツイ氏による対談形式での作品解説	エル・アナツイ(美術家) 聞き手:川口幸也(国立民族学博物館教授)	2011.2.5(土)	葉山館講堂	130人
パフォーマンスコンサート	サウンド・ミュージアム in 鎌倉—古楽・民族音楽とアートの出会い	「ビスメロ ナイト・ミュージアム」	ビスメロ(ミュージシャン)	2010.5.4(火・祝)	鎌倉館展示室	
	「ひと   HITO」展ダンス・パフォーマンス	「ダンスパフォーマンス《HITO》」	北村明子(ダンサー) マルチナス・ミロト(ダンサー)	2011.1.9(日)	鎌倉館中庭	110人
	ミュージアム・コンサート (平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業 美のちから・生きるちから 葉山   鎌倉アート・プラットフォーム2010)	「OCHI BROTHERS アフリカン・サウンド×エル・アナツイ」	OCHI BROTHERS(ミュージシャン) ゲスト:神奈川県立岩戸養護学校生徒有志	2011.2.11(金・祝)	葉山館展示室	131人
映画上映	「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展映画上映	「エル・アナツイのアート 叩く・ぶつける・折り曲げる」	監督:スーザン・ヴォーゲル、2010年	2011.2.26(土) 2011.3.19(土)	葉山館講堂 葉山館講堂	80人 42人
	「山下菊二 コラージュ展」映画上映	「彼女と彼」	監督:羽仁進、出演:山下菊二、1963年	2011.3.13(日)	鎌倉別館展示室	22人
ワークショップ	夏の美術館ワークショップ	「鬼と遊ぶワークショップ」	渡辺豊重(画家・彫刻家)	2010.7.21(水) 2010.7.24(土)	鎌倉館・横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校体育館	32人 32人
			山内舞子(当館学芸員)	2010.4.17(土)	鎌倉館	17人
ギャラリートーク等	ギャラリートーク/「日本近代洋画の名品選」展	学芸員による作品解説	李美那(当館主任学芸員)	2010.5.1(土)	鎌倉館	11人
			山内舞子(当館学芸員)	2010.5.15(土)	鎌倉館	20人
	三本松倫代(当館学芸員)		2010.4.24(土)	鎌倉別館	5人	
	三本松倫代(当館学芸員)		2010.5.15(土)	鎌倉別館	6人	
	榎山昌夫(当館主任学芸員)		2010.5.13(木)	葉山館	15人	
	土居由美(当館学芸員)		2010.6.17(木)	葉山館	50人	
	奥野美香(当館学芸員)		2010.7.10(土)	鎌倉館	3人	
	奥野美香(当館学芸員)		2010.8.21(土)	鎌倉館	7人	
	是枝開(当館主任学芸員)		2010.7.17(土)	鎌倉別館	4人	
	是枝開(当館主任学芸員)		2010.8.14(土)	鎌倉別館	14人	
	橋秀文(当館専門学芸員)		2010.7.24(土)	葉山館	13人	
	橋秀文(当館専門学芸員)		2010.8.21(土)	葉山館	8人	
	水沢勉(当館副館長) 三本松倫代(当館学芸員)		2010.9.20(月・祝)	鎌倉館	11人	
	三本松倫代(当館学芸員) 朝木由香(当館学芸員)		2010.10.2(土)	鎌倉館	11人	
	ゲスト:保田春彦(美術家) 聞き手:水沢勉(当館副館長)		2010.9.25(土)	鎌倉別館	30人	
	長門佐季(当館主任学芸員)		2010.10.23(土)	鎌倉別館	6人	
	太田泰人(当館普及課長) 松尾子水樹(当館学芸員)		2010.12.18(土)	鎌倉別館	13人	
	橋秀文(当館専門学芸員)		2010.10.2(土)	葉山館	14人	
	長門佐季(当館主任学芸員)		2010.10.9(土)	葉山館	19人	
	太田泰人(当館普及課長)		2010.11.27(土)	鎌倉館	5人	
太田泰人(当館普及課長)	2010.12.11(土)	鎌倉館	4人			
山内舞子(当館学芸員)	2010.12.25(土)	鎌倉館	25人			
山内舞子(当館学芸員)	2011.1.8(土)	鎌倉館	20人			
ギャラリートーク/「ひと   HITO」展	是枝開(当館主任学芸員) 稲庭彩和子(当館学芸員)	2010.12.18(土)	葉山館	16人		
	是枝開(当館主任学芸員) 稲庭彩和子(当館学芸員)	2010.12.25(土)	葉山館	20人		
	是枝開(当館主任学芸員)	2011.1.15(土)	葉山館	32人		
	是枝開(当館主任学芸員) 稲庭彩和子(当館学芸員)	2011.1.23(日)	葉山館	45人		

ギャラリートーク、ツアー等	ギャラリートーク／「辻堂展」	学芸員による作品解説	平井鉄寛(当館学芸員)	2011.2.13(日)	鎌倉館	15人
			平井鉄寛(当館学芸員)	2011.2.26(土)	鎌倉館	15人
			榎山昌夫(当館主任学芸員)	2011.3.5(土)	鎌倉館	11人
			榎山昌夫(当館主任学芸員)	2011.3.19(土)	鎌倉館	15人
	ギャラリートーク／「山下菊二 コラージュ展」	学芸員による作品解説	長門佐季(当館主任学芸員)	2011.2.12(土)	鎌倉別館	19人
			長門佐季(当館主任学芸員)	2011.3.27(日)	鎌倉別館	15人
	ギャラリートーク／「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展	学芸員による作品解説	水沢勉(当館副館長)	2011.2.19(土)	葉山館	22人
			朝木由香(当館学芸員)	2011.3.24(土)	葉山館	18人
	ギャラリー・ツアー／「プライマリー・フィールド II」展	沢山遼(美術批評家)と是枝開(担当学芸員)によるギャラリー・ツアー	沢山遼(美術批評家) 是枝開(当館主任学芸員)	2010.12.23 (木・祝)	葉山館講堂	30人
	キュレーターズ・ツアー	鎌倉市鎌木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館、神奈川県立近代美術館、3館をめぐるツアーと各館学芸員による作品解説	今西彩子(鎌倉市鎌木清方記念美術館学芸員) 増谷文良(鎌倉市川喜多映画記念館キュレーター) 山内舞子(当館学芸員)	2010.11.20(土)	鎌倉館・鎌倉市鎌木清方記念美術館・鎌倉市川喜多映画記念館	8人
宮崎徹(鎌倉市鎌木清方記念美術館課長・主任学芸員) 増谷文良(鎌倉市川喜多映画記念館キュレーター) 山内舞子(当館学芸員)			2011.1.15(土)	22人		
⑤受講料各回1000円 県立機関活用講座	「こころ」と「かたち」-ふたつの大戦の間で(全5回)	「戦争を描くとは」	木下直之(東京大学教授)	2010.9.26(日)	葉山館講堂	32人
		「日本人はなぜ太平洋戦争を始めたのか」	成田龍一(日本女子大学教授)	2010.10.17(日)	葉山館講堂	26人
		「文化はどのようにに総動員されたのか」	佐藤卓巳(京都大学准教授)	2010.10.31(日)	葉山館講堂	21人
		「日中の美術の架け橋」	呉孟晋(京都国立博物館研究員)	2010.11.21(日)	葉山館講堂	19人
		「詩人たちは戦争をどのように歌ったか」	ロジャー・ノルバース(東京工業大学世界文明センター長)	2010.12.12(日)	葉山館講堂	21人
学 校 連 携 プ ロ グ ラ ム	神奈川県立藤沢清流高等学校との連携プログラム	「美術館学入門」 鎌倉館・葉山館での5つの展覧会を視覧 清流高校へ出張授業 葉山館での生徒の成果発表 鎌倉館での第47回全国高等学校美術・工芸教育研究大会の公開授業での発表	太田泰人(当館普及課長) 稲庭彩和子(当館学芸員) 土居由美(当館学芸員) 松尾子水樹(当館学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2010.5.14(金)	葉山館	10人
			2010.6.18(金)	鎌倉館	15人	
			2010.9.17(金)	鎌倉館	9人	
			2010.10.15(金)	県立藤沢清流高校	10人	
			2010.10.29(金)	県立藤沢清流高校	10人	
			2010.11.12(金)	鎌倉館	9人	
			2010.12.10(金)	葉山館	9人	
	鎌倉市立第一中学校との連携プログラム	「ミュージアム・トリップ」 展覧会鑑賞及びワークショップ	稲庭彩和子(当館学芸員) 松尾子水樹(当館学芸員)	2010.5.27(木)	鎌倉館	18人
				2010.6.10(木)	葉山館	19人
				2010.7.1(木)	鎌倉館	14人
	2010.9.2(木)	葉山館	15人			
	横浜国立大学附属鎌倉小学校との連携プログラム	渡辺豊重《モクモク》の展示(学校開放「鎌倉なにかナレの夏休み」期間中は一般公開) 全学年、全クラスの児童が「渡辺豊重展」を観覧。 国語・体育・図画工作の授業で展覧会に関連する内容を展開。	奥野美香(当館学芸員) 松尾子水樹(当館学芸員)	2010.6.22(火)～	鎌倉館・横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校	
	神奈川県立岩戸養護学校との連携プログラム 「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展ワークショップ、 (平成22年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業 美のちから・生きるちから 葉山   鎌倉アート・プラットフォーム2010)	「音でつながる、私とアフリカ in 葉山」(文化庁支援事業)	講師:OCHI BROTHERS 参加者:神奈川県立岩戸養護学校生徒	2011.2.9(水)	葉山館	47人
				2011.2.10(木)	県立岩戸養護学校	47人
	先 生 の た め の 特 別 鑑 賞 の 時 間	先生のための特別鑑賞の時間／「日本近代洋画の名品選」展	学芸員による美術館利用のガイダンス	三本松倫代(当館学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2010.5.15(土)	鎌倉館
李美那(当館主任学芸員) 山内舞子(当館学芸員)				2010.5.29(土)	鎌倉館	17人
奥野美香(当館学芸員) 山内舞子(当館学芸員)				2010.6.19(土)	鎌倉館	19人
先生のための特別鑑賞の時間／「渡辺豊重展」		学芸員による美術館利用のガイダンス	奥野美香(当館学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2010.7.24(土)	鎌倉館	7人
				山内舞子(当館学芸員)	2010.6.26(土)	鎌倉別館
先生のための特別鑑賞の時間／「20世紀西洋版画の展開」展		学芸員による美術館利用のガイダンス	是枝開(当館主任学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2010.8.14(土)	鎌倉別館	10人
				山内舞子(当館学芸員)	2010.7.24(土)	葉山館
先生のための特別鑑賞の時間／「岡崎和郎展」		学芸員による美術館利用のガイダンス	三本松倫代(当館学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2010.9.18(日)	鎌倉館	7人
				稲庭彩和子(当館学芸員)	2010.9.25(土)	葉山館
先生のための特別鑑賞の時間／「古賀春江の全貌」		学芸員による美術館利用のガイダンス	水沢勉(当館副館長) 山内舞子(当館学芸員)	2010.10.16(土)	鎌倉別館	4人
				松尾子水樹(当館学芸員)	2010.12.18(土)	鎌倉別館
先生のための特別鑑賞の時間／「保田春彦展」		学芸員による美術館利用のガイダンス	稲庭彩和子(当館学芸員)	2010.12.25(土)	葉山館	7人
				太田泰人(当館普及課長) 山内舞子(当館学芸員)	2010.11.27(土)	鎌倉館
先生のための特別鑑賞の時間／「ひと   HITO」展		学芸員による美術館利用のガイダンス	山内舞子(当館学芸員)	2011.1.8(土)	鎌倉館	9人
				長門佐季(当館主任学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2011.2.12(土)	鎌倉別館
先生のための特別鑑賞の時間／「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展	学芸員による美術館利用のガイダンス	稲庭彩和子(当館学芸員)	2011.2.19(土)	葉山館	13人	
			榎山昌夫(当館主任学芸員) 山内舞子(当館学芸員)	2011.3.5(土)	鎌倉館	11人

研修等受入プログラム(実習・研修・団体観覧等)

プログラム	受入内容・件数等
博物館学芸員実習	6大学から7名受入
インターン研修	学芸部門：4名採用、3名に修了証を発行
	保存修復部門：1名採用、1名に修了証を発行
職業体験	中学校：6校延べ16回39名
	高校：3校延べ11回15名
教員研修	館内での実施：5校3団体延べ26回100名以上
	出張教員研修：2カ所延べ2回100名以上
出張授業	中学校：1校1回90名
	貸出総個数：延べ332個
「Museum Box 宝箱」貸出	貸出先：41校と2カ所
	貸出回数：延べ50回
	利用総人数：4523名
	内訳概要：小学校36校・延べ43回 中学校4校延べ4回 大学1校延べ1回 教育委員会等2団体延べ2回
	貸出学校所在地域：横浜市37校 相模原市、藤沢市、鎌倉市、各2校 綾瀬市、横須賀市、厚木市、逗子市、新潟市、各1校
学校教育機関等の団体観覧(職業体験等の研修プログラム分を除く)	幼稚園・保育園 2園延べ3回115名
	小学校 7校延べ39回1832名
	中学校 11校延べ18回376名以上
	高校 7校延べ13回481名
	大学 12校延べ13回750名
	専門学校 2校延べ2回128名
	養護学校等 4校延べ4回80名
	教育委員会等 2団体延べ2回20名
	病院・福祉団体等 4団体延べ8回234名
	子育て支援NPO・学童保育等 4団体延べ5回114名
	他美術館からの団体 2館延べ3回103名
	学会・学校団体 2団体延べ2回73名

- ・団体の受入については、観覧前に、美術館の紹介や、観覧マナーの説明などを行うようにし、なるべく事前に美術館ルールブックを送るなどして、美術館と親しめる気持ちづくりにつとめている。
- ・学校教育機関での団体観覧では、できるだけ事前に引率の先生と連絡をとり、事前授業の支援をするようつとめている。
- ・上のデータは事前申し込みにより把握している受入数。事前申込のない団体もあるので、実数はこのデータを上回る。なお、人数は引率者を含める。

美術館活用推進委員会

2007年度に発足したこの委員会は、正式名称を「〈人づくり・学びの場としての美術館〉活動推進委員会」といい、葉山町・逗子市・鎌倉市の各教育委員会、教員、大学教授、NPO、在野の美術館活動研究者、当館学芸員など、様々な立場の人間が集まって意見交換し、美術館を多面的な形で活用するための論議を深めるプラットフォーム作りを進めてきた。2009年度で正式な活動は終了したが、2010年度には3年間の活動を報告する会合を開き、活動の総括を行った。また、3年間の活動内容をウェブ上に公開し、報告書とした。

<http://hitozukuri.jp/index.html>

美術館図書室

1) 資料の収集・整理

- ・蔵書数(システム登録点数 2011年3月末現在) 66,952点
- ・2010年度新規図書・図録・AV資料等登録点数 4,132点
- ・2010年度雑誌新規登録件数 406点

2) 特別コレクション

- ・新規受入「青木茂氏旧蔵資料」第3次 801点

昨年度の第2次に引き続き美術評論家青木茂氏の旧蔵資料第3次分の受入処理を行った。今回は特に大正から昭和初期の画家、美術評論家等の著作が集中的に含まれ、この中には非売品の限定本や私家本など貴重本が多く含まれる。

また、同1次分1,494冊のデータ作成を完了し、一般の利用に供した。

- ・新たに佐藤哲三氏(120点)、気谷誠氏(289点)の旧蔵資料が寄贈された。また仲田定之助文庫の点検を行った。

3) 閲覧サービス

- ・2010年度年間入室者数 4,692名(開館日1日平均19名)
- ・年間複写枚数 2,383枚(開館日1日平均約9枚)
- ・年間レファレンス受付件数 142件

・利用案内版増設

エントランスホールのほか、階段下図書室入り口にイーゼルを活用した利用案内標示板を増設した。

・特集コーナー

特集コーナー(開催中展覧会関連資料の展示と案内)の常設化や、「特別展示」として展示ケースの図書室内配置を行い、展覧会テーマと由縁のある資料を展示して、利用者へ関連資料・情報の紹介、周知につとめた。

・新着資料コーナー

新たに図書室内に「新着資料コーナー」を設置し、他美術館で現在開催中の図録や近刊の美術図書などを配架して、来室利用者の便宜をはかった。

・入室者状況

図書室の利用では、展覧会別で「浜田知明の世界展」「話の話 ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン&ヤールブゾフ」「古賀春江の全貌」の順に入室者が多く、「浜田知明の世界展」では1日平均で22名が図書室を利用した。なお、展覧会観覧者数に対する図書室入室者数の比率は、「浜田知明の世界展」が15%、「プライマリー・フィールドII」は12%が高かった。

#### ・レファレンス受付状況

レファレンス受付件数では、「古賀春江の全貌」開催期間中の利用者が最も多く66件であった。当年度のレファレンス質問として「鳥獣戯画の全体が掲載されている資料」「伊藤隆道の「動く彫刻」に関する図録や図書」「1958年近美鎌倉で開催「脇田和展」出品の『鳥とすむ』の図版」「ミケランジェロ初期の彫刻「キリスト磔像」の図版」「古賀春江の詩の中の「箭」という文字は何と読み、意味は何か」などの事例があった。

#### ・当館建築関係資料の閲覧

当年度の特徴として当館建築関係資料(図書・雑誌)の閲覧、レファレンス、コピーサービスが多かった。これは資格試験の模擬課題として美術館建築が取り上げられたことに関係していると思われる。図書室では関連資料を別置で用意し対応した。この現象は断続的に8月下旬まで続いた。

#### 4) 「特集コーナー」「特別展示」

展覧会関連の資料は、通常の閲覧図書の棚とは別に、「特集コーナー」としてわかりやすくまとめ、なるべく手にとって閲覧できるようにしている。展覧会を見る前や後に作家や作品の情報を得たり、更に知りたい内容を深められると、来室者に好評を博している。

更に、閲覧とするのが難しい稀少本や、展示室では公開されなかった資料などを展示ケースに入れ、「特別展示」として展示している。今年度は葉山館での二つの展覧会について「特別展示」を行った。

なお、展覧会関連資料の展示は、鎌倉館、鎌倉別館での展覧会についても行っているが、美術図書室のスペースの関係で葉山館での展覧会に主力を置いているため、ここでは葉山館での展覧会関連のみを記述する。

#### ・「話の話 ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン&ヤールブソワ」

特別展示(展示ケース)には『きりのなかのはりねずみ』(ロシア語版)、『Лиса и Заяц』(『きつねとうさぎ』ロシア語版)を展示し、利用者により好評であった。

特集コーナーには、『きりのなかのはりねずみ』(福音館書店、2005)、『きつねとうさぎ』(福音館書店、2007)、『ユリー・ノルシュテインの仕事』(ふゅーじょんぷろだくと、2003)といったノルシュテイン著作をはじめ、親交が深かったという川本喜八郎の図録や、『世界のアニメーション作家たち』(小野耕世著、人文書院、2006)などアニメーションに関する資料を幅広く展示した。

#### ・「浜田知明の世界展」

特集コーナーには、『浜田知明銅版画作品集』(美術出版社、1972)『人と時代を見つめて 浜田知明聞書』(西日本新聞社、2006)、『浜田知明 よみがえる風景』(求龍堂、2007)など著作集と、当館で1980年、2000年に開催した浜田知明展図録、またゴヤ、プリュウゲル、ドーミエなど風刺的表現に定評のある画家の作品集や図録も同時に展示した。[特別展示なし]

#### ・古賀春江の全貌

『牛を焚く 古賀春江詩画集』(東出版、1974)、『写実と空想』(中央公論美術出版、1984)といった著作や、古賀が装丁を手がけた『もだん・かめろん』(谷譲次著、改造社、1929)、『放浪時代』(龍膽寺雄著、改造社、1930)をはじめ、当館で1953年に開催した古賀春江展目録などを展示した。また、戦前に出版された日本シュルレアリスム活動の貴重な資料を複製掲載した『コレクション・日本シュルレアリスム シュルレアリスム基本資料集成』(本の友社、2000-2001)全15巻を同時に展示し、同時代の活動を紹介した。[特別展示なし]

#### ・「プライマリー・フィールド II」

特集コーナーには、それぞれの個展や出品した展覧会の図録を中心に展示した。『視ることのレゴリー 1995 絵画と彫刻の現在』(会場:セゾン美術館、1995)、『VOCA展'95 現代美術の展望』(会場:上野の森美術館、1995)、『VOCA展'96 現代美術の展望』(会場:上野の森美術館、1996)、『今日の作家展2003 自然へのまなざし』(会場:横浜市民ギャラリー、2003)、『Stitch by Stitch ステッチ・バイ・ステッチ 針と糸で描くわたし』(会場:東京都庭園美術館、2009)など、これからも活動を広げていく作家たちの過去と現在を展示した。[特別展示なし]

#### ・「彫刻家 エル・アナツイのアフリカ」

特別展示には、作家所蔵の*Dyed Fabric Wallhangings*(The institute of African Studies Gallery, University of Nigeria, 1975) *Pieces of Wood: An*

*exhibition of Mural Sculpture*(Franco-German Auditorium,1987)、*Venovize: Ceramic Sculpture*(Faculty of Art & Design,1987)、*Walls & Gates*(Avant Garde Gallery,1988)、*Old & New*(The National Museum, Lagos, 1991)といった重要な展覧会図録を5点展示した。

特集コーナーには、利用者が特別展示資料を読めるよう複製を用意し、*El Anatsui: Gawu*(Oriol Mostyn Gallery,2003)や最新の図録*Who knows tomorrow*(various locations of the Nationalgalerie, Berlin,2010)、掲載雑誌の*Sculpture*, July/August 2006、*Art Journal*, 67(2), Summer 2008など、国内にはあまり所蔵されていない貴重な資料を多く展示することができた。また、『アフリカ黒人芸術展 失われた人間性を求めて』(会場:池袋西武ほか、1968)や『インサイド・ストーリー 同時代のアフリカ美術』(会場:世田谷美術館、1995)など、日本におけるアフリカ美術展の図録も同時に展示した。

#### 美術館紹介・広報 掲載実績

展覧会関連を除く掲載実績は以下の通り。

当該年度内に掲載された各展覧会の展評・紹介記事等の掲載実績は、展覧会活動の該当ページを参照のこと。

#### 1) 美術館紹介記事

高野清見「回顧2010 美術 美術館は空洞化、学芸員が奮闘」『読売新聞』2010年12月16日、24面

松隈洋「記憶の建築十選 坂倉準三 神奈川県立近代美術館」『日本経済新聞』2010年6月10日、40面

木下直之「秘蔵っ子出会う すべてを忘れ味わう喜び 「麗子登場 名画100年・美の競演」」『朝日新聞(兵庫県版)』2010年6月11日、32面

「美術館の仕事 神奈川県立近代美術館の場合」『東京新聞』2010年9月19日、1面

菊川怜「わが街わが友 建築学にのめりこむ」『東京新聞』2010年12月23日、26面

酒井忠康「曲がり角」『846』2号、2011年1月、pp.3-6

水沢勉「生きて 美術家 宮崎進さん」『中国新聞』2011年2月1日、11面

ほか総計6紙10回/14誌25回

#### 2) 普及活動関連の紹介記事

高松智行「図工が図工でなるるとき」『美育文化』61号、2011年1月、pp.38-43

#### 3) 収蔵作品・作家紹介記事

李美那「バストゥールのガード 佐伯祐三」『月刊展覧会ガイド』2010年4月、p.59

岡崎乾二郎「活動へのアート6 末期の眼 古賀春江《サーカスの景》」『at プラス』6号、2010年11月、巻頭

#### 4) 前年度の展覧会記事

西田健作「白樺100年 芸術家の生き方賛美」『朝日新聞』2010年4月5日13面

酒井忠康「遠のいていく風景 長澤英俊の場合 長澤英俊展」『美術ペン』130号、2010年4月、p.6

秋元康・甘糟り子(対談)「秋元康流アートのすすめ」『美術手帖』935号、2010年4月、pp.122-125

Edward M. Gomez 「Matsutani's Moment」『Art in America』2010年5月、pp.136-143

#### 5) 次年度の展覧会記事

1紙1回/1誌2回



1  
浜田知明展 鑑賞ガイド・リーフレット

デザイン:mutch design(栗谷川舞)  
編集:神奈川県立近代美術館(稲庭彩和子)  
発行:神奈川県立近代美術館  
A3二つ折り、表面カラー裏面単色/無料配布  
2010年7月8日発行

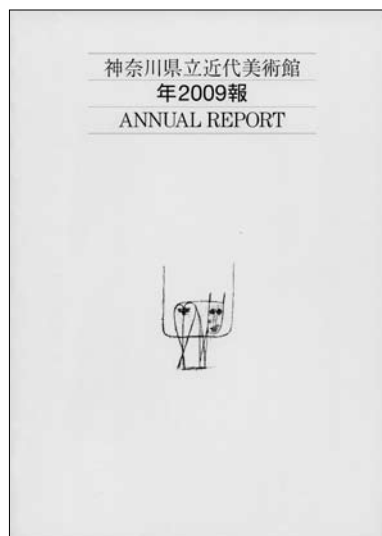
人間ってなんだ？  
展覧会へようこそ！  
都市・孤独  
愛・家族  
戦争・命  
不安・ユーモア  
浜田知明さんってどんな人？  
参考文献



2  
たいせつな風景14号

編集・発行:神奈川県立近代美術館  
製作:求龍堂  
デザイン:U. Shima  
21×14.8cm、表紙含め16ページ、無料配布  
多色1図、単色5図  
2010年9月30日発行

図版 浜田知明《フランドル伯城》  
旅芸人になる（島田雅彦）  
旅の記憶（寺田農）  
図版 寺田政明《作品》  
一度だけの旅（吉川陽一郎）  
図版 吉川陽一郎《旅行案内—砂漠編》  
表紙作品解説 藤原吉志子《車庫から船出する王  
（G.G.マルケス『族長の秋』より）》（水沢勉）  
図版 二見彰一《旅の日に》  
編集雑記



3  
2009年度年報

編集・発行:神奈川県立近代美術館  
制作:印象社  
25.7×18.2cm、56ページ、無料配布  
2011年2月15日発行

あいさつ  
展覧会活動  
教育普及活動  
作品蒐集管理活動  
調査研究活動  
運営・管理報告





4  
たいせつな風景15号

編集・発行：神奈川県立近代美術館  
製作：求龍堂  
デザイン：U. Shima  
21×14.8cm、表紙含め16ページ、無料配布  
多色1図、単色5図  
2011年2月28日発行

図版 莊司福《刻》  
「刻」（小池寿子）  
図版 ゲオルグ・ベンツ《ベトラルカ『凱旋』より「時の凱旋」》  
アフリカの都市で時を刻む（小川了）  
図版 小林敬生《蘇生の刻—バベル》  
三つの断章（山本正道）  
図版 山本正道《ルノワールの庭 オリーヴの樹》  
表紙作品解説 一原有徳《滴2》（山梨俊夫）  
編集雑記



5  
2011年度展覧会スケジュール

編集・発行：神奈川県立近代美術館  
製作：求龍堂  
22.5×20cm、三つ折り1回二つ折り1回1枚  
無料配布、多色21図  
三館展覧会スケジュール  
利用案内、地図  
2011年3月4日発行



6  
音でつながる、私とアフリカ in 葉山

文化庁 平成22年度美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業 美のちから・生きるちから  
葉山 | 鎌倉アート・プラットフォーム2010報告書  
編集・発行：神奈川県立近代美術館  
デザイン：栗谷川舞（スタビー・デザイン）  
写真：藤島亮  
イラスト：Ochi Office  
12.8×18.2cm、表紙含め16ページ、無料配布  
多色80図  
2011年3月15日発行

つながる・つなげる から生まれる力  
アナツイ×越智ブラザーズ(2月9日)  
越智ブラザーズ in 県立岩戸養護学校(2月10日)  
越智ブラザーズ コンサート(2月11日)  
生徒・先生の声

## 2010年度の教育普及活動

葉山館開館とともに出発した普及課の活動は7年を終え、8年目を迎えた。2010年度も、前年までと同様に、子供からお年寄りまで幅広い年齢層の人々に美術鑑賞を身近なものとし、美術がもたらす精神的な豊かさを日常の生活に結びつけることを目標に、(1)啓発普及事業、(2)地域・学校との連携事業、(3)美術館情報誌等の発行による情報発信事業、を三つの柱として活動を展開してきた。

(1)の啓発普及事業では、展覧会ごとの学芸員によるギャラリートークが活発に行われており、その回数は36回を数えている。更に「彫刻家 辻晋堂展」のオープニング記念トークでは、単なる学芸員のギャラリートークではなく当館副館長との対談形式を取って大いに観客の関心を引いた。「浜田知明の世界展」、「古賀春江の全貌」展に際して行った講演会などのほか、教育関係者のための特別講演会が当時の普及課長太田泰人によって行われた。また、「渡辺豊重展」、「岡崎和郎展」のアーティスト自身によるトークが好評を博した。特に渡辺豊重氏には、ご本人の鎌倉館での展覧会会期中、鎌倉別館で開催されていた「20世紀西洋版画の展開」展で、西洋版画の魅力について語ってもらい、さらに、2日間にわたって夏休みのワークショップを行ってもらった。このワークショップは、鎌倉館と横浜国立大学附属鎌倉小学校の2か所で行われ、「鬼と遊ぶワークショップ」と題し、現代美術作家の渡辺豊重氏が描いた「鬼」を作家と一緒に美術館で見て、小学校の体育館でひとりひとり大きな紙に絵を描くものであった。

また、2009年度に引き続き、音楽、映像、パフォーマンスなどに広がる現代の多面的な芸術創造と美術館を結び付ける試みとして、鎌倉館では、「ひと | HITO」展でダンス・パフォーマンス《HITO》が、葉山館では、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展でアフリカン・サウンドのコンサートが行われている。映画上映としては「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展で「彫刻家エル・アナツイのアート」が、「山下菊二 コラージュ展」で《彼と彼女》が上映された。また「話の話」展では、会期中毎日、展示室内でアニメーションの上映を行っていた。

(2)の地域・学校との連携事業では、地域や学校による美術館の活用として、団体来館や教員研修、中学生・高校生による職業体験の場としての美術館の利用など様々な形で、着実にその成果を上げている。特に、2006年度に当館で開発された美術館キット「Museum Box 宝箱」は、『横浜市版学習指導要領』にも掲載され、小学校への貸し出しも増え、着実に地域と美術館を結ぶコミュニケーションの道具として大いに活用されてきている。一つには、「先生のための特別鑑賞の時間」として教員や学校関係の方々へ一つの指導方法として「宝箱」の活用を促した。また、「宝箱」を使った当館学芸員による出張授業も活発に行われている。

もう一つ2010年に立ち上げた地域との連携事業として、鎌倉館が中心になって行われた「キュレーターズ・ツアー」を上げることができる。これは、鎌倉館近隣の美術館である鎌倉市鍋木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館と当館鎌倉館の各学芸員が、3館を参加者と一緒について作品解説をし、文化地域での一体感を持つという試みであった。

また、数年来、美術館内授業と出張授業を交互に行う県立藤沢清流高校との連携活動も継続して行われた。横浜国立大学附属鎌倉小学校との数年間の連携は、この年、更に展開を遂げている。鎌倉館で開催された「渡辺豊重展」を契機に、美術館においては、上で述べたように鎌倉館と小学校体育館の両方を会場とする夏の美術館「鬼と遊ぶワークショップ」が開催されたが、小学校ではさらに長期にわたる関連授業が行われ、美術館も協力した。まず、1988年に鎌倉館で開催された「江口週・渡辺豊重展」の出品作品であった渡辺豊重氏の《モクモク》を、作家渡辺豊重氏の協力のもと小学校の中庭に設置したことである。これは高さ6mものバルーンの作品で、小学生が積極的にかかわって毎日バルーンを膨らませる作業が行われた。この、作品とともに過ごす体験は授業の中でさまざまに活用され、学校の子どもたちは《モクモク》を見ながら毎日を過ごし、図画・工作の授業で絵を描いたり、国語の時間には詩や川柳を作ったり、体育の時間には表現のダンスを作り発表した。また全学年、全クラスの児童が授業の中で美術館の「渡辺豊重展」を見に来る、という、行ったり来たりする正に美術館と学校が作品でつながるプロジェクトとなった。更にこの《モクモク》は、美術館でのワークショップ期間にあわせて開催された附属鎌倉小学校の学校開放「鎌倉なんとかなーレの夏休み」のなかで7月21日(水)～24日(木)に一般に公開され、美術館と小学校の連携が広く社会にも開かれる結果となった。連携活動としては、文化庁の美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業として助成を受け実施された「美のちから・生きるちから 葉山 | 鎌倉アート・プラットフォーム2010」は、学校や先生方との連携をはかりつつ、展覧会やコンサートという枠組みを越えての複合的なプログラムとして大きな試みであった。県立岩戸養護学校との連携による「音でつながる、私とアフリカ in 葉山」では、「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」展を契機として、生徒が来館しての展覧会鑑賞、音楽家の越智ブラザーズが学校を訪問しての音のセッション、更に展覧会会場での越智ブラザーズのコンサートでフィナーレ部分を共演する、という3日間に及ぶプログラムが実施された。美術館職員と学校の先生方・保護者との綿密な連絡調整を土台に、演奏者の越智ブラザーズと生徒が展覧会を中心に様々な共同作業を行い楽しんだ。生徒たちの生き生きとした表情が印象的なプログラムとなった。また、教育関係者のための特別講演会と展覧会観覧のプログラムも実施し、学校との連携事業は更に広がりを見せた。

(3)の美術館情報誌等の発行では、年2回刊行の「たいせつな風景」が14号、15号と号を重ね、14号が「旅」、15号が「刻」という特集を組み、作家の島田雅彦や美術史家の小池寿子といった一流執筆陣による文章が掲載され、無料配布ということもあって、多くの美術愛好家に親しまれている。

このように、2010年も当館では充実した教育普及活動が行われ、さらなる飛躍を望んで次年度に繋ごうとしている。



1 「ひと | HITO」展ダンス・パフォーマンス《HITO》



2 ミュージアム・コンサート「OCHI BROTHERS アフリカン・サウンド×エル・アナツイ」で演奏する越智ブラザーズと県立岩戸養護学校の生徒たち



3 横浜国立大学附属鎌倉小学校の中庭に設置された、渡辺豊重《モクモク》(1988年)

## 作品蒐集管理活動

購入・寄贈状況 2011(平成23)年3月31日現在

2009(平成21)年度末の総点数	11,423点
2010(平成22)年度の購入点数	14点
2010(平成22)年度の寄贈等点数	466点
2010(平成22)年度の取得総点数	480点
2010(平成22)年度末の収蔵総点数	11,903点

寄託状況 2011(平成23)年3月31日現在

2009(平成21)年度からの更新分	67件	作品点数	240点
2010(平成22)年度中の解除分	4件 <sup>※1</sup>	作品点数	8点
2010(平成22)年度の新規受入分	3件 <sup>※2</sup>	作品点数	5点
2010(平成22)年度合計	69件	作品点数	237点

※1 4件の内3件は寄託継続あり

※2 3件とも新規寄託者

## 2010年度 新収蔵作品一覧

【凡例1】寸法について、原則として平面作品は縦×横の順に、立体作品は高さ×幅×奥行の順に記した。単位はcm(センチメートル)である。

但し、版画については、イメージ寸法の縦／支持体寸法の縦×イメージ寸法の横／支持体寸法の横の順に「/」で区切って記した。

【凡例2】署名年記は、書き込みの位置を示して記した。印、落款は「 」で記し、書き込みが無い場合は「-」で記した。

【凡例3】版画が台紙に貼付されている場合、台紙の寸法はイメージの寸法、支持体の寸法の後に「/」で区切って示した。

【凡例4】素描のうち、台紙上に複数点添付または描かれている場合、「:」で列挙して記した。

## 購入

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書き込み等	備考
<b>油彩・アクリル画など</b>						
伊藤存	フィーディング サークル	2010	布に刺繍、パネル	118×80	-	
児玉靖枝	気配-萌黄	2007	油彩、カンヴァス	130.3×130.3	-	
小西真奈	Untitled	2007	油彩、カンヴァス	117×91	-	
高橋信行	ハイキングコース2	2010	アクリル、カンヴァス	91×91	-	
東島毅	冬南(ふゆみなみ)	2009	ガラス、ミクストメディア、紙	107.6×78.8	-	
保坂毅	Stripe05(Kiwaku)	2006-08	油彩、膠、MDFボード、木材	43×49×6.5	-	
保坂毅	Form8-1~6(6点)	2007	油彩、蜜蝋、膠、MDFボード、木材	各13.0×24.0×5.5	-	
保坂毅	Form9-2~3(2点)	2007-10	油彩、膠、MDFボード、木材	各13.0×24.0×6.5	-	
三輪美津子	SKELETON(spider)	2009	油彩、カンヴァス	80×80	-	
渡辺豊重	鬼	2010	油彩、アクリル、金箔、カンヴァス	218.2×290.0	右下:T. WATANABE. 2010	
<b>彫刻・インスタレーションなど</b>						
岡崎和郎	三種の心器(3点組)《筒-hear something...》	2004	アクリル樹脂の筒にシルクスクリーン	4.5×26×4.5	-	
岡崎和郎	三種の心器(3点組)《櫛-レディ・メイド》	2004	真鍮	18×7.5×9.5	-	
岡崎和郎	三種の心器(3点組)《球-P.M.ボール》	2004	エポキシ樹脂に彩色	φ9.5	-	
<b>水彩・素描画など</b>						
山下菊二	玉雪に脱ぐ	1975	コラージュ、紙	45.2×44.3	-	
<b>神奈川県立近代美術館賞 油彩・アクリル画など</b>						
吉本伊織	景	2010	黒鉛、アクリル、墨、カンヴァス	100×150	-	第46回神奈川県美術展
中村温子	無言の譜(冬)	2010	油彩、カンヴァス	162×130	-	第50回神奈川県女流美術家協会展

## 寄贈

〈吉村洋子氏寄贈〉

素描・水彩画など

吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(1)	不詳	インク、紙	25.8×18.1	-	「AQUA VISTA」(1977)のための原画
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(2)	不詳	インク、紙	18.8×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(3)	不詳	インク、紙	19.6×18.1	-	同上

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(4)	不詳	インク、紙	25.0×18.2	-	「AQUA VISTA」(1977)のための原画
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(5)	不詳	インク、紙	25.8×18.3	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(6)	不詳	インク、紙	24.3×17.8	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(7)	不詳	インク、紙	21.3×15.4	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(8)	不詳	インク、紙	19.9×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(9)	不詳	インク、紙	25.8×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(10)	不詳	インク、紙	18.2×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(11)	不詳	インク、紙	18.1×19.9	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(12)	不詳	インク、紙	18.1×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(13)	不詳	インク、紙	18.1×19.7	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(14)	不詳	インク、紙	25.8×18.1	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(15)	不詳	インク、紙	25.8×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(16)	不詳	インク、紙	14.4×16.7	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(17)	不詳	インク、紙	20.0×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(18)	不詳	インク、紙	25.8×18.1	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(19)	不詳	インク、紙	25.7×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(20)	不詳	インク、紙	25.4×19.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(21)	不詳	インク、紙	20.0×18.2	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(22)	不詳	インク、紙	17.8×25.8	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(23)	不詳	インク、紙	24.8×17.5	-	同上
吉村弘	「AQUA VISTA」のための原画(24)	不詳	インク、紙	12.8×18.0	-	同上
吉村弘	AQUA VISTA(1)	不詳	インク、紙	18.7×18.5	-	
吉村弘	AQUA VISTA(2)	不詳	インク、紙	22.0×18.1	-	
吉村弘	AQUA VISTA(3)	不詳	インク、紙	25.7×18.3	-	
吉村弘	AQUA VISTA(4)	不詳	インク、紙	19.6×18.0	-	
吉村弘	AQUA VISTA(5)	不詳	インク、紙	20.4×11.1	-	
吉村弘	AQUA VISTA(6)	不詳	インク、紙	27.3×19.9	-	
吉村弘	AQUA VISTA(7)	不詳	インク、紙	26.8×18.4	-	
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](1) 表紙	1976	写真、インスタント・レタリング、紙	25.7×36.4	-	sometimes press刊 1976年10月20日
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](2) 扉	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](3)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](4)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](5)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](6)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](7)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](8)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](9)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](10)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](11)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](12)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](13)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](14)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](15)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](16)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](17)	1976	印刷物、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](18)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](19)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](20)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](21)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](22)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](23)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](24)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	sometimes press刊 1976年10月20日
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](25)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](26)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](27)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](28)	1976	紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](29)	1976	写真、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	concert on paper: scenic event [版下](30)	1976	複写、紙	25.7×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](1)	1977	紙、印刷物、修正液、写真、ヤスリ紙	25.8×36.4	表紙下:hiroshi yoshimura	sometimes press刊 1977年4月29日
吉村弘	sugar trip[版下](2)	1977	複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](3)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](4)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](5)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](6)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](7)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](8)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](9)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](10)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](11)//[裏面あり]	1977	印刷物、紙//印刷物、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](12)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](13)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](14)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](15)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](16)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](17)	1977	写真、複写、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](18)	1977	写真、印刷物、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](19)	1977	絵葉書、写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](20)	1977	写真、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	sugar trip[版下](21)	1977	写真、印刷物、紙	25.8×36.4	-	同上
吉村弘	scenic event #011578 SNOW SCAPES[表紙]	1978	インク、紙	25.8×18.2	-	sometimes press刊1978年3月(ノフォー マンス情報:新潟県十日町、出演:タージ マハル&友人たち、1月13日-16日)
<b>版画</b>						
吉村弘	sometimes press	1976	インク、紙	35.8×36.5	-	ゴム印試し刷
<b>写真・印刷物</b>						
吉村弘	scenic event #011578 SNOW SCAPES [写真](1)	1978	写真、紙	15.4×21.4	-	sometimes press刊1978年3月(ノフォー マンス情報:新潟県十日町、出演:タージ マハル&友人たち、1月13日-16日) 撮影: 吉村弘ほか
吉村弘	scenic event #011578 SNOW SCAPES [写真](2)	1978	写真、紙	15.4×21.4	-	同上
吉村弘	scenic event #011578 SNOW SCAPES [写真](3)	1978	写真、紙	15.4×21.4	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](1)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	1981年春刊
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](2)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](3)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](4)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](5)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](6)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](7)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](8)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](9)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	1981年春刊
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](10)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](11)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](12)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](13)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](14)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](15)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](16)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](17)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](18)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](19)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](20)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](21)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](22)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](23)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](24)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](25)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](26)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](27)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘	SOUND-SIGHT HIROSHI YOSHIMURA [コピー](28)	1981	複写、紙	29.7×21.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](1)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	sometimes press刊1977年6月12日 於鈴木昭男スタジオ
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](2)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](3)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](4)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](5)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](6)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](7)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](8)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](9)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](10)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](11)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](12)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上
吉村弘、鈴木昭男、 島田リ他	PERFORMANCE2 ② 〈エリック・サティの音具の為に…〉 [コピー](13)	1977	複写、紙	25.9×37.0	-	同上

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
<b>書籍・スケッチブック</b>						
吉村弘	「CONCERT ON PAPER」(1)	1970-1974/ 1974年以降	複写、紙	29.8×42.0	-	sometimes press刊
吉村弘	「CONCERT ON PAPER」(2)	1970-1973/ 1973年以降	複写、紙	29.8×42.0	-	同上
吉村弘	「concert on paper: scenic event」	1976	複写、紙	25.8×36.5×0.4	[聊] This copy is for haruko nakajima april 9 1977 hiroshi yoshimura	sometimes press刊
吉村弘	「surface」	1977	複写、紙	25.8×18.3×0.4	-	sometimes press刊

〈山下昌子氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など

山下菊二	幼いカラスの死(カデュース一世)	1956	油彩、カンヴァス	40.5×31.1	-	
山下菊二	わたしたち	1964	油彩、カンヴァス	39×51	-	
山下菊二	お前の目玉	1969	油彩、カンヴァス	29.1×20.0	-	
山下菊二	万里路	1971	油彩、カンヴァス	31.5×20.0	-	
山下菊二	飾り玉	1972	油彩、カンヴァス	33×24	-	
山下菊二	お面が還る	1977	油彩、カンヴァス	38.3×45.5	-	
山下菊二	鼓動	1979	油彩、カンヴァス	32×23	-	
山下菊二	手助け	1979	油彩、カンヴァス	40×31	-	
山下菊二	うける手	1976	油彩、カンヴァス	31.8×41.0	中下:Kikuji Ya- -76	

素描・水彩画など

山下菊二	原子爆弾救護報告 1	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	13点組
山下菊二	原子爆弾救護報告 2	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 3	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 4	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 5	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 6	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 7	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 8	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 9	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 10	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 11	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 12	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	原子爆弾救護報告 13	1970	コラージュ、発泡パネル	54×76	-	同上
山下菊二	炎の眼	1962	コラージュ、紙	41×26	-	
山下菊二	タマを見よ	1965	コラージュ、グワッシュ、紙	27.6×35.8	右下:-65 Kikuji -Ya	
山下菊二	守護神がゐる	1965	グアッシュ、紙	25.4×35.9	-	
山下菊二	思想運動 1	1971	コラージュ、グワッシュ、紙	33.5×41.5	-	「思想運動」1971年3月15日号表紙
山下菊二	思想運動 2	1971	コラージュ、グワッシュ、紙	25.0×36.5	-	「思想運動」1971年3月15日号表紙
山下菊二	無題	1983頃	グワッシュ、紙	54.0×37.8	-	
山下菊二	牛若丸と坊や(水俣病)	不詳	コラージュ、紙	35.0×25.5	-	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」表紙・裏表紙原画	1970	コラージュ、紙	28.0/28.7/22.4/23.0× 17.5/18.3/15.2/16.5	表紙右下:y-70	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.1	1968	コンテ、紙	26.0×19.3	なし	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.2	1968	コンテ、紙	25.9×18.8	-	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.3	1968	コンテ、紙	24.0×18.7	中下:y-68	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.4	1968	コンテ、紙	27.0×18.7	中下:y-68	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.5	1968	コンテ、インク、紙	8.6/14.4	11.4/18.9	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.6	1968	コンテ、紙	26.0×19.5	下:y	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.7	1968	コンテ、水彩、紙	26.0×19.2	なし	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.8	1968	コンテ、紙	26.2×16.5	左下:y-68	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.9	1968	鉛筆、紙	20.0×26.5	中下:y-68	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.10	1968	コンテ、紙	23.5×15.7	中:y	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.11	1968	コンテ、紙	25.2×18.0	右下:y	

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.12	1968	コンテ、紙	23.5×16.0	左下:y	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 no.13	1968	コンテ、水彩、紙	22.0/26.0×19.0/19.3	-	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 番外1	1968	コンテ、紙	20.5/26.2×5.4/9.7	右下:y	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 番外2	1968	コンテ、紙	9.5/18.8×7.5/13.1	左下:y	
山下菊二	三木卓著「わがキディ・ランド」挿画原画 番外3	1968	コンテ、紙	26.8×18.8	中下:y	
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 01-1	1966	コラージュ、紙	10.5/11.7×18.1/19.2	左下:y	朝日ジャーナル1966.1.2 第1回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 01-2	1966	コンテ、紙	14.9/16.6×10.4/18.2	右下:y 右:渚から来るもの 1-2	朝日ジャーナル1966.1.2 第1回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 02-1	1966	コンテ、紙	14.7/15.8×10.9/11.3	右下:y	朝日ジャーナル1966.1.9 第2回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 02-2	1966	コンテ、インク、紙	10.2/11.2×17.5/18.9	右下:y	朝日ジャーナル1966.1.9 第2回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 03-1	1966	コンテ、水彩、紙	14.3/24.3×10.5/17.4	左下:y 渚から来るもの 3-1	朝日ジャーナル1966.1.16 第3回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 03-2	1966	コンテ、紙	10.3/11.4×7.9/9.1	左下:y	朝日ジャーナル1966.1.16 第3回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 04-1	1966	コンテ、水彩、紙	7.9/9.1×9.3/10.3	右中:y	朝日ジャーナル1966.1.23 第4回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 04-2	1966	コンテ、水彩、紙	10.3/11.5×7.9/8.9	右下:y	朝日ジャーナル1966.1.23 第4回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 05-1	1966	コラージュ(リト)、コンテ、紙	14.5/15.8×10.2/11.5	左下:y	朝日ジャーナル1966.1.30 第5回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 05-2	1966	コラージュ(リト)、コンテ、紙	8.4/9.0×18.8/20.0	右下:y	朝日ジャーナル1966.1.30 第5回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 06-1	1966	コラージュ、紙	17.1/18.2×8.4/9.5	右下:y	朝日ジャーナル1966.2.6 第6回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 06-2	1966	コラージュ、紙	9.5/10.8×13.3/14.6	右下:y	朝日ジャーナル1966.2.6 第6回掲載
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 07-1・2	1966	コラージュ、紙	10.3/11.4:10.3/11.5× 21.6/22.3:21.8/22.4	-	朝日ジャーナル1966.2.13
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 08-1	1966	コラージュ、紙	14.4/15.7×10.2/11.5	右下:y	朝日ジャーナル1966.2.20
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 08-2	1966	コラージュ、紙	14.4/15.6×10.3/11.5	左下:y	朝日ジャーナル1966.2.20
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 09-1	1966	コラージュ、紙	8.1/9.3×10.3/10.3	左下:y	朝日ジャーナル1966.2.27
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 10-1	1966	コンテ、紙	12.3/13.8×11.8/13.5	左下:y	
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 10-2	1966	コンテ、紙	10.3/11.6×17.8/19.1	右下:y	
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 11-1	1966	コラージュ、コンテ、紙	32.3/33.5×7.0/8.2	右下:y	朝日ジャーナル1966.3.13
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 11-2	1966	コラージュ、コンテ、紙	10.2/11.6×10.2/11.5	右下:y	朝日ジャーナル1966.3.13
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 12-1	1966	コラージュ、紙	21.0/22.0×7.0/8.0	右下:y	朝日ジャーナル1966.3.20
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 12-2	1966	コンテ、紙	14.5/15.7×14.4/15.7	-	朝日ジャーナル1966.3.20
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 13-1	1966	コンテ、紙	14.7/23.7×10.4/19.1	右下:y	朝日ジャーナル1966.3.27
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 13-2	1966	コンテ、紙	10.4/18.6×21.9/26.8	右下:y	朝日ジャーナル1966.3.27
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 14-1	1966	コンテ、紙	9.4/10.7×20.7/22.9	中下:y	朝日ジャーナル1966.4.3
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 14-2	1966	コンテ、紙	9.5/10.7×21.8/22.8	-	朝日ジャーナル1966.4.3
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 15-1	1966	コラージュ、紙	15.8/17.0×21.8/23.0	右下:y	朝日ジャーナル1966.4.10
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 16-1	1966	コンテ、紙	19.9/21.2×10.5/11.7	左下:y	
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 16-2	1966	コラージュ、紙	11.8/12.9×14.5/15.7	右中:y	
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 17-1	1966	コンテ、紙	21.6/26.6×7.0/18.8	左下:y	朝日ジャーナル1966.4.24
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 18-1	1966	コラージュ、紙	12.5/13.8×12.0/13.4	-	朝日ジャーナル1966.5.1
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 18-2	1966	コンテ、鉛筆、紙、インク	10.3/11.5×22.3/23.6	中下:y	朝日ジャーナル1966.5.1
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 19-1	1966	コンテ、紙	14.8/15.9×10.3/11.5	右下:y	朝日ジャーナル1966.5.8
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 19-2	1966	コンテ、紙	10.3/11.4×17.3/19.0	左下:y	朝日ジャーナル1966.5.8
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 20	1966	コラージュ、紙	8.6/9.9:8.6/9.9× 20.0/20.7:20.0/20.7	(右)中下:y	朝日ジャーナル1966.5.15
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 21-1	1966	コラージュ、紙	18.6/26.0×6.5/18.0	左上:y	朝日ジャーナル1966.5.22
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 22	1966	コラージュ、紙	9.3/22.3:9.3/22.3× 21.6/22.3:21.6/22.3	(左)左下:y (右)右下:y	朝日ジャーナル1966.5.29
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 23-1	1966	コンテ、紙	14.2/15.6×10.2/11.5	右下:y	朝日ジャーナル1966.6.5
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 23-2	1966	コラージュ、紙	9.6/10.9×21.8/23.0	右下:y	朝日ジャーナル1966.6.5
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 24-1	1966	コンテ、紙	14.7/15.9×10.4/11.6	中下:y	朝日ジャーナル1966.6.12
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 24-2	1966	コンテ、紙	10.4/11.7×17.7/19.0	右下:y	朝日ジャーナル1966.6.12
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 25-1	1966	コラージュ、コンテ、紙	25.5/26.9×6.6/7.8	左下:y	朝日ジャーナル1966.6.19
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 25-2	1966	コラージュ、コンテ、紙	11.9/13.4×12.5/13.7	右下:y	朝日ジャーナル1966.6.19
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画 26-1	1966	コラージュ、紙	11.7/12.7×12.3/13.5	右中:y	朝日ジャーナル1966.6.26



作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	26-2	1966	コラージュ、紙	9.4/10.5×21.6/22.8	右下:y 朝日ジャーナル1966.6.26
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	27-1	1966	コンテ、紙	14.3/15.5×10.1/11.2	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.3
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	27-2	1966	コンテ、紙	12.4/13.7×17.0/18.2	右下:y 朝日ジャーナル1966.7.3
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	28-1	1966	コラージュ、紙	14.5/26.5×11.7/19.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.10
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	28-2	1966	コラージュ、紙	21.5/23.0×9.4/10.6	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.10
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	29-2	1966	コラージュ、紙	10.3/19.1×21.7/26.4	右下:y 朝日ジャーナル1966.7.17
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	30-1	1966	コラージュ、紙	10.2/17.8×21.8/26.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.24
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	30-2	1966	コラージュ、紙	10.1/17.6×21.5/26.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.24
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	31-1	1966	コラージュ、コンテ、紙	14.0/15.4×9.7/11.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.31
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	31-2	1966	コラージュ、コンテ、紙	10.2/11.5×17.6/19.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.7.31
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	32-1	1966	コンテ、紙	25.6/26.5×6.7/7.5	右下:y 朝日ジャーナル1966.8.7
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	32-2	1966	コラージュ、紙	8.2/7.7×14.2/26.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.8.7
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	33-1	1966	コラージュ、紙	12.4/13.7×11.7/13.0	左下:y 朝日ジャーナル1966.8.14
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	33-2	1966	コラージュ、紙	10.4/11.7×21.7/23.1	左:y 朝日ジャーナル1966.8.14
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	34-1	1966	コラージュ、紙	18.3/19.7×10.3/11.4	中下:y 朝日ジャーナル1966.8.21
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	34-2	1966	コラージュ、紙	11.3/12.4×21.5/22.8	左下:y 朝日ジャーナル1966.8.21
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	35-1	1966	コラージュ、紙	16.8/18.0×12.4/13.6	中下:y 朝日ジャーナル1966.8.28
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	35-2	1966	コラージュ、紙	12.5/13.8×16.8/18.2	右下:y 朝日ジャーナル1966.8.28
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	36	1966	コラージュ、紙	10.3/11.2:10.3/11.1× 21.4/21.8:21.5/21.8	(左)左下:y (右)中下:y 朝日ジャーナル1966.9.4
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	37-1	1966	コンテ、インク、紙	23.0/24.1×7.2/8.5	右下:y 朝日ジャーナル1966.9.11
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	37-2	1966	コラージュ、コンテ、紙	18.2/19.2×12.7/13.8	左:y 朝日ジャーナル1966.9.11
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	38-1	1966	コラージュ、紙	18.0/19.3×10.3/11.6	右中:y 朝日ジャーナル1966.9.18
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	38-2	1966	コラージュ、紙	10.2/11.3×21.3/22.6	右中:y 朝日ジャーナル1966.9.18
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	39-1	1966	コラージュ、コンテ、紙	18.8/20.0×10.0/11.6	右下:y 朝日ジャーナル1966.9.25
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	39-2	1966	コンテ、紙	12.0/13.3×18.6/20.2	右下:y 朝日ジャーナル1966.9.25
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	40-1	1966	コンテ、紙	15.5/16.5×11.7/12.8	右下:y 朝日ジャーナル1966.10.2
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	40-2	1966	コンテ、紙	10.0/11.2×21.6/23.0	右下:y 朝日ジャーナル1966.10.2
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	41-2	1966	コンテ、紙	11.5/12.5×22.4/23.4	左下:y 朝日ジャーナル1966.10.9
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	42-1	1966	コラージュ、紙	12.3/13.5×11.5/12.5	右下:y 朝日ジャーナル1966.10.16
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	42-2	1966	コンテ、紙	12.9/18.4×22.8/26.7	右下:y 朝日ジャーナル1966.10.16
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	43-1	1966	コンテ、紙	19.7/20.8×8.5/9.6	左下:y 朝日ジャーナル1966.10.23
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	43-2	1966	コンテ、水彩、紙	11.8/12.7×21.0/22.2	右下:y 朝日ジャーナル1966.10.23
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	44	1966	コンテ、紙	21.0/22.4×21.5/23.0	右下:y 朝日ジャーナル1966.10.30
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	06-L	1966	水彩、コンテ、ペン、紙	10.0/17.8×21.5/25.8	中下:y
山下菊二	開高健著「渚から来るもの」挿画原画	06-R	1966	コラージュ、ペン、紙	10.0/18.0×21.5/25.9	右上:y
山下菊二	大江健三郎著「われらの時代」表紙原画		1963	水彩、紙	20×27	画中右:y
山下菊二	大江健三郎著「個人的な体験」表紙原画		1981	水彩、紙	25.7/27.4×18.0/21.0	右下:y
山下菊二	大江健三郎著「個人的な体験(2)」		1981	水彩、紙	25.5/28.4×19.6/19.8	画中右下:y
山下菊二	大江健三郎著「日常生活の冒険」表紙原画		1971	水彩、紙	20×32	画中右寄り:y
山下菊二	大江健三郎著「見るまゝに跳べ」表紙原画		不詳	水彩、紙	19.8×27.0	画中右下:y
山下菊二	大江健三郎著「空の怪物アグイー」表紙原画		不詳	水彩、紙	22.3×31.8	画中右寄り:y
山下菊二	大江健三郎著「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」表紙原画		不詳	水彩、紙	22.8×31.6	画中左寄り:y
山下菊二	大江健三郎著「われらの狂気を生き延びる道を教えよ」(I)		不詳	水彩、紙	22.9×31.5	中:y
山下菊二	大江健三郎著「遅れてきた青年」表紙原画		不詳	水彩、紙	28.3×37.3	画中右寄り:y 左下:遅れてきた青年(E)
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用1]		不詳	水彩、紙	22.0×30.3	画中右:y 新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用2]		不詳	水彩、紙	26.9×37.7	中:y 新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用3]		不詳	水彩、紙	25.6×32.0	- 新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用4]		不詳	水彩、紙	23.2×31.5	右中:y 新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用5]		不詳	水彩、紙	23.7×32.0	- 新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用6]		不詳	水彩、紙	21.8×30.7	中:y 新潮文庫

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用7]	不詳	水彩、紙	22.0×30.5	中:y	新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用8]	不詳	水彩、紙	22.0×30.5	右下:y	新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用9]	不詳	水彩、紙	23.0×31.4	-	新潮文庫
山下菊二	大江健三郎著文庫本 表紙原画 [未使用10]	不詳	水彩、紙	23.0×31.5	-	新潮文庫
山下菊二	開高健著「歩く影たち」表紙原画	不詳	コンテ、水彩、紙	28.4×22.5	右下:y	
山下菊二	だから人間なんだ	1985	グワッシュ、紙	25/28.2×36.5/40.0	右下:y	『だから人間なんだ』表紙裏表紙
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(1)	1973	コンテ、鉛筆、紙	22.4×9.2	-	朝日ジャーナル1973.9.21 第3回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(2)	1973	コンテ、鉛筆、紙	22.3×19.1	-	朝日ジャーナル1973.9.21 第3回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(3)	1973	コンテ、紙	16.4×18.8	-	朝日ジャーナル1973.9.21 第3回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(4)	1973	コンテ、紙	12.4×21.4	-	朝日ジャーナル1973.10.5 第5回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(5)	1973	コンテ、紙	24.4×19	-	朝日ジャーナル1973.10.12 第6回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(6)	1973	コンテ、紙	24.5×19	-	朝日ジャーナル1973.10.12 第6回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(7)	1973	コンテ、紙	21.8×17.9	-	朝日ジャーナル1973.11.2 第9回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(8)	1973	コンテ、紙	14.4×21.9	-	朝日ジャーナル1973.11.2 第9回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(9)	1973	コンテ、紙	23.0×15.4	-	朝日ジャーナル1973.11.9 第10回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(10)	1973	コンテ、紙	6.7×6.7	-	朝日ジャーナル1973.11.9 第10回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(11)	1973	カラージュ、紙	14.5/15.4×22.7/23.6	-	朝日ジャーナル1973.11.9 第10回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(12)	1973	コンテ、紙	21.9×15.4	-	朝日ジャーナル1973.11.16 第11回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(13)	1973	コンテ、紙	22.9×15.5	-	朝日ジャーナル1973.11.16 第11回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(14)	1973	コンテ、紙	17.9×15.2	-	朝日ジャーナル1973.11.23 第12回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(15)	1973	コンテ、紙	23.5×14.9	-	朝日ジャーナル1973.11.23 第12回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(16)	1973	カラージュ、紙	19.3×26.8	-	朝日ジャーナル1973.11.23 第12回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(17)	1973	コンテ、紙	24.3×17.3	-	朝日ジャーナル1973.11.30 第13回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(18)	1973	コンテ、紙	18.4×17.3	-	朝日ジャーナル1973.12.14 第14回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(19)	1973	コンテ、紙	10.9×6.8	-	朝日ジャーナル1973.12.14 第14回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(20)	1973	コンテ、紙	22.8×14.8	-	朝日ジャーナル1973.12.28 第16回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(21)	1973	コンテ、紙	25.4×16.4	-	朝日ジャーナル1973.12.28 第16回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(22)	1973	コンテ、紙	24.9×15.4	-	朝日ジャーナル1974.1.4~11 第17回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(23)	1973	カラージュ、コンテ、紙	14.8×25.3	-	朝日ジャーナル1974.2.1 第20回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(24)	1973	コンテ、カラージュ、紙	22.9×15.8	-	朝日ジャーナル1974.2.1 第20回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(25)	1973	カラージュ、水彩、紙	24.9×13.9	-	朝日ジャーナル1974.2.8 第21回
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(26)	1973	コンテ、紙	12.3×17.5	左下:聊齋②コオロギの声 コオロギ	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(27)	1973	コンテ、紙	15.0×20.9	下:聊齋②コオロギの声 蝦蟇	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(28)	1973	コンテ、紙	25.7×18.4	右:聊齋③恐妻と科挙と 天十の従臣	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(29)	1973	コンテ、紙	20.7×18.1	右上:聊齋③恐妻と科挙と	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(30)	1973	コンテ、紙	25.2×21.0	左下:私説聊齋志異⑤	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(31)	1973	コンテ、紙	16.6×25.0	左下:私説聊齋志異⑤	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(32)	1973	コンテ、紙	21.2×24.7	下:聊齋⑥ 西日の射す部屋	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(33)	1973	コンテ、紙	16.2×25.3	左下:聊齋⑦	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(34)	1973	コンテ、紙	25.5×14.0	右下:聊齋⑧5	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(35)	1973	コンテ、紙	25.5×19.6	右下:聊齋⑩F	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(36)	1973	コンテ、紙	25.1×16.3	左下:聊齋⑪C	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(37)	1973	コンテ、紙	25.2×16.0	左下:聊齋⑪A	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(38)	1973	コンテ、紙	25.6×17.8	右下:聊齋⑫B	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(39)	1973	コンテ、紙	16.2×25.4	左下:聊齋⑫D	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(40)	1973	コンテ、紙	25.5×16.0	右下:聊齋⑬E	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(41)	1973	コンテ、紙	25.4×19.6	右下:聊齋⑬D	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(42)	1973	コンテ、カラージュ、紙	27.0×19.3	左下:聊齋⑭C	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(43)	1973	コンテ、紙	27.0×19.2	左下:聊齋⑭B	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(44)	1973	コンテ、紙	26.7×19.4	左下:聊齋⑮D	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(45)	1973	コンテ、紙	27.0×18.9	左下:聊齋⑮F	掲載なし

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(46)	1973	コンテ、紙	26.7×19.3	左下:聊齋⑤F	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(47)	1973	コンテ、紙	26.7×19.5	左下:聊齋⑤F	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(48)	1973	コンテ、紙	26.8×19.0	右下:聊齋⑥A	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(49)	1973	コンテ、紙	27.0×18.9	右下:聊齋⑥C	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(50)	1973	コンテ、コラーージュ、紙	19.0×27.1	右下:聊齋②C	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(51)	1973	コンテ、紙	21.9×13.7	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(52)	1973	コンテ、紙	25.3×21.0	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(53)	1973	コンテ、紙	25.5×20.0	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(54)	1973	コンテ、紙	25.4×19.8	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(55)	1973	コンテ、紙	25.2×19.4	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(56)	1973	コンテ、紙	25.2×20.0	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(57)	1973	コンテ、紙	18.0×25.6	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(58)	1973	コンテ、紙	12.7×20.0	右:y	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(59)	1973	コンテ、紙	26.7×11.8	-	掲載なし
山下菊二	安岡章太郎著「私説 聊齋志異」挿画原画(60)	1973	コンテ、紙	24.9×8.7	-	掲載なし

#### 版画

山下菊二	おも足一丁	1984	リトグラフ、紙	35.2×26.8	左下:A.P.右下:Kikuji.Ya-'84	
山下菊二	せかされた手	1984	リトグラフ、紙	40.7×30.1	左下:3/30 右下:Kikuji.Ya-'84	
山下菊二	だあれの果	1984	リトグラフ、紙	29.6×39.3	左下:A.P.右下:Kikuji.Ya-'84	
山下菊二	わけあう二人	1984	リトグラフ、紙	41×30	左下:3/20 右下:Kikuji.Ya-'84	
山下菊二	牛のいる風景	1962	リトグラフ、紙	23.0/32.0×37.9/47.1	左下:2/15 牛のいる風景 右下:Kikuji.Ya'62	
山下菊二	黄泉を識る梟	1981	リトグラフ、紙	25.5/44.6×40.2/54.2	左下:H.C. 中下:黄泉を識る梟 右下:Kikuji.Ya-'81	
山下菊二	無題	1962	リトグラフ、紙	23.0/32.1×14.2/23.5	左下: Trial Proof 右下: Kikuji Ya-'62	
山下菊二	無題	1962	リトグラフ、紙	23.0/32.1×14.2/23.5	左下: Trial Proof 右下: Kikuji Ya-'62	

#### 〈青木茂氏寄贈〉

##### 書籍・冊子

-	『逆賊』	不明	木版、紙	25.0×34.0		
-	『神奈川県庁文書』	1872	木版、紙	22.0×29.0		
-	『西畫指南・前編上・下 後編附圖』	1875	木版、紙	22.0×15.1		合本一冊
-	『佐賀征討戦記』(五姓田義松画)	1875	石版筆彩、紙	22.8×15.5		和綴
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	1-1~3, 5~12(11点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	2-1~4(4点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	3-1~12(12点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	4-1~6(6点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	5-1~12(12点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	6-1~5(5点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	7-1~5(5点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊
Armand Cassagne	Le dessin pour tous	8-1~5(5点)	不明	印刷物、紙	各31.0×23.8	Fouraut (Paris): Lechertier Barbe (London)刊

#### 〈橘川雄一氏寄贈〉

##### 素描・水彩画など

柳原義達	鳩	不詳	サインペン、紙	32.0×40.8	-	
柳原義達	裸婦デッサン(1)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(2)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(3)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
柳原義達	裸婦デッサン(4)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(5)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(6)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(7)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(8)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(9)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(10)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(11)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(12)	不詳	ペン、紙	40.8×32.0	-	
柳原義達	裸婦デッサン(13)	不詳	ペン、紙	32.0×40.8	-	

#### 〈郭徳俊氏寄贈〉

##### 版画

郭徳俊	オバマと郭	2009	シルクスクリーン、紙	51.8/73.0×36.6/51.5	右下:11/30 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	ブッシュ2001(II)と郭	2005	シルクスクリーン、紙	52.5/73.0×37.0/51.5	左下:28/30 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	ブッシュ2001と郭	2005	シルクスクリーン、紙	52.0/73.0×37.0/51.5	左下:12/20 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	カータと郭	2007	シルクスクリーン、紙	54.0/73.0×37.2/51.5	左下:3/30 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	レーガンと郭	2007	シルクスクリーン、紙	54.0/73.0×37.2/51.5	左下:3/30 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	レーガン(II)と郭	2006	シルクスクリーン、紙	53.8/73.0×39.5/51.5	左下:6/20 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	クリントンと郭	2003	シルクスクリーン、紙	54.8/73.0×41.3/51.5	左下:4/30 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	クリントン(II)と郭	2003	シルクスクリーン、紙	51.9/73.0×37.0/51.5	左下:7/30 右下:Duck Jun Kwak
郭徳俊	ブッシュ(父)と郭	2010	シルクスクリーン、紙	51.9/73.0×37.0/51.5	左下:2/30 右下:Duck Jun Kwak

#### 〈浜田知明氏寄贈〉

##### 版画

浜田知明	聖馬	1950	エッチング、紙	21.1/31.8×14.3/21.8	-
浜田知明	初年兵京歌(山を行く砲兵隊)	1953	エッチング、アクアティント、紙	23.7/40.6×16.4/33.0	-
浜田知明	副校長D氏像	1956	エッチング、紙	21.0/41.2×14.0/31.7	-
浜田知明	飛翔	1958	エッチング、アクアティント、紙	35.9/50.2×44.4/66.3	-
浜田知明	群盲	1960	エッチング、アクアティント、紙	28.8/45.3×29.0/37.8	-
浜田知明	カタコンベ	1966	エッチング、アクアティント、紙	34.6/53.0×34.8/50.3	-
浜田知明	ボタン(B)	1988	エッチング、アクアティント、紙	35.4/50.5×50.8/66.8	-
浜田知明	忘れえぬ顔A	2008	ボールペン、鉛筆、紙	20.5/28.1×29.2/33.3	左下:2008 8/28 Chimei H.

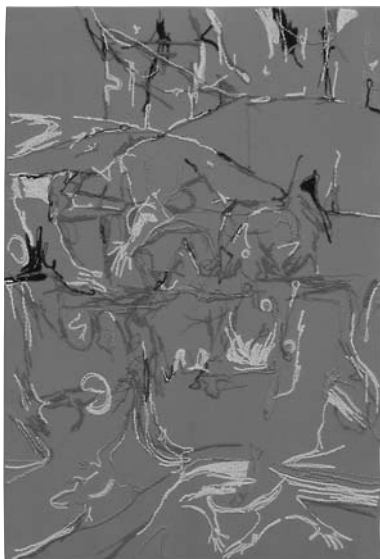
#### 〈渡辺豊重氏寄贈〉

##### 油彩画・アクリル画など

渡辺豊重	鬼(把握せんと)	2009	アクリル、松煙、木炭、カンヴァス	215×463	右下:T. WATANABE '09
渡辺豊重	鬼(相克)	2009	アクリル、雲母、松煙、木炭、カンヴァス	214×624	右下:T. WATANABE '09 豊重
渡辺豊重	鬼(四面楚歌)	2009	アクリル、松煙、木炭、カンヴァス	354×214	右下:'09 T. WATANABE.
渡辺豊重	鬼	2009	アクリル、パステル、墨、松煙、木炭、紙	63.5×94.0	右下:T. WATANABE '09 印[豊]
渡辺豊重	鬼	2009	アクリル、パステル、墨、松煙、木炭、紙	63.5×94.0	右下:T. WATANABE '09 印[豊]
渡辺豊重	鬼	2009	アクリル、パステル、墨、松煙、木炭、紙	63.5×94.0	右下:T. WATANABE '09 印[豊]
渡辺豊重	鬼と童子	2010	油彩、アクリル、松煙、木炭、カンヴァス	130.3×162.0	-
渡辺豊重	立ち向かう	2010	油彩、アクリル、松煙、木炭、カンヴァス	259.0×193.9	右下:'10 T. WATANABE

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
<b>〈山梨俊夫氏寄贈〉</b>						
<b>彫刻・インスタレーション</b>						
カディシュマン、メナシュ	母なる大地	2001	鉄	23.2×36.5×15.5	裏面:M.Kadishman	
カディシュマン、メナシュ	誕生(人生のはじまり)	2009	真鍮	25.5(可変)×25.0×17.0	右上:M.Kadishman	1989年の素描による制作
三木富雄	耳	1966	アクリル、シルクスクリーン、鉄釘、ブロンズ	24.8×18.1×6.6	—	
<b>素描・水彩画など</b>						
松本陽子	ドローイング	1994	木炭、パステル、紙	64.8×99.5	左下:'94 Yoko Matsumoto	
<b>版画</b>						
メナシュ・カディシュマン	ヒツジ	1981	リトグラフ、インク、紙	69.8/76.5×93.0/112.0	左下:M.Kadishman	AP10部のうちの1点、その他75部限定版あり ケルブラ工房(ロンドン)
ヤン・シュヴァンクマイ	『博物誌』よりエル	1973	エッチング、水彩、紙	75×58	左下:1/21	
シャルル・マリオン	小塔(医学校街22番地)	1861	エッチング、紙	18×12	—	
<b>〈川妻さちこ氏寄贈〉</b>						
<b>油彩画・アクリル画など</b>						
鎌木昌弥	倒れながら——コマンド——	1988	アクリル、グワッシュ、鉛筆、和紙	45×60	—	
鎌木昌弥	白い胸——体を脱ぎ捨てたい	1988	アクリル、水彩、鉛筆、紙	67×50	—	
鎌木昌弥	僕の小さな犬	1985	パステル、鉛筆、グワッシュ、ボード	72.4×51.5	—	
<b>素描・水彩画など</b>						
鎌木昌弥	人形	1970	鉛筆、紙	54.5×39.5	—	
<b>〈菅野鈴子氏寄贈〉</b>						
<b>油彩画・アクリル画など</b>						
菅野功	ピンのある静物	1975	油彩、カンヴァス	91.1×73.0	右下:I.Kan	
菅野功	赤い燈台	1978	油彩、カンヴァス	100.3×100.3	右下:I.Kan	
菅野功	梅干入れとピンのある静物	1980頃	油彩、カンヴァス	80.3×80.3	右下:I.Kan	
菅野功	つるしがきの静物	1990頃	油彩、カンヴァス	73×73	右下:I.Kan	
<b>〈鈴木道子氏寄贈〉</b>						
<b>版画</b>						
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-2(Yobitsugi-2)	2003	アーカイバル・インクジェット、トナーエッチング、シルクスクリーン、シンコレ、ゴールドビグメント、紙	78.0×113.7	左下:5/10 中下:Interconnection-2 (Yobitsugi-2) 右下:Michiko.S/2003 Wayne. Eastcott/[印]/[印]	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-4(Visibility-1)	2005	アーカイバル・インクジェット、シルクスクリーン、紙	89.8/113.1×65.0/87.3	左下:2/7 中下:Interconnection-4 (Visibility-1) 右下:Michiko.S/2005 Wayne. Eastcott/[印]/[印]	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-4(Visibility-2)	2005	アーカイバル・インクジェット、シルクスクリーン、紙	89.8/113.1×65.0/87.3	左下:2/7 中下:Interconnection-4 (Visibility-2) 右下:Michiko.S/2005 Wayne. Eastcott/[印]/[印]	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-4(Visibility-3)	2005	アーカイバル・インクジェット、シルクスクリーン、紙	89.8/113.1×65.0/87.3	左下:2/7 中下:Interconnection-4 (Visibility-3) 右下:Michiko.S/2005 Wayne. Eastcott/[印]/[印]	
<b>〈山本宏一氏寄贈〉</b>						
<b>素描・水彩画など</b>						
山本彪一	醸造風景	1941	水彩、鉛筆、紙	59.5×76.0	右下:'1941- H.Y.	
山本彪一	夕暮	1941	水彩、紙	59.3×75.2	右下:1941- H.Y.	
山本彪一	リング箱、ニンとさざえ	1960	水彩、紙	114.4×75.6	左下:YAMA.HYO. 60	
山本彪一	丸い椅子のある静物	1960	水彩、紙	114.7×75.7	左下:YAMA.HYO. 1960	

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(cm)	署名年記・書込み等	備考
<b>〈栗田政裕氏寄贈〉</b>						
<b>書籍・スケッチブック</b>						
栗田政裕	『イマジオ&ポエティカ』第34号	2010	木口木版	220(11.8/220:9.8/14.5)× 18.0(9.3/18.0:6.9/11.9)	(2点とも) 左下:36/99 mas. kurita	2点木口木版あり。《夜に咲く花》:《夜華》 制作:ボックスウッドクリエーション 刊行:イマジオ&ポエティカ
栗田政裕	『イマジオ&ポエティカ』第35号	2011	木口木版	21.8(11.1/21.8:7.0/12.5)× 18.0(8.8/17.8:6.9/13.1)	左下:36/99 右下:Mas. Kurita: 左下:36/99 中央下: "水中花" 右下:Mas. Kurita	2点木口木版あり。《もうひとつの街》:《水 中花》制作:ボックスウッドクリエーション 刊行:イマジオ&ポエティカ
<b>〈賛美小舎 上田國昭氏、克子氏寄贈〉</b>						
<b>日本画</b>						
山本直彰	Door S-1	1995	岩絵具、箔、アートグルー、 木扉、麻、紙	201.1×253.4	-	
山本直彰	帰還 VII-我々は何処へ行くのか	2010	岩絵具、墨、箔	291.0×737.6	-	8枚組
<b>〈アートギャラリー環 川妻正年氏寄贈〉</b>						
<b>油彩画・アクリル画など</b>						
鑄本昌弥	処刑シリーズ 犬のいる男たちの光景	1991	アクリル、グワッシュ、和紙	42.1×58.0	-	
<b>〈橋秀文氏寄贈〉</b>						
<b>彫刻・インスタレーション</b>						
山本正道	雲の形	1971	石灰石	21×51×27	-	



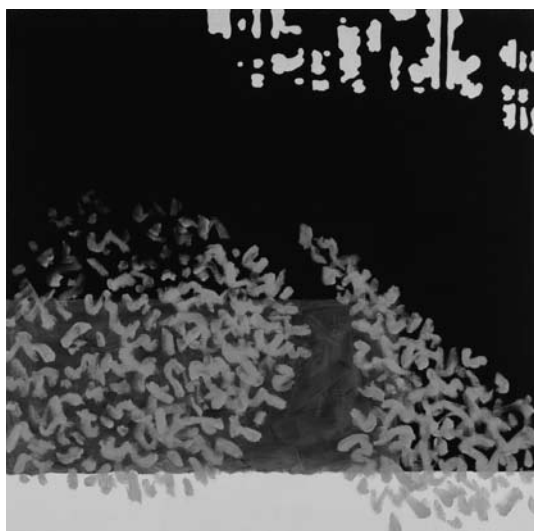
伊藤存

フィーディング サークル  
2010年  
布に刺繍、パネル  
118×80cm



小西真奈

Untitled  
2007年  
油彩、カンヴァス  
117×91cm



高橋信行

ハイキングコース2  
2010年  
アクリル、カンヴァス  
91×91cm



**三輪美津子**

SKELETON (spider)

2009年

油彩、カンヴァス

80×80cm



**渡辺豊重**

鬼

2010年

油彩、アクリル、金箔、カンヴァス

218.2×290.0cm

右下:T. WATANABE. 2010



**岡崎和郎**

三種の心器 (3点組) 《球-P.M.ボール》

2004年

エポキシ樹脂に彩色

φ9.5cm





**カディッシュマン、メナシュ**

誕生(人生のはじまり)

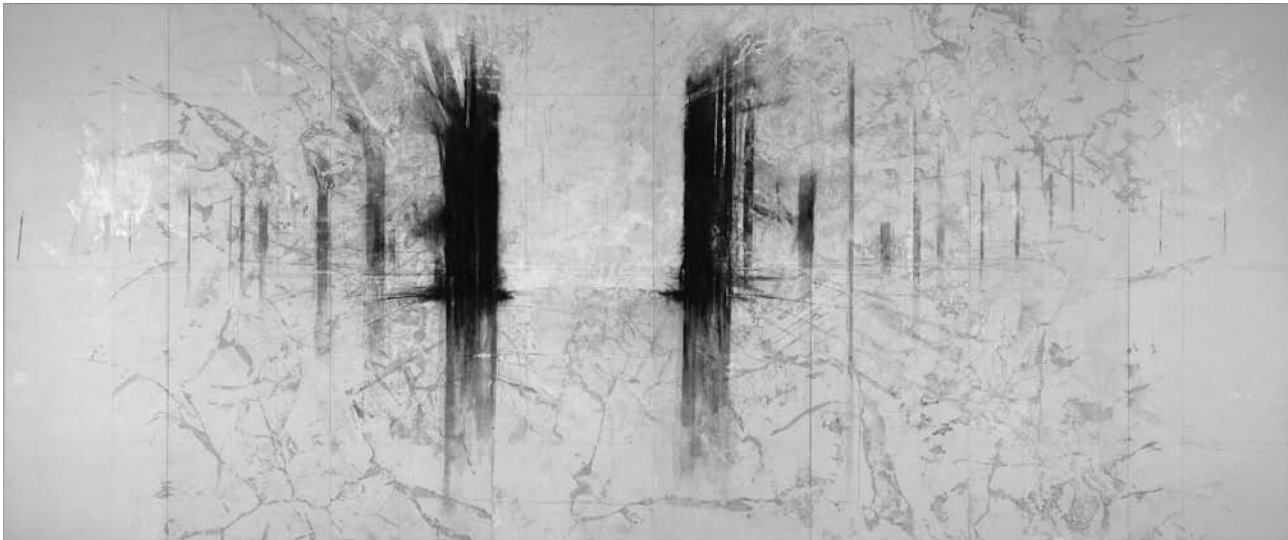
2009年

真鍮

25.5(可変)×25.0×17.0cm

右上:M.Kadishman

1989年の素描による制作



**山本直彰**

帰還 VII—我々は何処へ行くのか

2010年

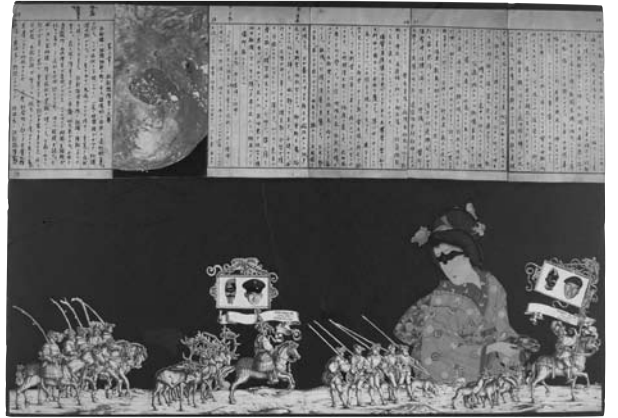
岩絵具、墨、箔

291.0×737.6cm

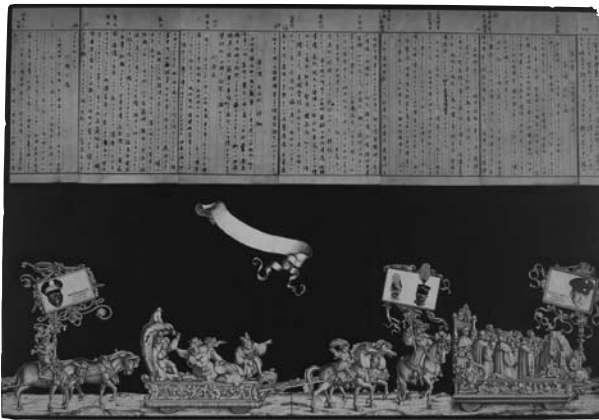
8枚組



4



3



8



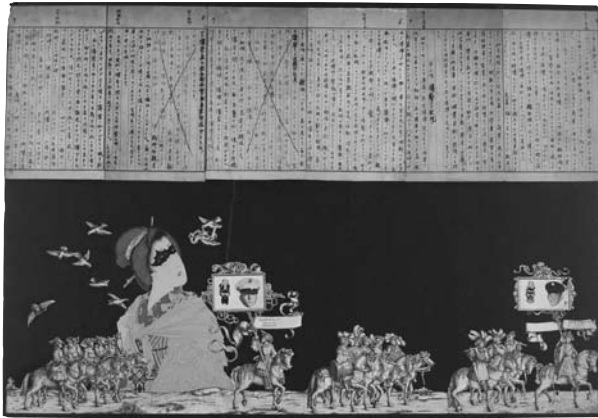
7



12



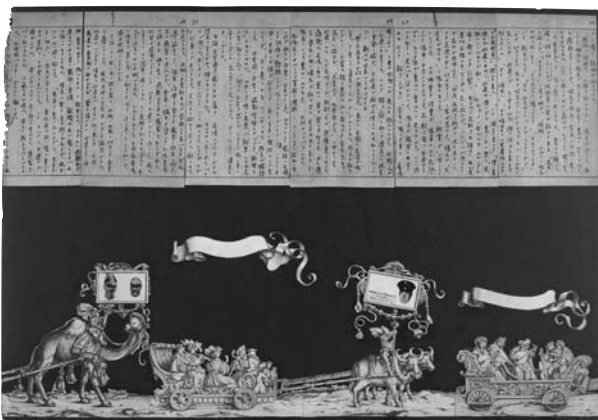
11



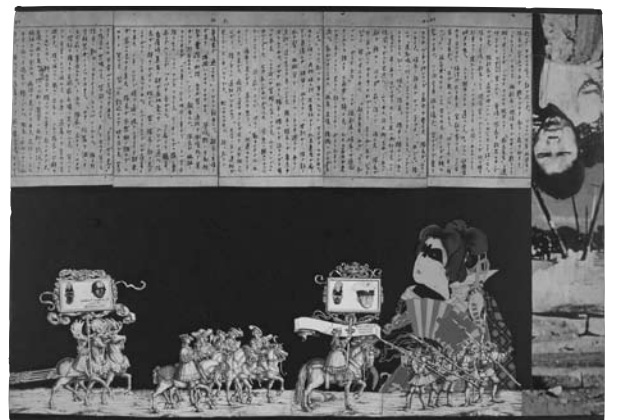
2



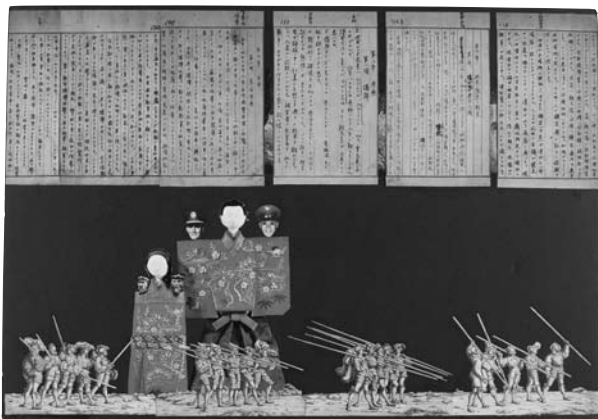
1



6



5



10



9

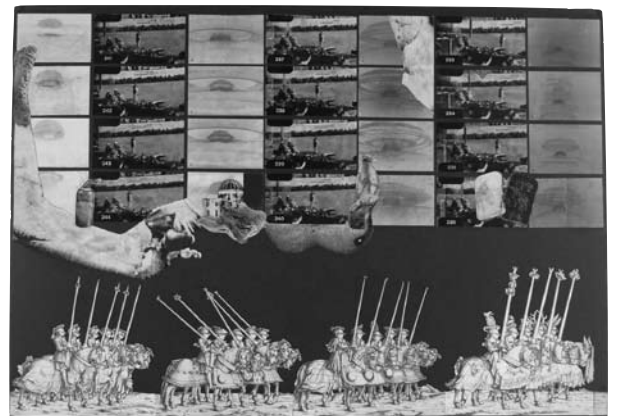
山下菊二

原子爆弾救護報告 1~13(13点組)

1970年

コラージュ、発泡パネル

各54×76cm



13

## 館外貸出作品一覧

開催初日が2010年4月1日から2011年3月31日までの展覧会に限る

件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
1	1~6	エドゥアール・マネ《『大鴉』1~6》	「挿絵本の世界 きれい、カワイイ、怖い——本と版画のステキな関係」町田市立国際版画美術館(4月10日~6月6日)
2	7	菅野圭介《(ハ)風景》	「菅野圭介展 色彩は夢を見よ」横須賀美術館(4月24日~6月13日)、一宮市三岸節子記念美術館(6月19日~7月19日)
	8	菅野圭介《雪山》	
3	9	片岡球子《面構 足利義満》	「片岡球子展」札幌芸術の森美術館(4月24日~5月30日)、北海道立旭川美術館(6月5日~7月25日)
	10	片岡球子《面構 足利義政》	
	11	片岡球子《面構 鳥文齋栄之》	
	12	片岡球子《面構 歌川国芳》	
	13	片岡球子《面構 足利尊氏》	
	14	片岡球子《幻想》	
	15	片岡球子《海(鳴門)》	
	16	片岡球子《火山(浅間山)》	
	17	片岡球子《火山(浅間山)》	
	18	片岡球子《面構 日蓮》	
	19	片岡球子《面構 白隠》	
	20	片岡球子《面構 国貞改め三代豊国》	
	21	片岡球子《カンナ》	
4	22	青山義雄《二人の男》	「麗子登場！一名画100年・美の競演 神奈川県立近代美術館×兵庫県立美術館」兵庫県立美術館(6月15日~7月19日)
	23	朝井閣右衛門《電線風景》	
	24	麻生三郎《死者》	
	25	阿部展也《飢え》	
	26	有島生馬《赤い帽子》	
	27	安藤伸太郎《日本の寺の内部》	
	28	井上長三郎《標的》	
	29	今西中通《真珠》	
	30	岩橋英遠《仙》	
	31	内田巖《港》	
	32	梅原龍三郎《椿》	
	33	片岡球子《面構 豊太閤と黒田如水》	
	34	加山又造《凍る日輪》	
	35	川村清雄《静物(筍と水仙)》	
	36	川村清雄《百合と桃》	
	37	岸田劉生《村娘》	
	38	岸田劉生《童女図(麗子立像)》	
	39	久米民十郎《郎駱駝と従者/王妃たち》	
	40	小出楯重《静物(乙女椿とレモン)》	
	41	児島善三郎《立てるソニア(横向きの裸婦)》	
	42	五姓田義松《港(横浜風景)》	
	43	斎藤義重《鬼》	
	44	佐伯祐三《滯船》	
	45	佐藤哲三《クンセイ》	
	46	里見勝藏《花のある静物》	
	47	佐野繁次郎《画家の肖像(死んだ画家)》	
	48	澤田哲郎《乞食》	
	49	清水登之《映画館》	
	50	荘司福《虚》	
	51	関根正二《村岡みんの肖像》	
	52	高橋由一《江の島図》	
	53	島海青児《段々唄》	
	54	永野芳光《静物》	
	55	福沢一郎《ほき料理人》	
	56	藤田嗣治《二人裸婦》	
	57	本多錦吉郎《中禅寺湖夜景》	
	58	松本竣介《橋(東京駅裏)》	
	59	松本竣介《立てる像》	
	60	村井正誠《ウルパン》	
	61	村山槐多《風船をつく女》	
	62	森芳雄《動》	

件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
	63	柳瀬正夢《静物(百合)》	
	64	山口薫《千手(黒夫人)像》	
	65	山口蓬春《宴》	
	66	山下菊二《松川裁判(機関車は知っている挟まれた俺)》	
	67	横山操《波濤》	
	68	吉原治良《作品》	
	69	萬鉄五郎《日傘の裸婦》	
	70	脇田和《慈鳥》	
	71	和達知男《眼鏡をかけた自画像》	
	72	高村光太郎《裸婦坐像》	
	73	戸張孤雁《惶く嫉妬》	
	74	中原悌二郎《若きカフカス人》	
	75	藤川勇造《裸婦立像》	
	76	向井良吉《アフリカの木》	
5	77	多和圭三《無題》	「鉄を叩(たた)く—多和圭三展」足利市立美術館(6月26日-8月22日)、町立久万美術館(9月4日-10月31日)、日黒区美術館(11月13日-2011年1月9日)
6	78	寄託(彫刻)	「若林奮Dog Field DRAWING 1980-1992」多摩美術大学美術館(6月30日-7月25日)
7	79	山口長男《曲線》	「九室の風を浴び 山口長男・斎藤義重・吉原治良と、高橋節郎」安曇野高橋節郎記念美術館(7月17日-8月29日)
	80	山口長男《切込》	
	81	山口長男《過》	
	82	山口長男《條》	
	83	斎藤義重《漁村》	
	84	吉原治良《帆柱》	
	85	吉原治良《作品(黒地に白四角)》	
8	86	高橋由一《江の島園》	「府中市美術館開館10周年記念展 パルピノンからの贈りもの～至高なる風景の輝き」府中市美術館(9月17日-11月23日)
	87	本多錦吉郎《中禅寺湖夜景》	
	88	松岡壽《工部大学校風景》	
9	89	奥谷博《足摺遠雷》	「奥谷博自選展 開館35周年記念—愛と生命の刻を描く—」池田20世紀美術館(10月7日-2011年1月11日)
	90	奥谷博《鏡の中の自画像と骨》	
10	91	堀文子《蓮》	「堀文子展」平塚市美術館(10月9日-11月23日)
	92	堀文子《初秋》	
	93	堀文子《霧水》	
11	94	松本竣介《山王山風景》	「松本竣介 その透明な生」今治市玉川近代美術館(10月16日-12月19日)
	95	松本竣介《建物》	
	96	松本竣介《橋(東京駅裏)》	
	97	松本竣介《構図》	
	98	松本竣介《立ち話》	
	99	松本竣介《都会》	
	100	松本竣介《Y市の橋(裏面:甲州街道沿い)》	
12	101	山口蓬春《加彩唄》	「山口蓬春と安田靉彦—至高の美を求めて—」山口蓬春記念館(10月16日-12月23日)
	102	山口蓬春《模写・女史箴図(2)》	
	103	山口蓬春《模写・佐竹三十六歌仙》	
	104	図書資料《蓬春文庫》 3点:良寛「布留散東」和漢書、「支那古明器泥像図鑑」2点	
13	105	中川一政《静物(びん・白布)》	「自己を生かす道—「白樺」群像—文学と美術の源」調布市武者小路実篤記念館(10月28日-12月5日)
14	106	上野誠《平和を語る》	「MOTコレクション クロニクル1947-1963 アンデパンダンの時代」東京都現代美術館(10月29日-2011年5月8日)
	107	上野誠《広島の人》	
	108	上野誠《いつものおじさん》	
	109	上野誠《手》	
15	110	オットー・ディックス《ネリーII》(麻生コレクション)	「オットー・ディックスの版画 戦争と狂乱—1920年代のドイツ」伊丹市立美術館(11月3日-12月9日)
	111	オットー・ディックス《子供の肖像》	
	112	宗像久敬サイン帳	
	113~116	図書資料(仲田文庫) 4点: <i>Jahrbuch der Jungen Kunst</i> , 1924; <i>Das Kunstblatt</i> , 40th year, vol.11 no.3 March, 1927; <i>Die Kunst des 20.Jahrhunderts</i> , 1926; <i>Das Kunstblatt</i> , vol4 no.6 June, 1920	
16	117~122	鏑木清方《お夏清十郎物語》全6点	「七絃会開催80周年記念展—主情派、清方の美—」鎌倉市鏑木清方記念美術館(11月6日-12月12日)
	123	鏑木清方《一葉園(下絵)》	
	124	鏑木清方《婦人園》(村田コレクション)	
17	125	麻生三部《手》	「麻生三部展」東京国立近代美術館(11月9日-12月19日)、京都国立近代美術館(2011年1月5日-2月20日)、愛知県美術館(2011年4月29日-6月12日)
	126	麻生三部《海》	
	127	麻生三部《自画像》	
	128	麻生三部《形態 A》	
	129	麻生三部《形態 B》	
	130	麻生三部《狂人の家》	
	131	麻生三部《女》	
	132	麻生三部《人のいる風景》	
	133	麻生三部《人のいる風景》	

件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
	134	麻生 三郎《死者》	
	135	麻生 三郎《ある群像》	
	136	麻生 三郎《ある群像2》	
	137	麻生 三郎《ある群像3》	
	138	麻生 三郎《人いる人》	
	139	麻生 三郎《りょうしの人》	
	140	麻生 三郎《人》	
	141	麻生 三郎《ブールデルのアトリエで》	
	142	麻生 三郎《モンマルトル》	
	143	麻生 三郎《人》	
	144	麻生 三郎《北海道大学構内》	
	145	麻生 三郎《北海道》	
	146	麻生 三郎《裸》	
	147	麻生 三郎《裸》	
	148	麻生 三郎《人》	
	149	麻生 三郎《子供》	
	150	麻生 三郎《数寄屋橋 運河》	
	151	麻生 三郎《おばあちゃん》	
	152	麻生 三郎《隅田川(起重機)》	
	153	麻生 三郎《のぞく》	
	154	麻生 三郎《煙突》	
	155	麻生 三郎《三軒茶屋》	
	156	麻生 三郎《自画像》	
	157	麻生 三郎《自画像》	
	158	麻生 三郎《目A》	
	159	麻生 三郎《横になった人》	
	160	麻生 三郎《空》	
	161	麻生 三郎《立つ人 2》	
	162	麻生 三郎《ヨコノ人》	
	163	麻生 三郎《人》	
	164	麻生 三郎《人-10》	
	165	麻生 三郎《人-8》	
	166	麻生 三郎《空》	
	167-170	寄託(油彩) 4点	
18	171	江見絹子《暁に聞く》	「現代郷土作家展 江見絹子展」姫路市立美術館(11月13日-12月19日)
	172	江見絹子《ヴァニシングポイント》	
	173	江見絹子《作品》	
	174	江見絹子《作品1》	
	175	江見絹子《作品3》	
	176	江見絹子《作品4》	
	177	江見絹子《作品5》	
	178	江見絹子《作品6》	
	179	江見絹子《作品7》	
	180	江見絹子《作品8》	
	181	江見絹子《クロノスの貌》	
	182	江見絹子《空の輪臺》	
	183	江見絹子《萬象の海》	
	184	江見絹子《FUDARAKU》	
	185	江見絹子《無の手筈(ルバイヤートより)》	
	186	江見絹子《光の階梯》	
	187	江見絹子《幻想と秩序》	
	188	江見絹子《第五元素》	
	189	江見絹子《エデン 落日》	
	190	江見絹子《光る土・歌う水》	
	191	江見絹子《生誕》	
	192	江見絹子《むれ(2)》	
19	193	福沢一郎《よき料理人》	「20世紀検証シリーズNo.2 福沢一郎絵画研究所 進め!日本のシュルレアリスム」板橋区立美術館(11月20日-2011年1月10日)
20	194	寄託(彫刻)	「中 平四郎一師、川上邦世とともに」群馬県立館林美術館(12月11日-2011年4月3日)
21	195	保田春彦《白い風景(1)》	「保田春彦—デッサンによる人間探求」世田谷美術館(2011年1月20日-4月10日)
	196	保田春彦《白い風景(2)》	
	197	保田春彦《白い風景(3)》	
22	198	阿部合成《鱈をかつぐ人》	「芸術の青森展」青森県立美術館(2011年1月22日-3月21日)
	199	鷹山宇一《荒野の歌》	

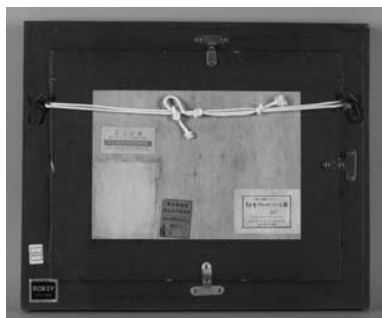
件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
23	200	中川一政《静物(びん・白布)》	「中川一政展」日本橋高島屋(2011年3月2日-3月21日)
	201	中川一政《青山二郎像》	
24	202	青木繁《真・善・美》	「没後100年 青木繁展」石橋財団石橋美術館(2011年3月25日-5月15日)、京都国立近代美術館(2011年5月27日-7月10日)、ブリヂストン美術館(2011年7月17日-9月4日)

当館を含む巡回展への貸出作品

件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
1	1	古賀春江《窓外の化粧》	「新しい神話がはじまる。古賀春江の全貌」石橋美術館(7月3日-9月5日)、神奈川県立近代美術館 葉山(9月18日-11月23日)
	2	古賀春江《サーカスの景》	
	3	図書資料(仲田文庫) 1点: <i>Bilderei der Geisteskranken</i> , H.Prinzhorn, Berlin, 1922	
2	4	辻晋堂《迷盲》	「生誕100年 彫刻家 辻晋堂」鳥取県立博物館(11月27日-2011年1月10日)、神奈川県立近代美術館 鎌倉(2011年1月29-3月27日)
	5	辻晋堂《詩人(これ我かまた我に非ざるか)》	



1. 〈修復前〉額装



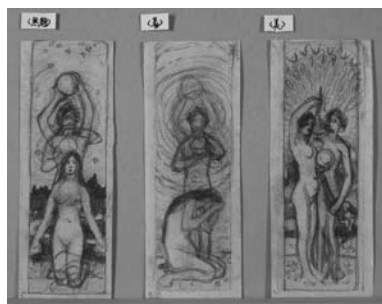
2. 〈修復前〉額装裏



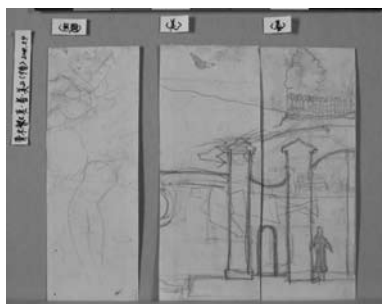
3. 〈修復前〉旧マット装 右上と左下隅の字がマットに隠れて見えない



4. 〈修復前〉旧マット装裏



5. 〈修復後〉脱酸処理後、紙の黄化が軽減された



6. 〈修復後〉裏面「美」「善」の裏面には繋がった風景スケッチが描かれている



7. 〈修復後〉「美」新調額での個別の額装



8. 〈修復後〉新調額裏面



9. 〈修復中〉水酸化マグネシウム水溶液に作品を浮かせて脱酸処理をした

作家名：青木繁

作品名：真・善・美

鉛筆、紙

制作年：不詳

寸法(mm)：「善」145×54 「美」146×58 「無題」146×53

### 修復前の所見

本作品は三枚の短冊状の紙に描かれた鉛筆素描であり、一枚のマットに三つの窓を開けてマット装をして額装されている。作品の固定は直接窓マットの裏面に、紙片と接着剤で上辺と左辺の二箇所を止めている。その裏から厚手のボール紙を当て、裏板を装着している。作品に直接当てられていたボール紙は酸化が著しく褐色に変色しており、直接触れていた作品の酸化原因ともなっていたと考えられる。

左側作品の表上方に目立つ褐色のしみがあり、右側作品の上方右寄りにはピンホールがある。三枚とも裏面上方に褐色の不定形のしみがみられる。支持体のPHIは5で酸性寄りであり、酸化のため黄変している。作品を旧マットから外し、脱酸処理をし、中性紙のマットに交換する必要がある。

### 施工処置

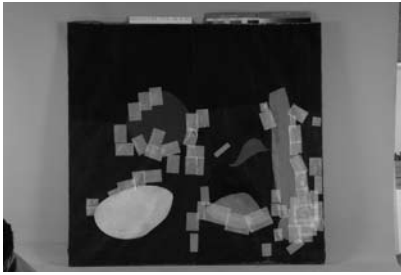
1. 撮影、状態調査
2. ドライクリーニング(粉末ゴム)
3. 水洗、敷き干し
4. 脱酸処置(水酸化マグネシウム)
5. 水洗
6. プレス
7. 三枚の作品を別々に新調マットに装着、個別の額装とした

### 作品と額装の変更について

マット紙はグレーのミューズ紙で窓周辺部に鉛筆で三重のラインを引き、薄く彩色した装飾が施されていたがオリジナルではないため、中性紙の白の新調マットに交換した。また、額装時、マットに隠れていた右上と左下の文字も見えるマット装にした。

作品をマットから外すと、二点の作品の右上隅に文字が記されており、額装右側の作品には「善」、左側の作品には「美」と書かれている。中央の作品には記述がない。(以降、「善」「美」「無題」と記す)。作品は三枚とも裏面にスケッチがあり、「美」と「善」の二枚の図柄は並び替えると連続する風景の図柄となり、元は一枚の紙であった事がわかる。「無題」の裏面は裸体背面のラフなスケッチである。二枚繋げた風景スケッチと同様の場所をスケッチした青木の別の素描が存在する。「善」と「無題」の作品の図柄については手前の人物のポーズは違うが、背景には二種類の同様のポーズの人物が、各作品の中で構図を探るかのように重ねて描かれている。三作品の左下隅には小さな文字が記されていて、「美」には“七”、「善」には“7”、「無題」には“三”と思われる記述が見られる。作者は大作の制作構想を練っていた時期もあると言われ、本素描は構想中の作品の下図であったことが想定される。本作品は、当初「真善美」という三点一作品として理解されていたが、実際には「真」と記されたものがないことや、構図の試行錯誤の跡などから、三作品を当初から「真善美」として描かれたとすることや、額装での順番などを決定付ける根拠が希薄であることから、額装を個別に行うことにした。また、当館としては各作品を「善」「美」「無題」と題して展示をすることになっているが、収蔵品の登録としては題名を、当面、混乱を避けるために従来通り、「真・善・美」のままにしている。今後さらに調査を続行する予定である。

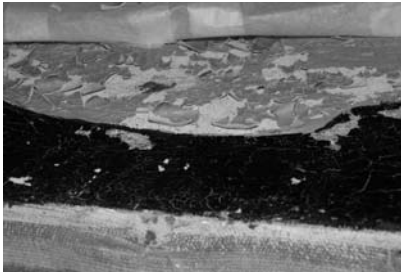




1. 〈修復前〉表 搬送前、絵具層保護のため部分表打ちを行った



2. 〈修復前〉裏



3. 〈修復前〉部分 冠水の影響を受けた絵具層は、地塗り層と共に浮き上がりが生じている



4. 〈修復中〉浮き上がりが接着



5. 〈修復後〉表



6. 〈修復後〉裏

作家名：山口長男

作品名：かたち

油絵具、画布

制作年：1951年

寸法(mm)：〈修復前〉1612×1709×33 〈修復後〉1618×1715×42

### 修復前の所見

同じ寸法の木枠に張られた二枚の画布を、左右に連結して本作品としている。

画面には、経年の汚れが付着し、黒色絵具には黴が発生している。絵具層は、厚塗りで固着状態が悪く、画面全体に亀裂や浮き上がり、剥落が生じている。特に冠水の影響を受けた下辺の損傷は著しい。画布は、たわみや絵具の厚塗りで変形が生じている。裏面には塵埃が付着し、冠水によるしみや黴が発生している。木枠は、角の接合部に歪みがあり不安定な状態である。

### 施工処置

1. 絵具の浮き上がりを、電気鋺と膠水で接着した。
2. 裏面を清掃後、エタノールで殺菌した。
3. 画布裏面周囲に、補強のため亜麻布を合成樹脂接着剤(BEVA371)で接着した。
4. 作品を仮張りし、加温、減圧により画布の変形を修正した。
5. 画面の汚れや黴を、希アンモニア水溶液を用いて洗浄した。
6. 新調した楔付き木枠に作品を張り直した。
7. 絵具剥落箇所を、充填剤(ポロニーヤ石膏・膠水)を充填し整形をした。
8. 画面に、チアベンダゾールを主剤とした防黴剤入りワニスを塗布した。
9. 充填整形部分を、修復用溶剤型樹脂絵具で補彩をした。
10. 下層にダンマルワニス、上層にパラロイドB72ワニスを噴霧した。
11. 左右二枚の作品は、連結部分の木枠にステンレス板をビス留めして固定した。
12. 新調した額縁に、作品を装填しT字金具で固定した。

### 修復後の所見

輸送にあたり養生を必要とするほど損傷していた絵具層は、接着により取り、また画布の変形を修正したことで平面性を取り戻し、作品全体が安定した状態になった。画面は、付着した汚れや黴の影響より、くすんだ印象であったが、洗浄により絵具本来の発色が蘇った。

木枠は歪み、新たな張り込みに耐える強度が不足していたため交換した。また、作品の歪み修正と寸法の変更に伴いオリジナルの額縁は使用できなかったため、同様の額縁を新調した。

作家名：渡辺豊重

作品名：SWING86-01

鉄、ポリウレタン樹脂塗料

制作年：1986年

寸法(mm)：2200×500×h.2500

### 修復前の所見

作品は屋外展示であり、常に屋外の環境変化の影響下にあり、鳥や虫の糞など損傷要因が付着しやすい。

天井部分の塗装膜が20cm四方ほど剥落を起こしている。剥落片はほぼ剥落箇所の大さきそのまま残っているため、天井面は広範囲において固着が悪くなっていることが分かる。鳥の糞などによる腐蝕から水分が塗膜下に侵入したり、直射日光の影響による鉄板の伸縮で塗膜の固着が悪くなっていると考えられる。

側面、底面、躯体鉄板継ぎ合わせのコーナー、架台周りには内側からの腐蝕でピンホールができ、塗膜を膨張、剥離させている箇所が数か所見られる。

### 施工処置

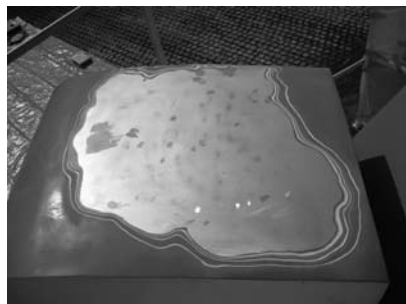
1. 調査、撮影
2. 飛散防止用仮設ネットの設置
3. 塗装剥離、腐食部分の削り出し除去、清掃
4. 削り出し部と塗装面との段差をポリパテで充填し、下地調整
5. 下塗り(プライマー、ハイボン20デクロロ液型エポキシ樹脂吹付け)
6. 中塗り(ポリウレタン樹脂吹付け)
7. 上塗り(ポリウレタン樹脂吹付け)
8. 撮影、報告書作成

### 修復後の所見

今回の修復で塗装の剥離、躯体金属の腐食部分を削り出し、充填、塗装を行って、塗装膜の浮き上がり箇所はなくなったが、今後同様の環境下では、鉄の腐蝕やそれに伴う塗膜層の浮き上がりは避けられず、損傷箇所を発見後、損傷が拡がる前に、速急に処置を施すことが必要である。



1. 〈修復前〉天井面の広範囲の剥落と腐蝕箇所



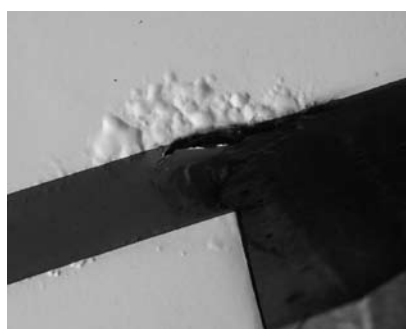
2. 〈修復中〉天井面腐蝕部削り出し



3. 〈修復後〉天井面仕上げ塗装後



4. 〈修復前〉鉄部分からの腐蝕



5. (修復前)腐蝕部分と塗装膜の浮き上がり



6. 〈修復中〉削り出し部分のパテ処理



7. 〈修復中〉損傷部下塗りプライマー塗装、作業スナップ

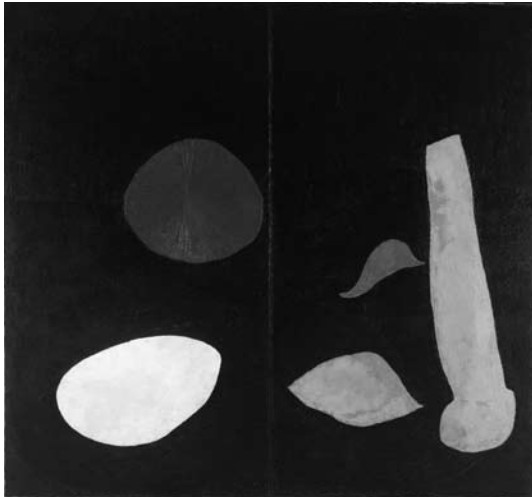


8. 〈修復後〉屋外の環境下で日々のチェックが必要である

## 2010年度 修復作品一覧

\*外部委託による修復は受託者名を記した。表記のないものは当館修復担当者による。

作家名	作品名	寸法(mm) h:高さ	制作年	種別	修復者 *
渡辺豊重	SWING 86-01	2200×500×h.2500	1986	彫刻	(有)クリーン塗装
渡辺豊重	五月の風の中で	700×180×h.470	1987、1996頃	彫刻	(有)クリーン塗装
渡辺豊重	よりそうふたつ	420×180×h.460	1986、1996頃	彫刻	(有)クリーン塗装
山口長男	かたち	1618×1715	1951	油彩画	(有)修復研究所21
佐野繁次郎	BON JOIN	670×507	1960年代	油彩画	斎藤敦
佐野繁次郎	アンリトロンシユ画廊の 個展ポスターのためのデッサン	462×370	1952	素描	斎藤敦
チャールズ・ワグマン	明治初期風俗画(人物)	221×143	不詳	素描	斎藤敦
アルベルト・ジャコメッティ	4つの頭部	183×221	不詳	素描	斎藤敦
エドゥアール・マネ	『大鴉』1	544×409	1875	版画	斎藤敦
メナシユ・カディシユマン	誕生(人生のはじまり)	250×170×h.255(hは可変)	2009	彫刻	
鶴田吾郎	田中不二肖像	605×502	不詳	油彩画	
五姓田義松	港(横浜風景)	500×605	1891頃	油彩画	
岸田劉生	童女図(麗子立像)	533×457	1923	油彩画	
麻生三郎	風景(竹やぶ)	337×610	1946	油彩画	
松本竣介	山王山風景	237×328	1927	油彩画	
ジョルジュ・ルオー	踊り子たち	361×216	1930年代	油彩画	
福沢一郎	黒人の子	730×908	1956	油彩画	
中川一政	静物(びん・白布)	235×328	1921	油彩画	
江見絹子	FUDARAKU	1308×1618	1980	アクリル画	
江見絹子	空の輪臺	1306×1622	1978	アクリル画	
山下菊二	誤字と当字	1820×2270	1976	油彩画	
山下菊二	空を斬る	970×1302	1976	油彩画	
山下菊二	水を斬る	1168×808	1976	油彩画	
山下菊二	マチガイ	1465×985	1976	油彩画	
山下菊二	射角キャンペーン5月20日	598×798	1960	油彩画	
山下菊二	わたしたち	390×510	1964	油彩画	
山下菊二	わたしの知らないMの母	411×321	1976	油彩画	
山下菊二	帰ってきた兵隊	533×776	1970	コラージュ	
山下菊二	玉雪に脱ぐ	546×468	1975	コラージュ	
山下菊二	戦争と狭山差別裁判	各728×518(37点組)	1976	コラージュ	
山下菊二	原子爆弾救護報告	各540×760(11点組)	1970	コラージュ	
山下菊二	機関車	572×455	1959	版画	
青木繁	真・善・美	善:145×54 美:146×58 無題:146×53	不詳	素描	
小林清親	威海衛上陸進軍之図	左:374×252 中央:375×251 右:373×251	1895	版画	
小林清親	冒管口厳寒我軍張露營之図	左:357×232 中央:358×233 右:358×233	1895	版画	
小林清親	我軍占領榮城湾上陸之図	左:358×233 中央:358×233 右:357×233	1895	版画	
小林清親	黄海之戦我松島之水兵臨死間敵艦之存否	左:373×250 中央:374×251 右:373×250	1895	版画	
小林清親	於土城子 大尉浅川氏之苦戦	左:368×249 中央:371×249 右:370×249	1895	版画	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-2 (Yobitsugi-2)	780×1137	2003	版画	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-4 (Visibility-1)	1131×873	2005	版画	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-4 (Visibility-2)	1131×873	2005	版画	
ウェイン・イーストコット / ミチコ・スズキ	Interconnection-4 (Visibility-3)	1131×873	2005	版画	



山口長男

かたち  
1951年  
1618×1715mm  
油彩画



岸田劉生

童女図(麗子立像)  
1923年  
533×457mm  
油彩画



山下菊二

玉雪に脱ぐ  
1975年  
546×468mm  
コラージュ

## 調査研究活動

### 研究・調査報告

#### 浜田知明の近作デッサンについて

橋秀文

2010年で92歳となった浜田知明は、戦後60年以上たった現在も、戦争の悲惨さを忘れることができない。

ここでは、戦後60年を経て今も戦争中の悲惨な出来事を絵に描いた浜田知明のデッサンについて解釈してみたい。

#### (浜田知明の戦争体験)

浜田知明の戦争体験が当然、彼の版画や彫刻の創作の基本になってくるわけだが、その見聞きしたものがそのまま作品に再現されるわけではない。

浜田知明の作品の不思議なところは、一見写実的なものではないのに真実味があるリアリティーを見せつけることができる点にある。それは、実際に軍隊体験を持ち、辛いやるせない気持ちをいだし、その実感が作品に反映されているからである。

浜田知明は言っている。「戦争の時は、余計に人を殺した人ほど偉いんですね。僕がどうも不思議なのは、戦地では非戦闘員にさえ平気で危害を加えるような人間がいるということです。僕が一番感じたのは日本人の質の悪さってこと。理解できないのがいますね。兵隊の話というのはほとんどが満期(除隊)の話と女のことがばっかり。なにかやるせないですね。」<sup>(註1)</sup>こうした言葉からも、彼の戦争から着想を得た作品の根底に流れる戦争に対する考え方が理解できる。

浜田知明は、1939(昭和14)年12月に熊本の歩兵第13連隊補充隊歩兵砲隊に入隊している。その後、北支派遣第37師団歩兵第225連隊に転属。浜田は、1940年1月、門司港から中国に向かい、山西省臨晋に到着、その地で作戦警備についている。山岳地帯の作戦では、山砲を分解し、馬の背に乗せて運ぶ。このときの山道をゆく砲兵隊の行軍の姿が、2008年に描かれた4点のデッサンに、さまざまな形で表れることになる。このデッサンを見ると、多くの戦争体験のなかでも、60年の時を経て収斂されたイメージということが出来る。それだけ砲兵隊の行軍がいつまでの記憶に残っているのであろう。逆に、1953年の《初年兵哀歌(山を行く歩兵隊)》を見ると、馬の背に山砲の車輪や砲身が見えるが、決して写実的に描いているわけではない。その時点では、経験した生々しいイメージが思い出されると、そのまま写実的に描く気持ちにはなれず、少し、客観的に突き放したイメージにまとめ上げたとと思われる。

1941(昭和16)年5月、日本軍が中国軍を包囲するという大作戦、いわゆる中原会戦に浜田知明も参加している。このとき下腹部に棒が突き刺さった女性の遺体を目撃しており、この情景から《初年兵哀歌(風景)》が制作されている。翌年には、連隊本部情報室にて勤務していた。1943年8月には、4年間の華北戦線から兵役満期で除隊している。しかし、1944年7月には、応召し、独立混成第18連隊に入隊し、伊豆七島の新島に派遣され、翌年の終戦で除隊復員した。この1939年から1945年のほとんどの間、軍隊生活を送っていたのである。21歳から27歳までということで、20歳代のほとんどの時期を軍隊で過ごしたことになる。

#### (《初年兵哀歌》の意味)

このシリーズは、軍隊の表面を見える様に描いたというよりも、初年兵からみた軍隊の内部の理不尽さが追求されたものであることを肝に銘じておくべきだ。《初年兵哀歌》シリーズは、14点からなっている<sup>(註2)</sup>。これらの作品は、思いつくままに描かれたもののように思われる。場合によっては、戦争を扱っても、初年兵が主人公でない場合は、当然そのシリーズには含まれない。そういったこともふまえて、

1951年から1954年にかけて集中して制作された。浜田知明は、戦場において、軍隊の理不尽さ、虚しさ、悲惨さなどを、生きて帰ったら、絵にして世間に訴えようと考えていた。そして、戦後、一気にその思いを銅版画に表現したのだった。それは、まさにストレートに生の感じて即座に表出されたのであった。その怒りの思いは、いつの時代も変わらないといえれば変わらないように見えるが、しかし、軍隊への憎しみは時とともに変質していくということになる。そこに作者の思いの変化を認めることができる。

#### (戦争主題への距離感)

1955年には、神奈川県立近代美術館で「今日の新人1955年展」が開催され、《初年兵哀歌》のシリーズも出品されているが、その後、土方定一から1955年に制作をしていないことから、この年は何をしていたのかと聞かれたことがあったという。後から振り返って「このころ、戦争をテーマに作品を作ることに新鮮な感動みたいなものが全然なくなってきたんです。“なま”な感じがでないから。もうこのへんでやめとこうって。あまり戦争戦争と言っているのも嫌だと。少し過去のことだけじゃなくて、ほかのこともやらなくちゃと、思ったんです。この年は、作品にならなかったんでしょう。作ってもだめだなんてかんで作品が残らなかったんだと思います。」と回想している<sup>(註3)</sup>。

ここでは、作者の正直な考えが吐露されている。やはり、軍隊での理不尽さを何とか絵画で表現しようとしたのが、銅版画による《初年兵哀歌》のシリーズであった。その主題を何年も繰り返し制作すると、創作の源が枯渇してしまうのも無理はない。また自発的に描きたくなるのを待つしかないのだ。その後、版画や彫刻で再び戦争や反原爆などのテーマを取り上げなくなるまで、時間を待つしかなかったのであろう。

#### (60年後に描かれたデッサン)

戦争という事象から平和を望む人々の気持ちを生かしつつ、真の平和としての生き方をはっきりと見ることをわかりやすく示す。

確かに、第二次世界大戦の終戦から60年経っても、戦争を起すことはならないといつも確認しつつ生きていくのがわたしたちの日常的な感情である。《初年兵哀歌》シリーズを集中して制作し終えた翌年の1955年に、何も制作することがなかったことは、先に見たところである。これは本当に正直なところで、創作活動は、たゆまない努力から生まれるものであろうが、また、判で押したように同じものが次々と生まれてくるものでもないことは明らかである。逆にまた、戦争のテーマの作品が全く作られなくなるわけではなく、いつもそのテーマは、浜田知明にとって最大の関心事であり、意識か無意識かを問わずに考えているはずである。このテーマがどのような形で視覚化されるかを作家はつねに考慮し続けているのであろう。

ただ、ここで確認しておかなければならないのが、1950年に制作した《初年兵哀歌(芋虫の兵隊)》から約60年経て描かれた2008年の《忘れぬ顔A》など4点のデッサンが決して、1950年代、60年代に制作した戦争をテーマにした作品のレプリカではなかったということである。戦争をテーマとした作品ではないものにしても、レプリカを作成するといった発想は、浜田知明にはないといっていざらう。

芸術家の創作活動のスタイルによっては、同じ主題で、繰り返し同じイメージを少しずつ変えていくヴァリエーションの作品創出を試みる人もいる。それは、芸術家の創作活動に対する考え方の違いによるものであろう。《刑場A》、《刑場B》や《黄土地帯A》、《黄土地帯B》といったようなものをヴァリエーションというのであろう。それゆえ彼の創作活動がヴァリエーションから全く無縁であるということではできない。しかし、レプリカとなるとどうであろうか。

油彩画では、主題をもとに何度もくりかえしレプリカを作成することは珍しくない。注文があつて複数描くこともあるだろう。さらに、油彩画の場合、レプリカというのは常に劣悪なイメージが付きまとうばかりとは言えない。フランス・ロマン派の画家ウジェーヌ・ドラクロワの場合、彼は、《アルジェの女たち》(1834)を北アフリカで取材してすぐに制作した後、約15年後に記憶をたどって新たな《アルジェの女たち》を制作している。ここでは、もはや写実性などどうでもよくなっており、画面の構成や色調の統一感に一層画家の意識が強まってきている。まさにドラクロワが絵画を純粋に絵画としてとらえようとしていると解釈できるわけだ。しかし、黒の色調の銅版画の世界でレプリカというのはなかなか難しい。複製版画になってしまうと独創性はどこか

註1) 「浜田知明年譜資料集」熊本県立美術館 2002年 p.9

註2) このシリーズの構成については、「戦争体験の無残な感覚のイメージ化」「戦争」が生んだ絵、奪った絵(2010年、新潮社)pp.28-38

註3) 前掲書 熊本県立美術館 2002年 p.21

にいてしまう。そうした点からも浜田知明の版画でレプリカの発想はほとんどない。

#### (記憶とイメージ)

60年を経て戦争体験をどのように浜田知明は抱き続けているのだろうか。おそらく鮮明に思い出されるイメージは、何十年も時を経てもあるのだろうか。前日の日常的な出来事よりも60年前の戦争体験の方が鮮やかに頭に蘇ってくることさえあると思われる。

芸術家は記憶をたどって過去の体験を手繰り寄せる。もちろん、その記憶をどのように意識するかで、その質が変わってくるであろう。おそらく、2008年に制作された4点のデッサンは、長い間に熟成したイメージの創出であったと考えられる。

《忘れえぬ顔A》(図1)と《忘れえぬ顔B》(図2)はまさに忘れられない記憶をもとに描いたわけである。《夜行軍、雨》(図3)と《夜行軍、山を行く砲兵隊》(図4)にしても、自身の体験を漫然と表現したわけではないであろう。この4点には、今もってというか、今思い返しても戦場で抱いた憎しみや怒りのようなものがこみあげてきて、その感情を、絵を描く理性が覆い尽くして引き出され、イメージが生まれたのである。

記憶から実体験は、新しい生命力を得る。

20世紀のフランスの小説家マルセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』は、言い換えると、「過ぎ去ったことを思い返して」いく小説ということになる。

よく聞く話だが、普段平凡な生活を送っていた人間が、戦争中に兵士になると信じられないほど凶暴な行動を起こすことがある。そのようなことを指摘する人は多い。戦争についていろいろな解釈を施す人がいるだろうが、この点に関して、マルセル・ブルーストは、次のように述べている。「そう考えると、彼等は根っからの悪人とも思われかねないが、しかしこの連中は戦場に出来れば優秀な兵士であり、無類の「勇敢な」兵士であったばかりか、多くは市民生活においても、善良そのものとは言わないまでも、心のやさしい人たちだった。彼らがもうずっと前から、自分たちの送っている生活のなかで何が道徳にかなない何がかなわないかも分からなくなっていたのは、それが彼らをとりまく人たちの生活だったからだ。そんな具合に、私たちは古代史のある時期を研究すると、個人的には善良な人々が平気で大量虐殺に加わったり、多くの人間を犠牲にしたりしているのを見て驚愕する。しかしおそらく彼らにはそれが当たり前のように思われたのだろう。」<sup>(註4)</sup>

この文章が書かれている文脈では、平凡な人間でありながら教育がないがために善悪の判断ができずにひどいことも平気で言うといった考え方をブルーストは表している。人間は、周囲の環境のなかで変化するというのは多くの人が語ってきたことだ。軍隊という場所に入ると厳しい規律によって、平凡な人間も残忍なことを平気で言う人間へと変貌するというのである。そこには、教育も何も入る余地がない。洗脳させることで、恐れを知らない軍団を作り上げようとするのが、軍隊上層部の目指すところだ。脱落は許されない。自由を奪う。そのような中では、人間らしい生活など存在する余地もない。

#### (沖縄での展覧会)

2011年8月から9月にかけて、沖縄県宜野湾市の佐喜眞美術館で「浜田知明展」が開催された。

浜田知明の版画と彫刻で構成されたこの展覧会では、普天間基地に隣接する会場で、まだ日本では、基地が存在し、そのことが平和と共存することが可能なのかを、われわれにつきつけた展覧会となった。戦争と平和、軍隊と住民など今後も考えさせられる問題はまだまだ残っている。浜田知明の芸術は、ますますわれわれに考えさせる問題を提起し続けることになるだろう。

#### (結論)

時間の流れというもの、いつの時代も人の心をつかんで離さない。生きていく以上、時間は流れていく。記憶というものを考える前に、現代に生きる日本人の多くは、時の流れを思う時に、どうしても、鴨長明による『方丈記』の「行く川の流るは絶えずして…」の文句を思い浮かべ、その無常の思想に影響を与えた孔子の『論語』の「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舍かず。」も脳裏をかすめる。浜田知明も古典の重みを知り、その意味をかみしめることもあるだろう。ただ、戦争の記憶を辿るとき、無常観とは異なる現実味が彼の頭の中に蘇ってくるはずだ。その証左として、2008年の4点のデッサンをあげることができるのだ。マルセル・ブルーストが『見いだされた時』で述べる「現在の瞬間において感じると同時に、遠い過去の瞬間においても感じていた結果」、「過去を現在に食いこませることになり、自分のいるのが過去なのか現在ののかも判然としなくなっていた」<sup>(註5)</sup>といった心の状態を生じるのであろう。ただ、描き出されたイメージは、戦争体験から60年以上経った後のものでも、その結実したものを、われわれは貴重な創作物として受け止めなければならない。



1. 浜田知明《忘れえぬ顔A》2008年  
ボールペン、鉛筆、紙 神奈川県立近代美術館蔵



2. 浜田知明《忘れえぬ顔B》2008年  
ボールペン、鉛筆、紙



3. 浜田知明《夜行軍、雨》2008年 鉛筆、紙



4. 浜田知明《夜行軍、山を行く砲兵隊》2008年  
ボールペン、水彩、紙

※挿図の撮影は全て藤本健八氏。

※挿図1の《忘れえぬ顔A》は、2010年7月-9月 葉山館で開催された「浜田知明の世界展」後、浜田知明氏から当館に寄贈された。

註4) 『失われた時を求めて』12巻第7篇『見出された時』集英社文庫p.305 鈴木道彦訳

註5) 前掲書 集英社文庫 p.374

榎山昌夫

19世紀後半のロシア絵画を代表する画家イリヤ・エフィモヴィチ・レーピン(1844-1930)の日本における受容の歴史は、日本の西洋近代美術受容の中でも、政治的影響、この場合、日本とロシア(ソヴィエト連邦)の外交とそれぞれの社会状況の影響を顕著に受けている。本稿は、日本におけるこのレーピンの受容の展開を明治時代から昭和まで概観し、その特質を明らかにするものである。

## I 明治時代

### 日本人によるレーピンについての初期の言及

「エリヤス・レーピン、(Elias, Repin)(一千八百四十四生)は、當代の大家で、露人の性格を畫き現はす事に妙を得て居る。此人の作品中の有名なものは、コザック兵が陣中で戯れに土帝へ上つる奏文を書いて居る様子を畫いたもので、中々賑やかな、至て活氣の有る圖だ。又此人はトルストイの肖像を幾つもかいた。」<sup>\*1</sup> 日露戦争の最中、黒田清輝は明治38(1905)年の白馬会機関誌『光風』創刊号と第3号に「露西亞の藝術」を連載し、第3号でレーピンについて上記のように語っている。黒田はロシアを訪れたことはなく、この記事は伝聞やフランスの出版物に基づいている。

一方、レーピンの作品を実見し、その印象を出版物で広く伝えたおそらく最初の日本人は徳富蘆花である。蘆花はロシア第一革命がまだ終息していない明治39年7月、兄蘇峰の10年後、ヤースナヤ・ポリャーナに文豪レフ・トルストイを訪ねた。蘆花はトルストイ邸母屋2階の広間に掛っていた「露國近代の大家ゲー、レーピン、クラムストイ[ママ]諸家の筆になるさまへ」の翁の肖像、夫人及びタチアナ子の肖像」を見ている。<sup>\*2</sup> その後、蘆花はサンクト・ペテルブルクのアレクサンドル3世美術館(現在の国立ロシア美術館)とモスクワの絵画陳列館(現在の国立トレチャコフ美術館)を見学し、その見聞を基に『順禮紀行』の一章を割いてロシア絵画を論じている。「近代露國の大畫家の中に就て、トルストイ翁は想に故ゲーを推し、オにレーピンに許しぬ。[中略]レーピンの作は數多し。『土耳其史丹[トルコサルタン]への返書』と題して、昔の豪勇粗剛なるコッサックの健兒等が打寄つて傲慢なる史丹に愚弄的返翰をしたむるのさまを描きたるは、畫柄も殊に面白し。トルストイ翁の肖像は數多レーピン[ママ]に描かれて、其の白衣黒袴兩手を帯にはさみて跣足に立てる立像の如きは、先年翁が國教會の爲に破門せられたる時、其の反動的示威運動として滿都の同情者等が争ふて其前に花束を山の如く積み上げたる紀念あり。」<sup>\*3</sup> しかし、蘆花にもっとも強い印象を与えたレーピンの作品は「1581年11月16日のイワン雷帝とその息子イワン」(1885年、以下『イワン雷帝』)であり、「野生のまなる狂烈王が、壯年の其子を怒に任せて一槍刺し、はつと驚きて槍投げ棄て、髪は逆立ち眼は飛び出でんとしつ、手負の吾子を横抱に抱きて噴出づる頭の血を左手に押へかねたるに、子は知死期時の色すでに蒼ざめ來りて、而して一滴の涙其頬に光れる其畫よ。小説罪と罰を出す露西亞ならでは決して此畫を出す能はじ」と、その絵を鮮明に叙述している。<sup>\*4</sup>

明治38年の蘆花の「順禮」の目的は、キリストの聖地を訪れることと彼が日本で最初の伝記を著したトルストイに会うことであったが、<sup>\*5</sup>トルストイは、その前年に『平民新聞』などが翻訳紹介した日露戦争を批判する彼の非戦論によって日本で注目されていた。<sup>\*6</sup>つまり、黒田や蘆花によるレーピンの最初の紹介は、日露戦争がきっかけであったと言える。

ところで、蘆花が実見したトルストイの「白衣黒袴兩手を帯にはさみて跣足に立てる立像」とは『裸足のトルストイ』(1901年)のことである。この絵は、トルストイの

典型的な肖像として、明治37(1904)年に日高有隣堂が刊行した『トルストイの日露戦争観』の口絵に掲載されている。これを描いたレーピンの名は記されていないものの、レーピンの作品が制作から3年後には日本の書籍に掲載されているという事実は指摘しておくべきであろう。

その後、日本の美術関係者が西ヨーロッパから帰朝する際に、ロシアでレーピンの作品を見る機会が増える。鹿子木孟郎は2回目のパリ留学からの帰途、明治40年12月23日にモスクワのトレチャコフ美術館で、審美書院編集員の相見繁一は日英博覧会が開催されたロンドンからの帰途、明治43年にトレチャコフ美術館で、石井柏亭はパリ遊学からの帰途、大正元年にトレチャコフ美術館で、山本鼎もパリ留学からの帰途、大正5年にペトログラード(サンクト・ペテルブルク)のアレクサンドル3世美術館とモスクワのトレチャコフ美術館でレーピンの作品を見ている。<sup>\*7</sup>

その中でも、石井柏亭が2日にわたって訪れたトレチャコフ美術館についての綿密な記録は、翌年の『藝術 東西近古藝術之評論』創刊号の巻頭で発表され、翌々年に刊行された『歐洲美術通路』に再録されている。柏亭は「第八室に至つて御大将レーピンの諸作に逢着した。彼れが近代露西亞繪畫史上如何に重きをなして居るかはあまりに顯著な事實で特に日ふまでもない。彼れの製作の範圍は實に多面であつて、歴史人事肖像のあらゆるものに及んで居る。斯う云う畫材の多方面なこと其寫實主義と純粹に國民的なことに於て、彼れは獨逸のメンツェル[ママ]と好一對である」<sup>\*8</sup>と語り、ロシア美術におけるレーピンの重要性を認める一方で、自らは「トルコのスルタンに手紙を書くザポロージェのコッサック」(以下『ザポロージェのコッサック』)<sup>\*9</sup>や『イワン雷帝』といった「組立畫よりも」「單純な肖像画の類」の方が好ましく、とりわけ前者の「騒がしい熱色は予の同感を得にくい」と述べている。<sup>\*10</sup>

## II 大正時代

### レーピンの受容とトルストイ

日本におけるレーピンの受容に役買ったのは、明治時代末から大正時代にかけての白樺派を中心とした「トルストイ熱」であった。明治44年1月発行の『白樺』第2巻第1号には、『裸足のトルストイ』の上半身が「レーピン」作「レオ・トルストイ」として、トルストイからの書簡と共に口絵に掲載され、それらに続いて柳宗悦が「杜翁が事ども」を寄稿している。また、同月に刊行された昇曙夢『偉人トルストイ伯』の口絵のひとつには、「レーピン畫伯筆」として「トルストイの肖像」(1887)が掲載されているほか、トルストイが亡くなる数ヶ月前にレーピン夫妻がヤースナヤ・ポリャーナを訪れた際には、トルストイが自らの女性観について語り、アナートル・フランス、アントン・チャーホフ、アレクサンドル・クプリーンの小説を朗読した逸話が紹介されている。<sup>\*11</sup>また、大正5年9月に創刊された『トルストイ研究』の表紙絵や挿絵には、レーピンによるさまざまなトルストイ像が用いられている。<sup>\*12</sup>

また、大正10年の機山閣書店の「泰西諸名家の面影(繪業書)」の広告には、レーピンによるロシアの著名な作家や作曲家の肖像画が、複製繪業書として日本で流布していたことが窺える。<sup>\*13</sup>その宣伝文句には、「差寄り今日までの刊行しました内での秀逸を御披露しますと、先ずトルストイでは畫聖レーピン筆になる偉人の四容で、その生前の颯爽たる風姿、書齋裡若くは農夫姿の彼、最後に永き旅に上がる彼まだドストエフスキー、ゴーリキー、大音楽家リムスキー・コルサコフなどはいづれも自信のあるものです」と書かれている。

7 鹿子木孟郎「モスクワ懷古」『露西亞藝術』第2巻第2号(通巻4号)(大正11年2月)21-22頁。相見繁一「莫斯科の美術」『美術之日本』第2巻第10号(明治43年10月)19-23頁。石井柏亭「露西亞の近代繪畫を論ず」『トレチャコフ畫堂』『藝術 東西近古藝術之評論』第1号(大正2年4月)1-15頁(石井柏亭『歐洲美術通路』下巻、東雲堂書店、大正2年、278-296頁に再録)。山本鼎「歸路の美術上所見」『美術』第1巻第5号(大正6年3月)180-185頁。山本鼎「レーピンの畫」『露西亞評論』第1巻第7号(大正7年9月)88-91頁。山本鼎「露西亞の繪畫」『露西亞藝術』第2巻第2号(通巻4号)(大正11年2月)1-4頁。

8 石井「露西亞の近代繪畫を論ず」『トレチャコフ畫堂』10-11頁。

9 同じ画題で構成が異なる作品が国立ロシア美術館(1880-1891年)とハリコフ美術館(1889-1896年)にあり、トレチャコフ美術館には前者の習作(1880-1890年)がある。

10 石井「露西亞の近代繪畫を論ず」『トレチャコフ畫堂』11頁。

11 昇曙夢『偉人トルストイ伯』春陽堂、明治44年、70-72頁。

12 例えば、創刊号17頁にはレーピンの名は無いものの『ヤースナヤ・ポリャーナの丸テーブルで書くレフ・トルストイ』(1891年)が、第1巻第3号(大正5年11月)33頁には「レヴィン畫」として『草を刈るレフ・トルストイ』(1887年)などが、第2巻第3号(大正6年3月)表紙には「レーピン畫」としてトルストイ夫妻の肖像画が、同65頁には「レヴィン畫」としてトルストイ像が、第2巻第7号(大正6年7月)5頁には「裸足のトルストイ」が、第2巻第12号(大正6年12月)表紙には「ハモウニキの自宅で仕事をすレフ・トルストイ」(1893年)の部分が、第3巻第4号(大正7年4月)には「森の中で休息するレフ・トルストイ」(1891年)が掲載されている。

13 『露西亞藝術』第2巻第3号(通巻5号)(大正10年3月)裏表紙見返し。

1 黒田清輝口述「露西亞の藝術(二)」『光風』第3号(明治38年9月)9頁。

2 徳富健次郎『順禮紀行』警報社書店、明治39年、381頁。

3 上掲書436-437頁。

4 上掲書437-438頁。

5 徳富健次郎『拾貳文豪第拾巻 トルストイ』民友社、明治30年。

6 「トルストイ翁の日露戦争論」幸徳秋水／堺枯川(利彦)訳、『平民新聞』第39号(明治37年8月7日)第1-6面、同年6月27日にThe London Times紙に掲載された“Bethink Yourselves” trans. by V. Tchertkoff and I. F. M.からの翻訳。『東京朝日新聞』にも杉村楚人冠の翻訳で「トルストイ伯 日露戦争論」と題して8月2日から20日まで連載された。前者は9月12日に文明堂からトルストイ伯「トルストイの日露戦争論」平民社訳として単行書として出版されたが、単行書としては8月20日に発行されたトルストイ「トルストイの日露戦争観」加藤直士訳、日高有隣堂、明治37年の方が早い。英文は『時事思潮』(9月1日)に転載された。

## 日本におけるレーピンについての評論の展開と社会状況

一方、トストイとは無関係の、画家レーピンについての詳細な評論も現れた。明治45年2月と3月に発行された『美術新報』第11巻第4号と第5号には、森田龜之輔が「泰西現代巨匠傳叢[15] 露西亞の巨匠レーピン」を連載し、ロシア絵画の歴史を概観した後で、レーピンの主要な作品について述べ、挿図にレーピンの写真と主要作品の図版を掲載している。<sup>\*14</sup>

そして、レーピンについての言及は、センセーショナルな誤報によって急増する。大正7年7月30日の『東京朝日新聞』には、23日ロンドン特派員発として「露國の世界的天才畫家 レピン翁餓死す レニン政府の藝術家壓迫」という記事が掲載された。<sup>\*15</sup> この記事に談話を寄せているのは黒田清輝である。「氏の作風は他の一般の露國畫家同様に繪其物よりも感激といふ方面を主とする傾向があつて例の蔭の暗い繪です併し全くクラシックでは無い[中略]力強い自然革命派と云ふ事が出来る即ちロシアの近代スクールを創始した一人であると云へるのです」。この記事は翌日の同紙にも《ザボロージェのコサック》(国立ロシア美術館)を挿絵に加えて再掲載されている。これは、前年のロシア十月革命に続く内戦下で、記者によれば「杜翁などと共に自由主義の人と知られ」るレーピンが、レーニン政府の犠牲になったと訴えるもので、この大正7年夏にシベリア出兵に踏み切る日本政府の動向とも無関係ではない。

この悲報に対して、美術雑誌とロシア関係雑誌がすぐに記事を載せた。大正7年9月発行の『中央美術』には大庭柯公が、レーピンのふたつの代表作《ザボロージェのコサック》と《ヴォルガの舟曳き》(1870-1873年)について論じ、とりわけ後者については、「奴隷解放後の十二年に描かれた此の畫の効果が」「露國下級労働者の状態」「の改良に與かつて力あつたことも、明白なる事實である」と、その社会的意義を強調している。<sup>\*16</sup>

また、同月発行の『露西亞評論』には、レーピンについての3つの記事が掲載された。中村白葉は画集の解説を翻訳してレーピンの経歴を詳細に伝え、一記者は《イワン雷帝》が5年前に暴漢に切り裂かれた事件を紹介している。そして、山本鼎は、2年前にロシアで見た作品の印象を語っているが、その内容については後で触れる。<sup>\*17</sup>

さらに、「荒城の月」で知られる土井晩翠も、同じ大正7年9月に、「レーピンを憶ふ」という詩を詠んでいるが、「大倭[おおやまと]瑞穂の邦に米無しと／叫ぶ動乱、彼にして／大露の騷レーピンは餓ゑぬ。」<sup>\*18</sup> という一節は、この年の日本の米騒動が背景にある。

このように、第一次世界大戦から十月革命というロシアの社会状況、そして、シベリア出兵や米騒動といった日本の社会状況を背景に、レーピンの死の誤報は結果的に、共産主義の波及を恐れた日本で、新しい共産党政権の下で虐げられる正統な芸術文化の象徴として「政治的に」扱われたのである。

一方で、新興芸術運動が興隆した大正時代に、日本の美術関係者の中には、レーピンを始めとするロシアのリアリズム絵画が純芸術的ではないことを批判する者もいた。

その中でも、山本鼎は一貫して否定的な意見を述べている。ロシアで見た農民工芸やトストイの影響を受けた鼎の後の農民美術運動を考えると矛盾を感じざるを得ないが、鼎はまず、自らが学んだフランス美術と比較してロシア美術の後進性を指摘する。「露西亞の近代繪畫は全々仏蘭西の影響を受けたものと云つてよいでせう、そして遠く彼れに及ばない[中略]現代露西亞第一の大家なるレーピンも達筆の點にルシアン、シモンに及ばず、まして、ジャンポール、ローランスを持つて來ればまことに貧弱にみえませう」。<sup>\*19</sup> また、「レーピンは、佛蘭西のジャンポールローランと同型の、寫實に立脚する歴史畫家で、ローランよりは手練も淺く天分も

低いが、タブローの整理には長けた、腰のすわった大家である事をうなづかせます[中略]一體に露西亞の繪畫はイリュストラシヨンの性質を有つて居て、例えば、光線、空氣、物質、個性というやうなものを表示する事に冷淡であるやうに思われます。同じ國の文學にはそれ等の感覺を表現したすばらしいものがあるのに、畫にはなぜこの感覺的純粹が示されて居ないか……」<sup>\*20</sup> と述べ、ロシア絵画が純芸術的でないことを批判している。

他方、美術評論家の仲田勝之助は、鼎らが「露西亞の社會状態、時代の背景や思潮や國民性などいふものを考慮の中に入れてられなかつた」と指摘し、西ヨーロッパ風の絵画が導入されて以来、「常に宗教的社會的政治的使命を背負ひて、純藝術的現象は幾干も起こらなかつた」ロシア絵画を論じる上で、「特に純藝術的鑑賞以外の意味内容に立ち入つて考へることも、至極重要になつて來る」と歴史的背景も含めて分析している。<sup>\*21</sup> さらに、ジャン=ポール・ローランスに師事した鹿子木は、「要するに露國の優秀なる繪畫とは、その北方の風土とその風土よりする特徴とを發露して、觀者をして同國の歴史を自然とを鑑賞せしむるに十分の成果を収めたるものを言ふべし」<sup>\*22</sup> と、レーピンに限らず、ロシア絵画にはそれ独自の啓蒙的目的や価値があることを認めている。

大正14年1月に日ソ基本条約が締結されると、その年6月発行の月刊誌『女性』の巻末には、「その文化交流の意味から[中略]ロシア美術誌上展覽會」として、ドミトリー・レヴィツキー(1735-1822)からマルク・シャガール(1887-1985)に至る18世紀から20世紀の15作家19点の作品が図版と解説文で紹介された。<sup>\*23</sup> 作品の選定は、昇曙夢と大正11年に来日したワルワラ・ブブノワが行い、図版の先頭を飾ったのはレーピンの《ヴォルガの舟曳き》である。

## III 昭和

### 単行書と展覽會を通してのレーピンの受容

レーピンを次に広く紹介したのは、戦後間もなく出版された3冊の単行書である。その嚆矢は昭和27年に刊行された嵯峨公業の『レーピン』である。<sup>\*24</sup> 作品の図版は、扉と口絵の7点に過ぎない。嵯峨とレーピンの作品との出会いは、新潮社の『世界文学全集第24巻 露西亞三人集』のカバー絵が《ザボロージェのコサック》であったことにあるという。嵯峨は主要な作品の解説を交えながら、レーピンの伝記を上手くまとめている。<sup>\*25</sup> 次は昭和28年に刊行された大月源二編の『レーピン』である。口絵には39点の作品が掲載され、巻頭の《長輔祭》(1877年)はカラー図版である。<sup>\*26</sup> 大月は、プロレタリア美術運動が瓦解した後に「レーピンを発見し」、ロシア語の文献を頼りに昭和12年11月発行の『唯物論研究』no.61に「イ・エ・レーピンに關する斷片」を発表している。<sup>\*27</sup> その文章にはレーピンやその周辺の人物による書簡や回想が交えられ、年表も添えられている。単行本はこの文章を發展させたものである。そして、3冊目は戦時中に準備された文章を昭和31年に刊行した福田新生の『レーピン伝』である。47点が口絵や挿絵として掲載されていて、巻頭の《秋の花束》はカラー図版である。<sup>\*28</sup>

レーピンの主要作品の多くがカラー図版で紹介されるには、昭和47年刊行のファブリ世界名画集を待たねばならない。<sup>\*29</sup>

日本におけるレーピンの受容で画期的であったのは、昭和50年に三越日本橋で開催された「ロシア・ソビエト国宝絵画展」に《ヴォルガの舟曳き》が出品されたことである。翌年の『第2回 ロシア・ソビエト国宝絵画展』では《ザボロージェのコサック》(国立レチャコフ美術館)が展示された。昭和53年には、第4回の展覧会企画として「ロシア絵画の巨匠 レーピン名作展」が開催され、《皇女ソフィア》(1879)な

<sup>20</sup> 山本「レーピンの畫」89頁。

<sup>21</sup> 仲田勝之助「露西亞現代の美術界」『中央文学』第5年1号(大正10年1月1日)113-114頁。

<sup>22</sup> 鹿子木「モスコウ懐古」22頁。

<sup>23</sup> 「ロシア美術画報」『女性』第7巻第6号(大正14年6月1日)117-124頁、ブブノワ/昇曙夢選「ロシア美術書報解説」同125-129頁。

<sup>24</sup> 嵯峨公業「レーピン」三杏社、昭和27年。

<sup>25</sup> 嵯峨公業「レーピンの思い出」『ソヴェト映画』第2巻第5号(昭和26年6月)17-19頁。この回想は、戦後、シベリア抑留から戻った後に浅草でソヴェト映画「レーピン画集」を見て記したもので、上掲書の序文として再録されている。チエホフ、ゴーリキー、ゴゴリ『世界文学全集第24巻 露西亞三人集』秋庭俊彦/原久一郎訳、昭和3年、新潮社、20頁の目次欄外には「カバーの繪——『タラス・ブリーバ』中のコザック會議」と誤って記され、嵯峨もそう思っていた。

<sup>26</sup> 大月源二編「レーピン」青木書店、昭和28年。

<sup>27</sup> 大月源二「イ・エ・レーピンに關する斷片」『唯物論研究』no. 61(昭和12年11月1日)56-69(728-795)頁。

<sup>28</sup> 福田新生「レーピン伝」洋々社、昭和31年。

<sup>29</sup> 木村浩解説「ファブリ世界名画89 イリヤ・エフィモヴィチ・レーピン」、平凡社、昭和47年。

<sup>14</sup> 森田龜之輔「泰西現代巨匠傳叢[15] 露西亞の巨匠レーピン(上)」『美術新報』第11巻第4号(通巻209号)(明治45年2月)115-119頁、「泰西現代巨匠傳叢[15] 露西亞の巨匠レーピン(下)」同第11巻第5号(通巻210号)(明治45年3月)148-151頁。中絵に《ザボロージェのコサック》(国立ロシア美術館)、挿絵に《夕べの宴》(1881年)、《裸足のレフトロストイ》、《ケースルク県の十字架行進》(1880-1883年)、《思いがけなく》(1884-1888年)、《3人の無実の死刑囚を救うミラの聖ニコラス》(1888年)という代表作が掲載されている。

<sup>15</sup> 「露國の世界的天才畫家 レピン翁餓死す レニン政府の藝術家壓迫」『東京朝日新聞』1918年7月30日、第5面。

<sup>16</sup> 大庭柯公「餓死の報あるレーピン」『中央美術』第4巻第9号(大正7年9月)44-47頁。

<sup>17</sup> 中村白葉訳「イリヤ・エフィモ井ツチ・レーピン——レピンの畫集より——」『露西亞評論』第1巻第7号(大正7年9月)81-86頁、一記者「レーピンの事ども」同86-88頁、山本鼎「レーピンの畫」同88-91頁。

<sup>18</sup> 土井晩翠「レーピンを憶ふ」『曙光』金港堂書籍、大正8年、65-69頁。

<sup>19</sup> 山本「歸路の美術上所见」183頁。



どレーピンの作品30点が並べられ、日本における最初の本格的な個展となった。<sup>\*30</sup>

ところで、昭和36年10月18日の『朝日新聞』には「レーピンの名画盗まる 大阪・住友電工役員室から 日本に二点だけ」という、再びセンセーショナルな記事が掲載されている。<sup>\*31</sup> 記事によると、「この絵は大正時代に、大蔵公望男爵がロシア旅行の途中で手に入れ持ち帰ったもの」という。この《婦人像》は、昭和7年6月26日から28日に美術研究所で開催された「西洋近代繪畫展覽會」で一般に展覧されている。<sup>\*32</sup> この展覧会は、日本に招来されている西洋繪画の名品の内、東京を中心とした蒐集家の所蔵品を集めたもので、現在ブリヂストン美術館にある細川護立旧蔵のセザンヌの《自画像》などを含む、19世紀後半から20世紀初頭のフランスを中心とする20名の画家による29点の作品で構成されて、3日間の会期中に4200人以上が訪れた。矢代幸雄はレーピンの《婦人像》について「他の陳列畫とは如何にも縁が遠い」と述べ、トレチャコフ美術館にあるレーピンの歴史画については「是等の大歴史畫は露西亞の歴史そのものに興味の薄い他國人には、餘りに藝術的には訴えて來ない」<sup>\*33</sup>と、山本鼎の議論を繰り返している。いずれにせよ、《婦人像》は日本で最初に公開されたレーピンの作品である。『朝日新聞』の記事の見出しに記された「二点」の内のもうひとつは、後に坂田武雄が横浜美術館に寄贈した《ロシア人の少年》(1883年)のことである。実は、さらにもう1点のレーピンの作品が日本に請来されていたようである。それは画家辻永〔つじひさし〕旧蔵の油彩画《士官の肖像》で、福田新生によれば、戦災で失われた可能性が高い。<sup>\*34</sup>

昭和48年10月に田中角栄首相がソヴィエト連邦を訪問し17年ぶりに日ソ首脳会談が実現した。その2年後にレーピンの《ヴォルガの舟曳き》が日本で公開されたことは、この二国間の外交とまったく無縁ではない。事実、この昭和50年には、黒沢明監督の日ソ合作映画「デルス・ウザーラ」が公開され、モスクワ国際映画祭の金賞とアカデミー賞の外国語映画部門を受賞している。

イリヤ・レーピンの主要な作品には、祖国ロシアの社会状況や歴史を反映したものが少なくないが、その日本での受容も、黒田清輝や徳富蘆花による初期の言及から、《ヴォルガの舟曳き》の日本での公開に至るまで、日本とロシア(ソヴィエト連邦)の外交とそれぞれの社会状況を反映していたのである。

<sup>30</sup> 《皇女ソフィア》の正しい名称は《ノヴォデヴィチ修道院に幽閉されて1年後の皇女ソフィア・アレクセエヴナ、1698年に銃兵隊が処刑され、彼女の使用人が拷問されたとき》。

<sup>31</sup> 「レーピンの名画盗まる 大阪・住友電工役員室から 日本に二点だけ」『朝日新聞』昭和36年10月18日、第11面。

<sup>32</sup> 『美術研究』第9号(昭和7年9月)は「西洋近代繪畫展覽會圖録」となっている。

<sup>33</sup> 矢代幸雄「西洋近代繪畫展覽會に就いて」上掲書25(325)頁。

<sup>34</sup> 福田「レーピン伝」2頁。

## 調査研究・執筆等の発表

- 1) 当館開催展覧会に伴う調査研究・発表
  - 展覧会図録への発表:12点36件(詳細は各展覧会活動ページの各展覧図録内容を参照)
  - 外部の媒体への発表:7媒体19件
- 2) 所蔵作品や館内の活動にかかわる調査研究・発表
  - 当館の刊行物への発表:2媒体(年報、たいせつな風景)5件
  - 外部の媒体への発表:3媒体3件
- 3) その他の調査研究・発表
  - 外部の媒体への発表:13媒体15件

## 外部資金の活用

- 1) 外部資金を活用した調査研究
  - 科学研究費補助金(独立行政法人 日本学術振興会)
    - 「アート・多文化・伝統・身体・メディアを活用する表現と協同の創発的な学びの場の開発」研究分担者(稲庭彩和子)
    - 「瀧口修造におけるコラボレーションと集団的想像力」研究分担者(朝木由香)
  - 研究助成(公益財団法人ポーラ美術振興財団)
    - 「シャルロット・ペリアンと日本」(長門佐季)
- 2) 外部資金を活用した展覧会・事業
  - 協賛金助成(株式会社資生堂)
    - 「プライマリー・フィールド II」展
  - 美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業(文化庁)
    - 「美のちから・生きるちから 葉山 | 鎌倉アート・プラットフォーム2010」

## 講師派遣・外部委員等就任

- 1) 講演会講師等派遣(当館主催の学校連携プログラム以外の講師派遣)

実施日	内容	対象	会場	参加者数	主催	実施者
2010年6月23日	美術スクールセミナー講師	2年生	北鎌倉女子学園中学校	90	北鎌倉女子学園中学校	奥野美香
7月7日	「学校教育における美術館との連携」	指導主事	葉山町保育園・教育総合センター	45	湘南三浦教育事務所	稲庭彩和子
7月23日	「教員研修講座」講師	葉山町・逗子市立小・中学校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	20	葉山町教育研究所	稲庭彩和子
7月31日	「新しい神話がはじまる、古賀春江の全貌」展講座	一般	石橋美術館	70	石橋美術館	橋 秀文
8月5日	「ことばによる表現やコミュニケーション能力を伸ばす授業をめざして」講師	小田原市、足柄下郡内中学校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	16	小田原・足柄下地区中学校教育研究会	稲庭彩和子
8月7日	「新しい神話がはじまる、古賀春江の全貌」展スペシャルギャラリートーク	一般	石橋美術館	80	石橋美術館	長門佐季
10月2日	「多様化する国際展ー横浜トリエンナーレが目指すもの」パネリスト	一般	ヨコハマ創造都市センター	100	横浜トリエンナーレ組織委員会	水沢 勉
10月15日 10月29日	美術館学入門	1～3年生	神奈川県立藤沢清流高校	10	神奈川県立藤沢清流高校	太田泰人 山内舞子
11月18日	「1年生職業講演会」講師	1年生	葉山町立葉山中学校	146	葉山町立葉山中学校	稲庭彩和子
11月25日	「公民館と美術館との連携のあり方について」	公民館長、運営審議会委員	ヤングコミュニティセンター(厚木シティプラザ)		神奈川県公民館連絡協議会	太田泰人
11月30日	造形科学系特別教育プロジェクト(アート、メディア、テクノロジー)	大学生、教官、一般	京都工芸繊維大学	40	京都工芸繊維大学	太田泰人
12月12日	「版に世界を刻み込む」	一般	伊丹市美術館	100	伊丹市美術館	水沢 勉
2011年2月14日	「神奈川県立近代美術館への招待、コレクションと展覧会」	市内60歳以上	鎌倉市教養センター	200	鎌倉市社会福祉協議会	水沢 勉

2) 外部委員等就任

職員名	内 容		
	団体名	職名	
山梨 俊夫	広島県立美術館	広島県立美術館美術品等収集評価委員会委員	
	静岡県立美術館	静岡県立美術館第三者評価委員	
	愛知県立美術館	愛知県立美術館美術品収集委員会委員	
	横浜市民活力推進局	横浜市美術資料収集審査委員	
	横浜市	横浜美術館指定管理者業務評価委員会委員	
	国立美術館	独立行政法人国立美術館評価委員	
	(財)神奈川芸術文化財団	財団法人神奈川芸術文化財団評議員	
	宇都宮市	宇都宮美術館美術作品等収集評価委員	
	平塚市	平塚市美術館協議会委員	
	県民部文化課	神奈川文化賞・スポーツ賞審査委員	
	北九州市立美術館	協議会委員	
	水沢 勉	平塚市美術館	平塚市美術品選定評価委員会委員
		福岡アジア美術館	福岡アジア美術館美術資料収集審査員
鳥取県教育委員会		鳥取県美術資料収集評価委員会委員	
熊本市		熊本市美術品等収集審査委員会委員	
岡山県立美術館		岡山県立美術館美術品収集評価委員	
群馬県立館林美術館		群馬県立館林美術館作品収集委員会委員	
公益財団法人ポーラ美術振興財団		選考委員	
大学共同利用機関法人人間文化研究機構		国立民族学博物館文化資源共同研究員	
京都国立近代美術館		美術作品購入等評価委員会評価員	
太田 泰人		東京国立近代美術館	東京国立近代美術館美術作品購入等選考委員
	東京都生活文化局	東京都写真美術館資料収蔵委員会委員	
	学習院大学	非常勤講師	
	東京大学	非常勤講師	
	東京大学	博士学位申請論文審査委員	
	財団法人かながわ国際交流財団	カナガワビエンナーレ国際児童画展審査員	
橋 秀文	湯河原町	湯河原町美術品等選定委員会委員	
	山口蓬春記念館	山口蓬春記念館美術品評価委員	
	神奈川県民共済生活協同組合	夏休みに描くクレヨン画コンクール審査員	
是枝 開	東京藝術大学	非常勤講師	
	神奈川県社会福祉協議会	かながわシニア美術展審査員	
	武蔵野美術大学	非常勤講師	
	多摩美術大学	非常勤講師	
李 美那	財団法人かながわ国際交流財団	カナガワビエンナーレ国際児童画展予備審査員	
	神奈川県教育局文化遺産課	文化財保護ポスター第2次審査会審査委員	
榎山 昌夫	茅ヶ崎市	美術品審査委員	
稲庭 彩和子	(株)丹青研究所	博物館の教育機能に関する調査研究協力者会議委員	
	新潟市行政経営課	新潟市美術館の評価及び改革に関する委員会	
	神奈川県公立中学校教育研究会美術科部会	パネラー	
平井 鉄寛	京都造形芸術大学	非常勤講師	
松尾 子水樹	財団法人かながわ国際交流財団	カナガワビエンナーレ国際児童画展予備審査員	

## 運営・管理報告

### 概況

#### (1) 沿革

昭和26年11月17日	神奈川県立近代美術館として開館
昭和41年 3月31日	収蔵庫及び常設展示室並びに附属棟を増設
昭和44年 3月31日	学芸員室を増設
昭和49年 8月 1日	神奈川県立近代美術館組織規則(昭和49年神奈川県教育委員会規則第9号)により、管理課、学芸課の2課を置く。
昭和59年 7月28日	別館を開館
平成 3年10月30日	本館の改修工事完了
平成13年 7月 5日	PFI事業契約の締結
平成15年 6月 1日	神奈川県立近代美術館組織規則の改正により、管理課、企画課、普及課の3課体制となる。
平成15年10月11日	葉山館を開館

#### (2) 所掌事務

県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図るため、近代美術に関する資料の収集、保管及び展示並びにこれに関する調査研究、情報提供等を実施する。

#### (3) 施設の状況

##### ア 土地

県有	(葉山館分)	面積	15,034.8㎡
		※生涯学習文化財課管理	
	(鎌倉別館分)	面積	4,937.0㎡
借用	(鎌倉館分)	面積	4,243.1㎡
		(有償分)	1,547.2㎡
		(無償分)	2,695.8㎡

##### イ 建物

県有	面積	4,034.0㎡
	(鎌倉館分)	2,435.0㎡
	(鎌倉別館分)	1,599.0㎡

PFI事業の概要については、2007年度運営・管理報告(年報2007年度、p.63)を参照

### 収入・支出の状況

収入	(千円)	
科目	金額	内訳
行政財産使用料	237	鎌倉館喫茶建物使用料等
使用料	40,807	観覧料収入
国庫支出金	1,441	教育普及事業委託金
立替収入	1,312	レストラン他光熱水費
雑入	15,629	図録販売等
教育受講料収入	115	県立機関活用講座
計	59,541	

支出(人件費含まず)	(千円)	
科目	金額	内訳
維持運営費	70,007	維持管理
美術館事業費	111,191	展覧会開催費
調査研究事業費	283	調査研究謝礼等
教育普及事業費	3,226	教育普及事業
美術作品整備事業費	6,900	美術作品購入・修復
特定事業費	233,357	維持管理業務(PFI)
県立機関活用講座開催事業費	278	
計	425,242	

(趣旨)

第1条 この条例は、神奈川県立近代美術館(以下「美術館」という。)の設置、管理等に関し必要な事項を定めるものとする。

(設置)

第2条 近代美術に関する資料の収集、保管及び展示並びにこれに関する調査研究、情報提供等を行い、県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図るため、美術館を三浦郡葉山町一色2,208番地の1に設置する。

(職員)

第3条 美術館に、事務職員、技術職員その他の所要の職員を置く。

(観覧料の納付)

第4条 美術館に展示している美術館資料を観覧しようとする者は、別表に定める額の観覧料を納めなければならない。ただし、公開の施設に展示している美術館資料の観覧については、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、特別な企画の展覧会を開催する場合の観覧料は、神奈川県教育委員会(以下「教育委員会」という。)がその都度別に定めることができる。

3 前2項の観覧料は、前納とする。

(観覧料の減免)

第5条 前条第1項本文及び第2項の規定にかかわらず、教育委員会は、次の各号のいずれかに該当する者については、観覧料を減免することができる。

(1) 教育委員会が開催する行事に参加する者

(2) 教育課程に基づく教育活動として入館する高校生(学校教育法(昭和22年法律第26号。別表備考において「法」という。)第1条に規定する高等学校及び中等教育学校の後期課程並びにこれらに準ずる教育施設に在学する者をいう。別表において同じ。)並びに児童及び生徒の引率者

(3) その他教育委員会が適当と認めた者

(観覧料の不還付)

第6条 既に納付された観覧料は、還付しない。ただし、教育委員会が災害その他特別の事情により還付するのを適当と認めたときは、この限りでない。

(資料の特別利用)

第7条 美術館資料を学術上の研究のため特に利用しようとする者は、教育委員会の承認を受けなければならない。

(利用の制限)

第8条 教育委員会は、美術館の利用者が次の各号のいずれかに該当する場合には、その利用を制限することができる。

(1) この条例又はこの条例に基づく規則に違反したとき。

(2) 他の利用者に著しく迷惑をかけるおそれがあると認めるとき。

(3) 施設、美術館資料等を損傷するおそれがあると認めるとき。

(4) その他教育委員会が必要と認めるとき。

(委任)

第9条 この条例に定めるもののほか、美術館の管理等に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

1 この条例は、昭和42年4月1日から施行する。

2 神奈川県立近代美術館条例(昭和26年神奈川県条例第46号)は、廃止する。

附 則(昭和50年12月27日条例第58号抄)

1 この条例は、昭和51年4月1日から施行する。(後略)

附 則(昭和55年12月23日条例第60号抄)

1 この条例は、昭和56年4月1日から施行する。(後略)

附 則(昭和58年12月21日条例第41号抄)

(施行期日)

1 この条例は、昭和59年1月1日から施行する。ただし、(中略)第8条の規定は公布の日から起算して8月を超えない範囲内で神奈川県教育委員会規則で定める日から施行する。

附 則(平成4年12月22日条例第62号)

(施行期日)

1 この条例は、平成5年1月1日から施行する。ただし、第2条及び第5条から第9条までの規定は、同年4月1日から施行する。

(経過措置)

2 第1条、第3条、第4条及び第10条から第12条までの規定の施行の際現に申込みを受理しているものに係る神奈川県立音楽堂、神奈川県立相模湖漕艇場、神奈川県立体育センター、神奈川県立県央地区体育センター、神奈川県立西湘地区体育センター、神奈川県立武道館、神奈川県立スポーツ会館若しくは神奈川県立相模原球場(以下「神奈川県立音楽堂等」という。)の利用又は平成5年1月1日から同年3月31日までの間の神奈川県立音楽堂等の利用(相模湖漕艇場の艇庫の利用については、平成5年1月1日から同年3月31日までの間にその利用を開始し、かつ、その引き続き利用期間が平成5年4月1日以降にまたがる場合の当該平成5年4月1日以降の期間における利用を含む。)に係る使用料については、これらの規定に規定する各条例のこれらの規定による改正後の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則(平成13年3月27日条例第22号)

この条例は、平成13年4月1日から施行する。

附 則(平成15年3月20日条例第43号)

この条例は、公布の日から起算して6月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。

(平成15年5月教育委員会規則第10号で、同15年6月1日から施行)

附 則(平成19年1月30日条例第3号)

この条例は、平成19年4月1日から施行する。

附 則(平成20年1月25日条例第1号)

この条例は、公布の日から施行する。

附 則(平成21年3月27日条例第25号)

この条例は、平成21年7月1日から施行する。

別表(第4条関係)

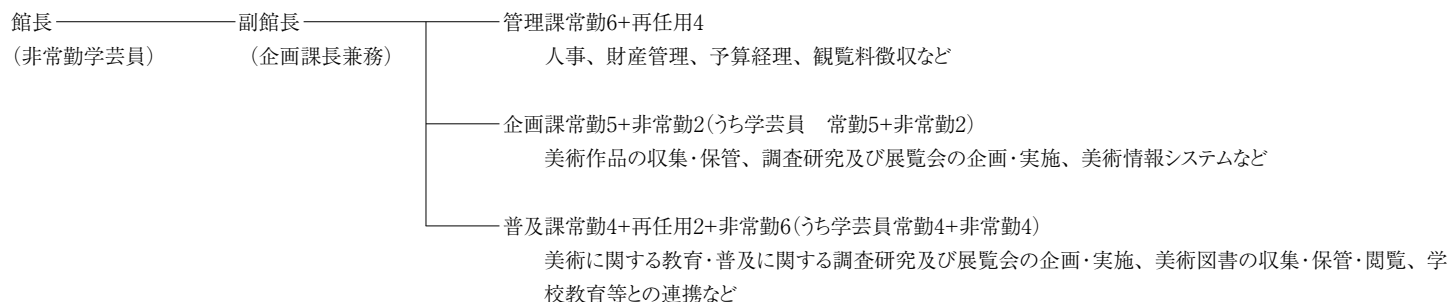
区 分	個 人	20人以上の団体
20歳以上65歳未満の者(学生及び高校生を除く。)	1人につき 250円	1人につき 150円
20歳未満の者(高校生を除く。) 学生(65歳以上の者を除く。)	同 150円	同 100円
65歳以上の者 高校生	同 100円	同 100円

備考 1 学生とは、法第1条に規定する大学及び高等専門学校、法第124条に規定する専修学校並びに法第134条第1項に規定する各種学校に在学する者をいう。

2 学齢に達しない者並びに法第1条に規定する小学校、中学校、中等教育学校の前期課程及び特別支援学校並びにこれらに準ずる教育施設に在学する者は、無料とする。

## 組織

葉山館の整備による組織の改編を行うため、神奈川県立近代美術館組織規則を改正(平成15年6月1日施行)し、従来の管理課・学芸課の2課体制から、管理課・企画課・普及課の3課体制となった。2010(平成22)年4月1日現在の職員配置状況は次のとおり。



職員数合計 31人

常勤16人(うち学芸員10人)、再任用6人、非常勤9人(うち学芸員7人)

## 施設別配置状況

葉山館 22人(常勤11人(うち学芸員7人)、再任用4人、非常勤7人(うち学芸員5人))

鎌倉館 6人(常勤 4人(うち学芸員3人)、再任用1人、非常勤1人(うち学芸員1人))

鎌倉別館 3人(常勤 1人、再任用1人、非常勤1人(うち学芸員1人))

## 職員一覧

館長 山梨 俊夫

副館長 水沢 勉

管理課	課長	橋本 千晴	普及課	課長	太田 泰人
	副主幹	會津 勉		主任学芸員	是枝 開
	副主幹	高麗 克美		主任学芸員	長門 佐季
	副主幹	杉本 邦夫		学芸員	奥野 美香
	副主幹	山口 陽弘		非常勤学芸員	稲庭彩和子(12月10日から臨時学芸員)
	主事	江成 真実子		非常勤学芸員	山内 舞子
	管理業務専門員	大貫 一郎		非常勤学芸員	土居 由美
	管理業務専門員	小神 敏行		非常勤学芸員	松尾子水樹
	管理業務専門員	薄井 健一			
	管理業務専門員	白岩 香代		[美術図書室]	
				図書業務専門員	市川 雄基
企画課	課長(兼)	水沢 勉		図書業務専門員	野田 容子
	専門研究員	伊藤 由美		非常勤司書	村上 尚子
	専門学芸員	橋 秀文		非常勤司書	藤代 知子
	主任学芸員	李 美那			
	主任学芸員	榎山 昌夫			
	学芸員	三本松倫代			
	非常勤学芸員	朝木 由香			
	非常勤学芸員	平井 鉄寛(10月1日から普及課)			
	日々雇用職員(学芸員)	西澤 晴美(10月6日から12月5日まで)			
	非常勤学芸員	西澤 晴美(12月14日から3月31日まで)			

**年報 2010(平成22)年度**

発行日:2012年2月18日

編集・発行:神奈川県立近代美術館

葉山 〒240-0111 三浦郡葉山町一色2208-1 電話046-875-2800

鎌倉 〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-1-53 電話0467-22-5000

鎌倉別館 〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-8-1 電話0467-22-7718

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp>

製作:求龍堂

**ANNUAL REPORT 2010**

Edited & published by The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama, 2012

Produced by Kyuryudo

© The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama, 2012